

327
44

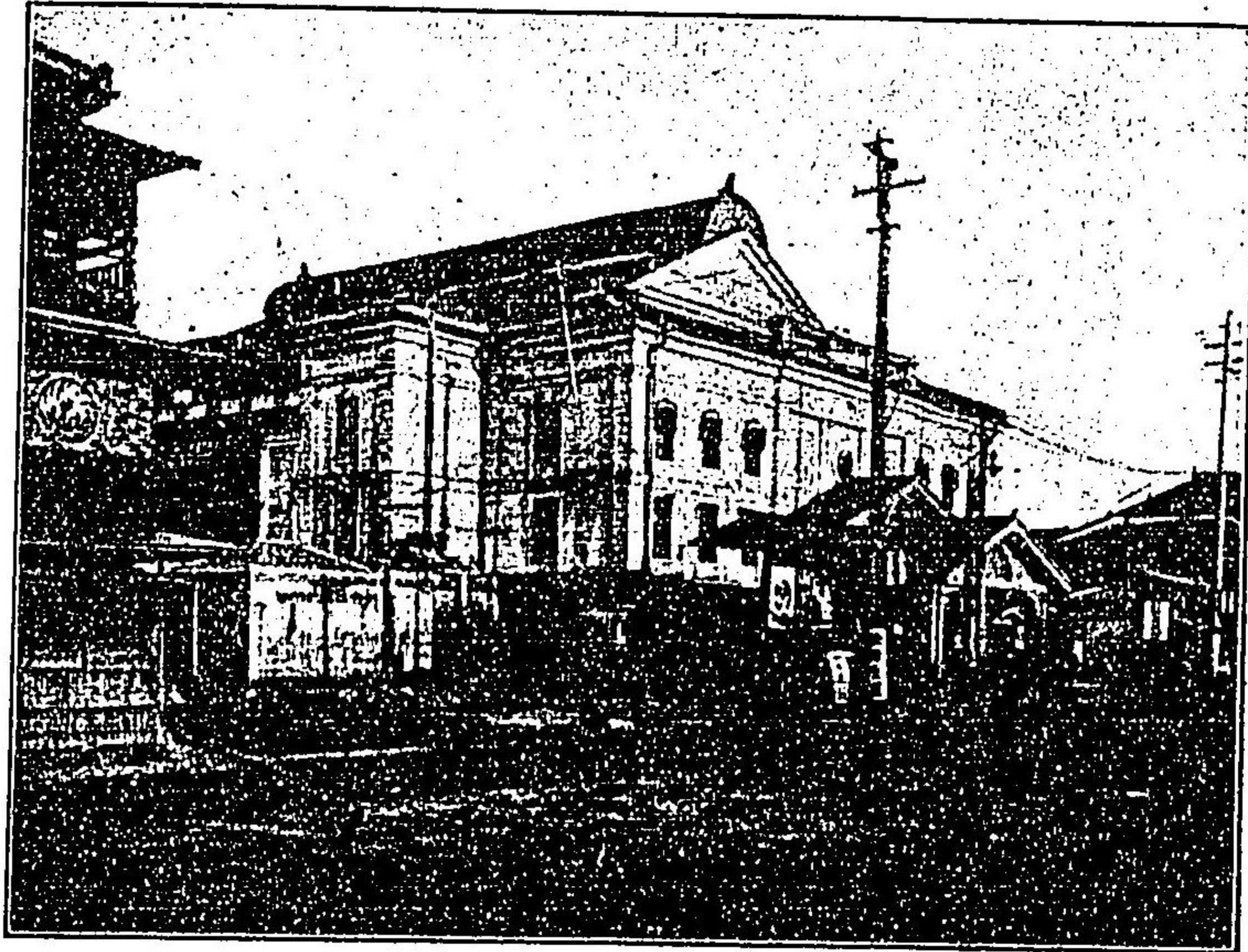
非

優

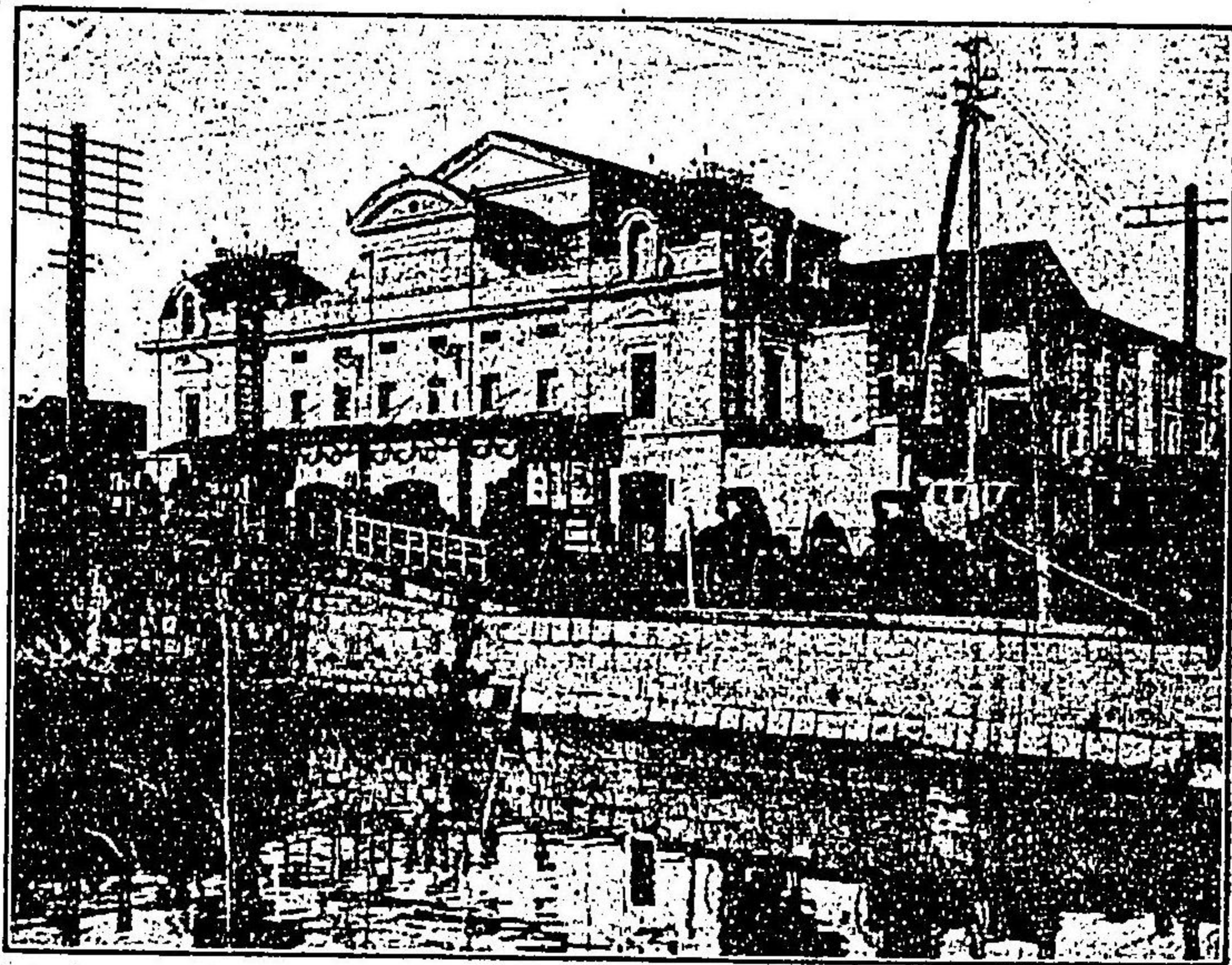
國

鑑

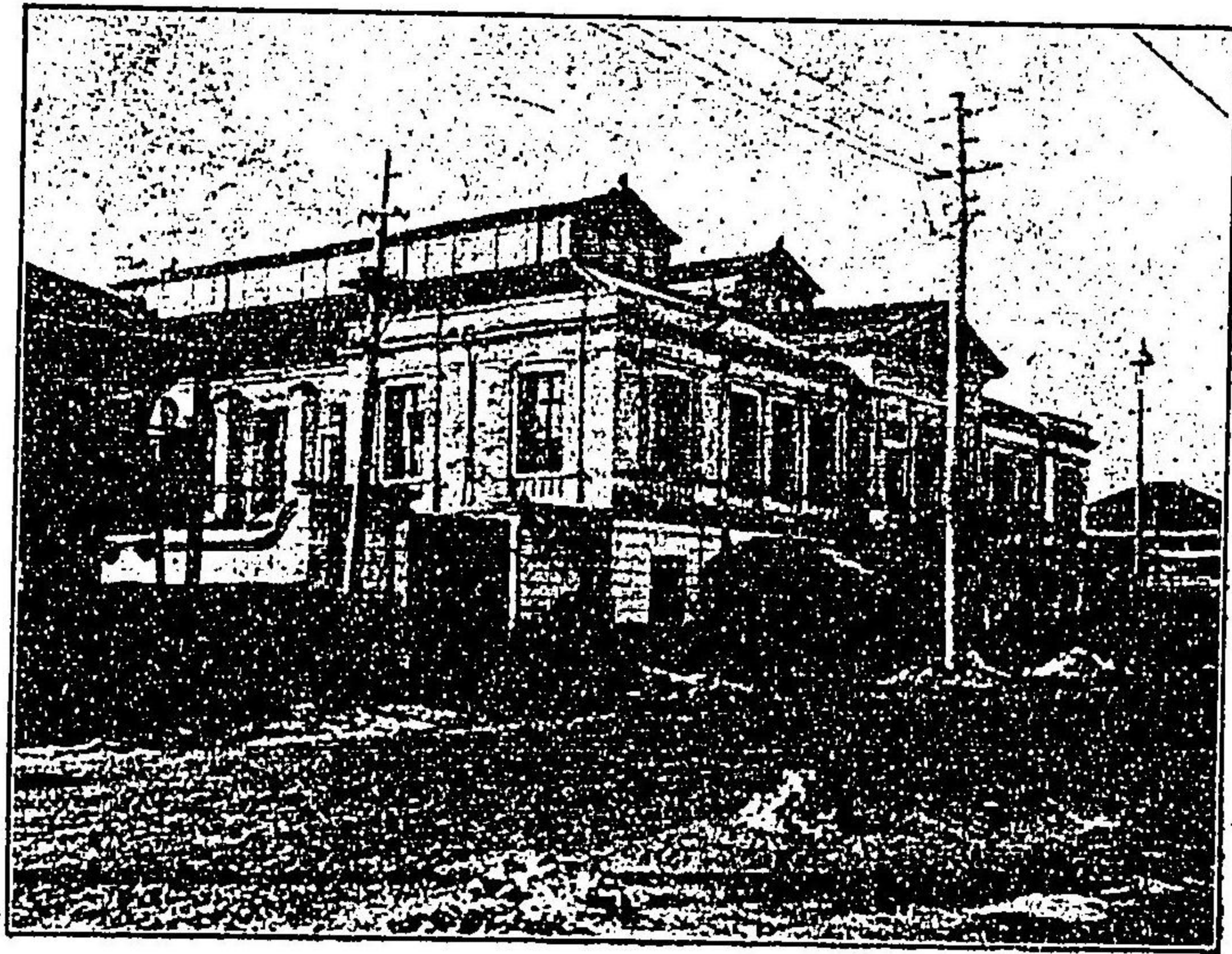
國海
49 6 4
肉衣



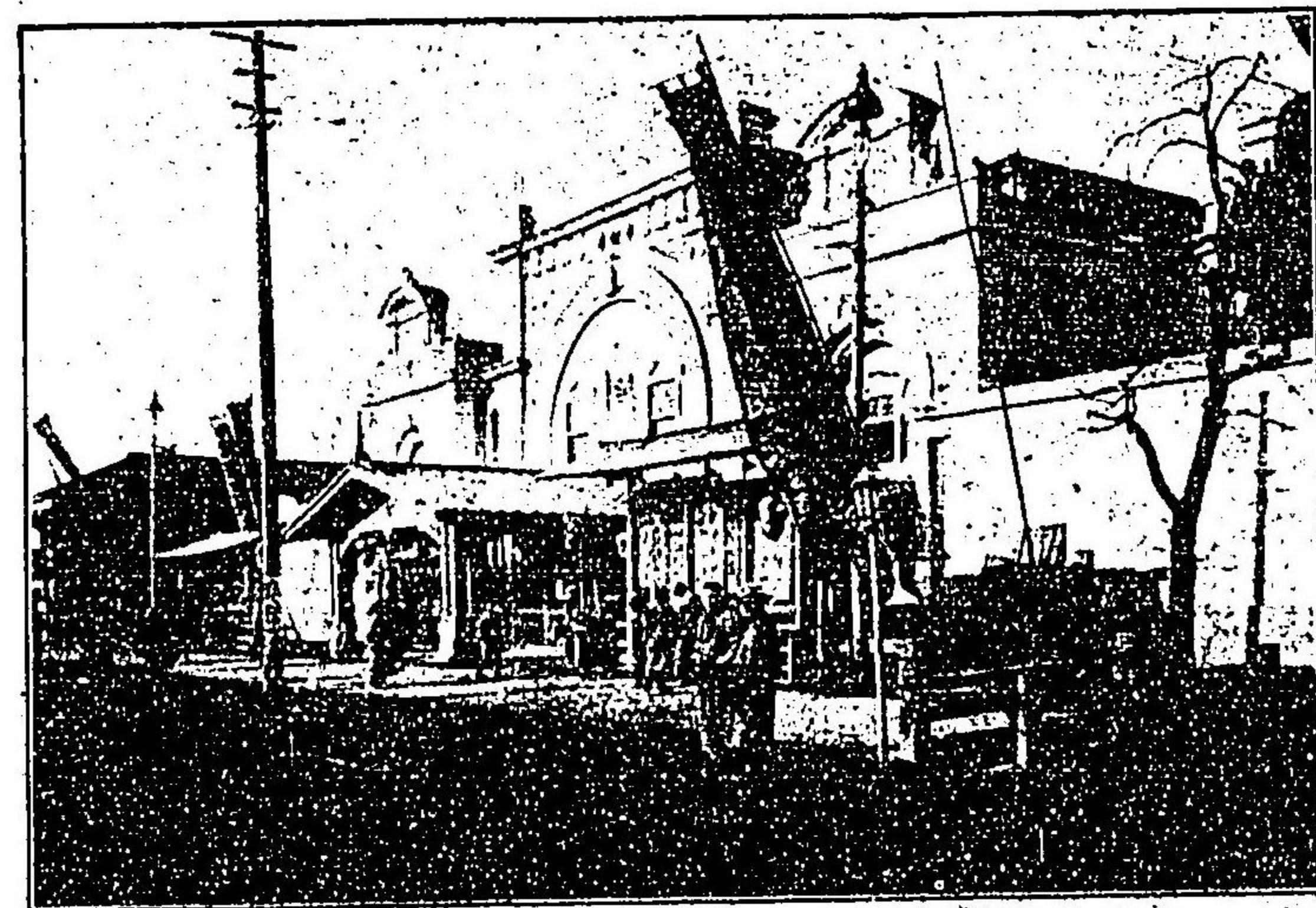
歌 舞 伎 座



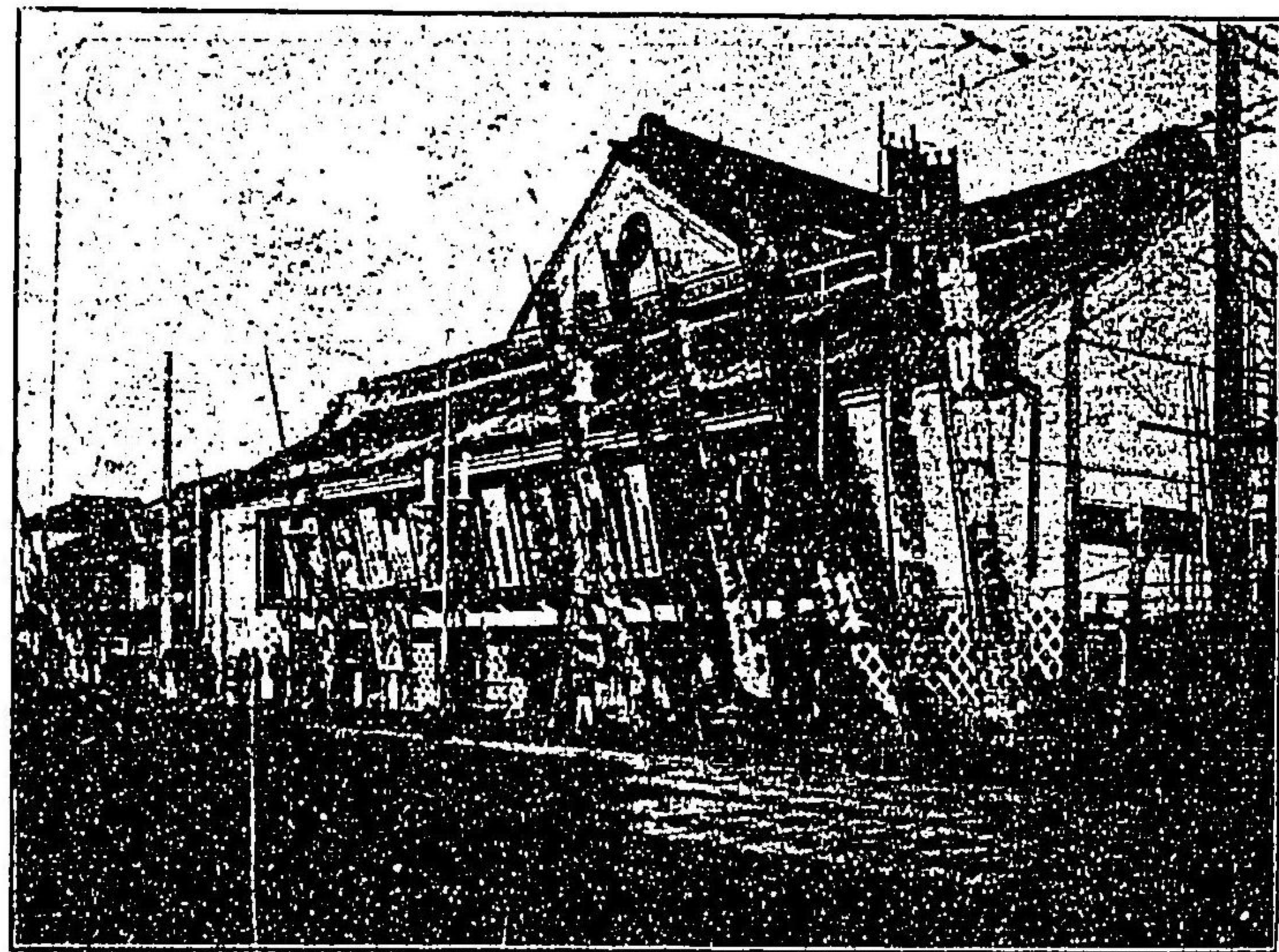
明 治 座



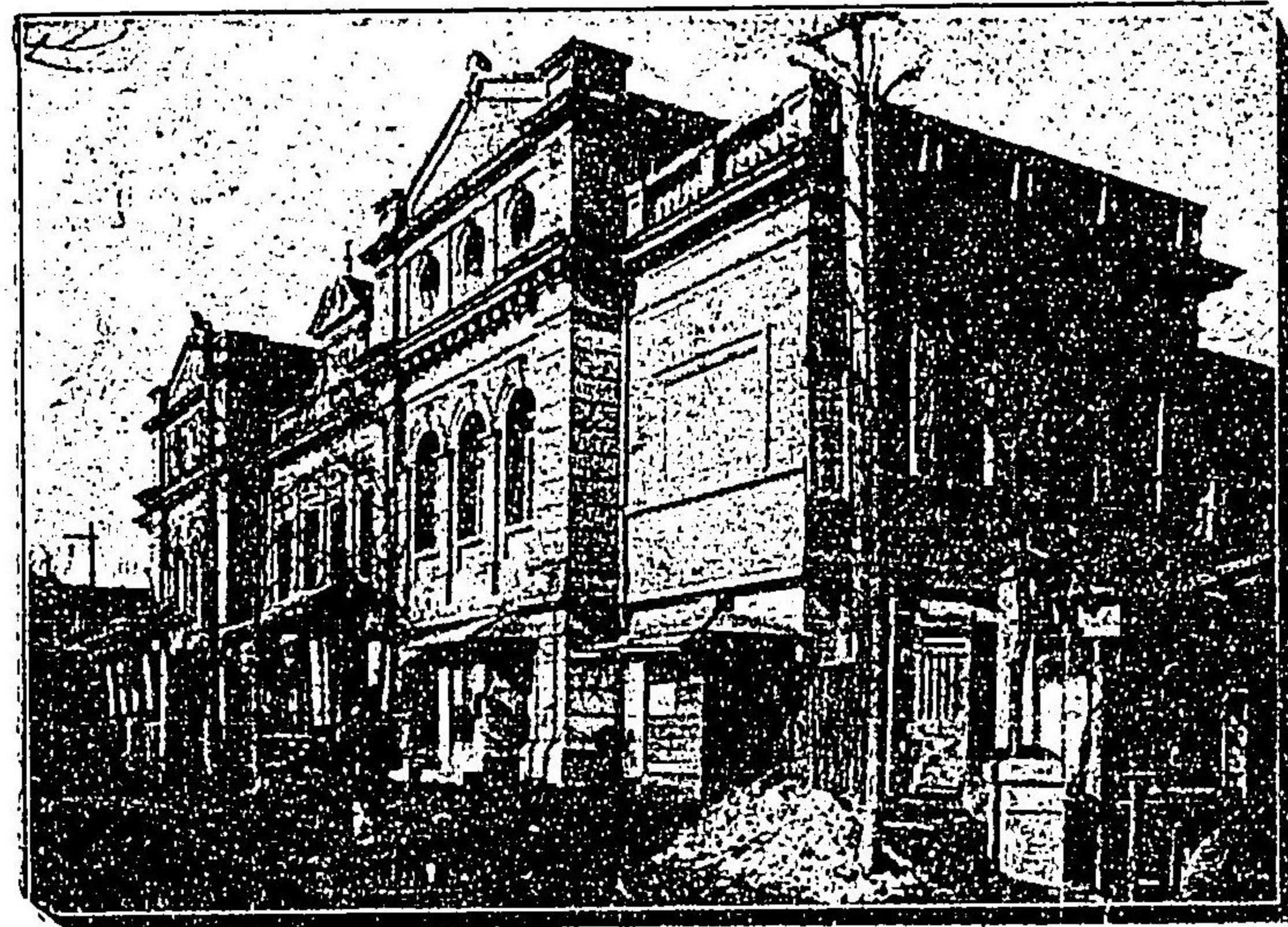
東 京 站 座



市 村 座



新 富 座



本 郷 座

目 次

一 西園寺侯爵閣下よりの來簡……………

一 柳澤伯爵閣下の序文……………

一 はしがき……………

一 凡 例……………

一 口繪寫眞版……………

一 歌舞伎俳優の部(いろは順)…………… 自一至九五

一 新派俳優の部(同)…………… 自一至六九

一 名題下新舊俳優宿所名簿(同)…………… 自一至二三

一 文士俳優宿所名簿(同)…………… 二四

一 女俳優宿所名簿(同)…………… 自二五至二六

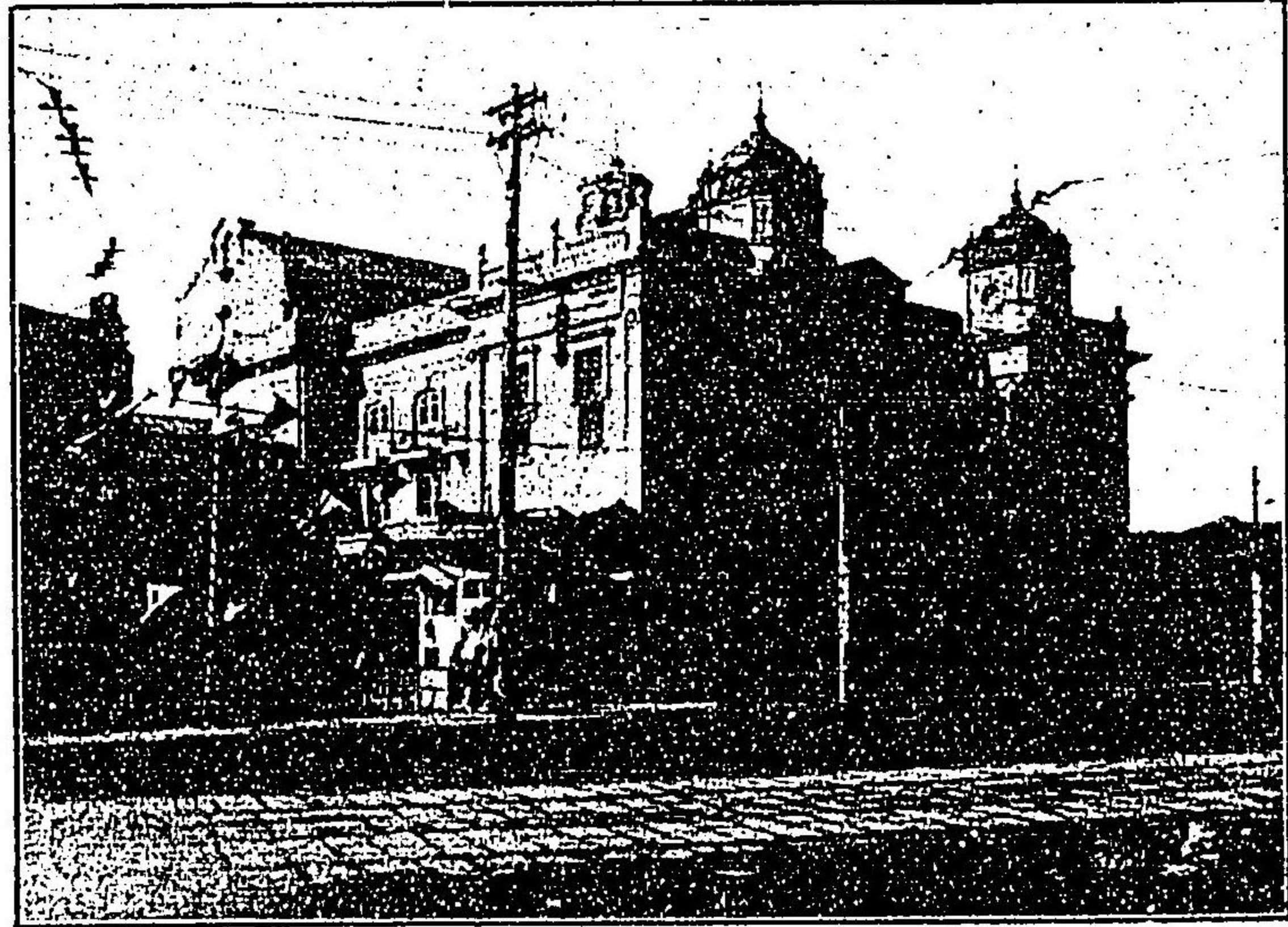
一 大阪歌舞伎俳優名鑑…………… 自二七至三一

一 明治初年以來の新舊俳優の死歿者…………… 自三二至三五

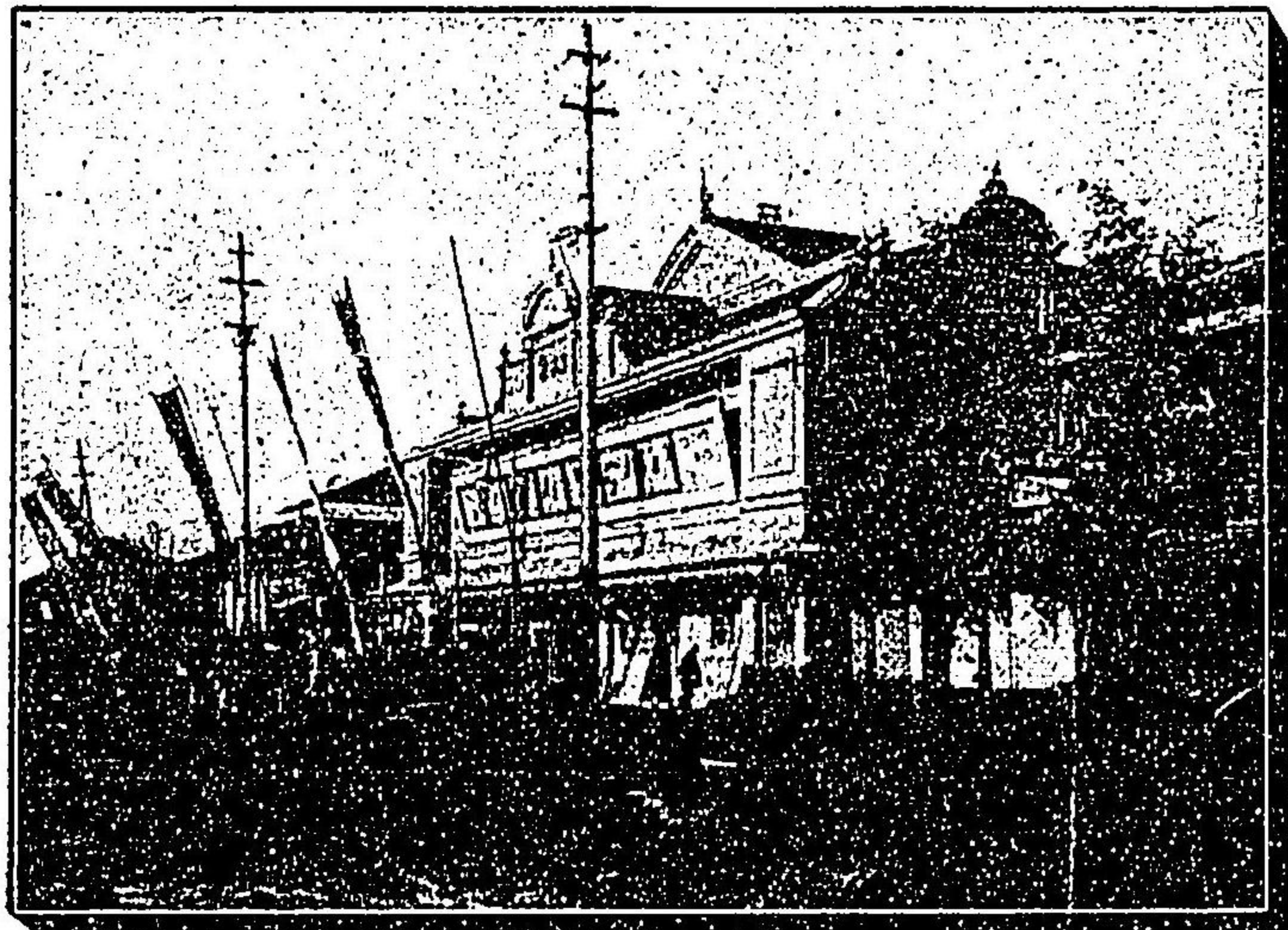
一 全國劇場一覽…………… 自三六至四七

一 雜 報…………… 自四八至五二

總 目 次



有 樂 座



眞 砂 座

西園寺陶庵侯よりの來簡

啓筆硯益々御清榮欣賀此事に候貴著俳優名鑑は未
だ其内容を詳らかに致さず候へども俳優の地位高ま
り世人の演劇に對する鑒賞も大分歩を進め候今日頗
る機宜を得たるものと存じ候君の如きは尙春秋に富
むあり將來益々斯道の爲めに御盡力あらんと囑望の
至りに候

四十二年五月

杉浦學兄

公望

序

頃者杉浦君その近く著はす所の俳優明鑑なるものを携へて予が門を叩き、之れに序せんことを請はる。即ち之れを繙くに、全國俳優を新舊兩派に區別し、更に各優をイロハ順に排列して、嗜好、氣質、閱歷、家號、家號、俳號、其他數項を記載し、一々寫眞銅版の肖像を挿入せるもの。洵に觀劇上好個の伴侶也。予は茲に著者の勤勞を謝し、敢て本書を世の好劇家諸氏に勸む。唯憾むらくは文章稍々生硬の嫌ひあり、用字往々妥當を缺くも、斯の如きは固より白玉の微瑕のみ、向上の精神に富める著者は、重版に隨うて漸次改善する所あるならん歟。杉浦君年齒漸甘、而して此の著あり、予は氏が小成に安んぜず、更に吾邦演劇史上に貢獻する所多大なるべきを期待するものなり。之れを序となす。

明治己酉初夏

伯爵 柳澤保惠

はし か き

抑も本清出版の旨とする處。固より多々ありと雖も。今敢てそれを鹿爪らしく取つて。唯畑越氏の祖先が「錦着て疊の上の乞食かな」と歎息せし當時に比して大徑庭を現はせる今日。全國俳優即ち藝術家諸氏の宿所名簿録ぐらゐはあつて欲しく。又その略傳、肖像、筆蹟、嗜好等を加ふるも面白かるべく。兼ねて全國劇場まつた興行主を収めたらんには、愈々益々面白く又重寶なるべし。其那邊まで裨益するや否やは宜しく世の鑒識に訴ふるものなりと云附。

巴西初夏

すさうら 絃三 識す

凡例

一、俳優明鑑は逐次日本全国の俳優諸氏の略傳肖像筆蹟趣味及び現住所を詳細に收め兼て全國の劇場興行主の總てを紹介するを以てその趣旨となす、憾らくは出版條日なき爲め肖像を掲げたるもの東京にのみ限りたるは遺憾なり。

一、書中に收る所の傳記繁簡粗密あるを免かれず是れ紙面に限りありて其以上の記述を許さざるに因る。

一、書中往々冗漫なる筆を弄したるものあり（少年俳優に多し）これ全く材料とすべき程のもの無く、否其材料を探るの寸暇なきに出でたるもの。

一、本書中に掲載したる人物は歌舞伎派に在りては名題俳優（既に適任状を得たるものも加へたり、また一二例外の者も出でたれど是世の識者が既に名題格の資格ありと見認じものなり）を掲載したれども、新派に在りては其標準とすべきものなきより一々立

物に質しその指定されしもののみを選びたり故に最も前途有望と目せられつゝある人々か、然らずば最も古き經歷を有し、猶發展すべき未來の幾何を有する人々なり、然れども或は本書に洩れたるもの多々あらん、斯の如きは不日再版の時を期して増補せんとす。

一、本書編纂に關して尠ならず苦心を要せしは排列の順序なりし、甲は徹頭徹尾いろは順となせよと云ひ、乙は立物のみを別にせよといひ、否それにては立物の程度明かならざれば座別にせよと丙は云ふ、斯の如くにして議論百出、編者も採決に苦しみし結果所謂大將株および斯界有力者の意見を徵せしにその十中七迄ではいろは順の妥當なるを主張せられたれば、斷然甲の説を採用したり、乞ふ諒とせられん事を。

一、又最も困難を感せしは一部俳優のズボラなり、編者は一旦出版する限りは可及的完全なるものにせん

凡

と努めし結果、五回六回は愚か無慮二十回も足を運びし事あり、剩さへ今日迄で市井無頼の徒が惡例を残せし故もあらんか、言ふべからざる耻辱にも甘んじたり、されど固より編者の道樂一ツには俳優諸氏は勿論、一般世人の娛樂中に實用を感せしめんとするにあれば、かく耻辱を忍び貴重なる日子を費し、丹精を籠て編纂せし次第なり。

一、本書編纂に關しては編者（註三）以外何人の補助も仰がず、殊に僅少の時日にて稿を成せしものなれば、その苦しさ到底筆の能くする處に非ず、従つて、修辭上或は文法上の誤謬も定めて多からんも、并は編者の深く謝する所、然れども記事中錯誤の點あるに於ては編者は嬉んで大方の示教を待つもの也。

一、當俱樂部の主旨を賛し芝翫氏梅幸氏高麗藏氏左圓次氏團吉氏三津五郎氏及伊井氏藤澤氏秋月氏喜多村氏村田氏深澤氏小織氏柴田氏等各名流が續々寄稿せられしが本書に掲載するを得ざりしは遺憾なり。

一、表紙は夙に麗筆を以て鳴る梅美菊三郎氏がものせられしもの、又扉題字は綠樹喜多村氏がその一流の名筆を揮はれたるものに係る。

一、本書巻尾の劇場明鑑は先般本郷座幹部となりし和田卷次郎氏と後藤良助一座の古顔と聞へたる松岡登氏が多大の材料を與へられしは深く編者の謝する所なり。

明治四十二年三月

編者識

例

目

◎歌舞伎俳優之部

本文目次

坂東一鶴	一
尾上梅幸	二
中村梅雀	三
市川ぼたん	四
澤村訥子	五
中村時藏	六
澤村長之助	七
中村歌六	八
尾上蟹十郎	九
坂東勝見	一〇
尾上幸藏	一一
市川蝙蝠	一二
守田勘彌	一三
中村勘五郎	一四
中村米吉	一五
中村由丸	一六
嵐芳三郎	一七

澤村由次郎	一八
助高屋高九	一九
中村竹三郎	二〇
市川團八	二一
市川團右衛門	二二
市川團九郎	二三
市川團吉	二四
市川團升	二五
澤村宗十郎	二六
澤村宗之助	二七
澤村宗之助	二八
坂東鶴之助	二九
市川鶴丸	三〇
市川雷藏	三一
中村梅之助	三二
尾上梅雄	三三
市川羽左衛門	三四
坂東のしほ	三五
市川男寅	三六
市川國松	三七

中村翫助	三八
中村翫太郎	三九
市川九藏	四〇
市川九團次	四一
市川九女八	四二
岩井糸三郎	四三
市川八百藏	四四
尾上松助	四五
中村又五郎	四六
澤村源之助	四七
澤村源十郎	四八
市川福藏	四九
尾上芙蓉	五〇
中村兒太郎	五一
市川小團次	五二
市川高麗藏	五三
市川高麗三郎	五四
中村駒助	五五
市川小文次	五六
尾上榮三郎	五七

目

次

市川るんど豆	五八
實川延太郎	五九
市川猿之丞	六〇
市川猿之助	六一
市川蓮女	六二
市川猿十郎	六三
市川蓮若	六四
中村明石	六五
市川左團次	六六
市川左喜之助	六七
市川左升	六八
關三十郎	六九
中村吉右衛門	七〇
市川鬼丸	七一
市川旭梅	七二
尾上菊太郎	七三
尾上菊五郎	七四
尾上菊三郎	七五
市川鬼三郎	七六
市川喜三造	七七

市川錦吾	七八
市川女寅	七九
坂東三津五郎	八〇
市川芝海老	八一
中村芝鶴	八二
坂東秀調	八三
中村芝翫	八四
市川鯨丸	八五
市川松馬	八六
河原崎紫扇	八七
市川新十郎	八八
市川壽朝	八九
市川十藏	九〇
片岡十藏	九一
市川鼻升	九二
尾上紋三郎	九三
市川百々次	九四
市川翠扇	九五
市川壽美藏	九六

◎新派俳優之部

伊井蓉峰	一
井口新昇	二
石川新水	三
花園薰	四
英太郎	五
花房喜久男	六
西川秀之助	七
小河幸雄	八
若松信乃	九
若水美登里	一〇
和田卷二郎	一一
門脇清澄	一二
河合武雄	一三
河本重徳	一四
横山運平	一五
橋山夏野	一六
高田夏野	一七
高田實	一八

次

目

高浪定次郎	一九
高杉三郎	二〇
都築文男	二二
月岡一樹	二三
中野信近	二三
中村幡之助	二四
中村秋孝	二五
中島常行	二六
村田高一	二七
村田正雄	二八
梅田重朝	二九
上原桂四郎	三〇
柳川清	三一
倭輝久雄	三二
山田春雄	三三
山崎長之輔	三四
前島光美	三五
丸山操	三六
松葉菊雄	三七
松本要次郎	三八

深澤恒造	三九
福島清	四〇
藤川岩之助	四一
藤田金吾	四二
藤澤淺次郎	四三
藤井六輔	四四
後藤良介	四五
五味國太郎	四六
阿部信夫	四七
荒井信夫	四八
嵐橋珪	四九
秋月桂太郎	五〇
秋山十郎	五一
埜東銜策	五二
佐川了經	五三
川上貞奴	五四
酒井信一	五五
櫻井東次郎	五六
喜多村綠郎	五七
木村操	五八

木下錄三郎	五九
木下吉之助	六〇
岸一夫	六一
水田紅美	六二
水野好美	六三
水野正重	六四
柴田善太郎	六五
柴野久彌	六六
樋口角兵衛	六七
桃木吉之助	六八
關根達發	六九

歌舞伎俳優之部

の
は
順

次

目

高浪定次郎	一九	深澤恒造	三九	木下録三郎	五九
高杉三郎	二〇	福島清	四〇	木下吉之助	六〇
都築文男	二一	藤川岩之助	四一	岸一夫	六一
月岡一樹	二二	藤田金吾	四二	水田紅美	六二
中野信近	二三	藤澤淺次郎	四三	水野好美	六三
中村幡之助	二四	藤井六輔	四四	水野正重	六四
中村秋孝	二五	後藤良介	四五	柴田善太郎	六五
中島常行	二六	五味國太郎	四六	柴野久彌	六六
村田高一	二七	阿部信夫	四七	樋口角兵衛	六七
村田正雄	二八	荒井信夫	四八	桃木吉之助	六八
梅田重朝	二九	嵐橘珪	四九	關根達發	六九
上原桂四郎	三〇	秋月桂太郎	五〇		
柳川清	三一	秋山十郎	五一		
倭輝久雄	三二	埴東程策	五二		
山田春雄	三三	佐川三經	五三		
山崎長之輔	三四	川上貞奴	五四		
前島光美	三五	酒井信一	五五		
丸山操	三六	櫻井東次郎	五六		
松葉菊雄	三七	喜多村綠郎	五七		
松本要次郎	三八	木村操	五八		

坂 東 一 鶴 丈



坂 東 一 鶴

本 名 渡 邊 房 太 郎
音 羽 屋

趣 味 (小説其他) 遊山人、お伽噺、少年世界、子供新聞、細の彌焼、コロロ、草物、食物、煙草

(愛粧用品) 化粧水、白鉛、香水、オベラ、齒磨、ダイヤモンド


(娛樂) 活助齋、好なし、折紙、何にもなし、活潑、三尺九寸、(衣類) 活助齋、好なし、折紙、何にもなし、活潑、三尺九寸、(崇拝) 活潑、三尺九寸、(氣質) 活潑、三尺九寸、(身丈) 三尺九寸

い 部

住宅 東京市京橋區築地一丁目二番地 電話新橋(四千三百八十一番)

麒麟兒も随分多いがお世辭拔きの麒麟兒とは確かに一鶴丈の如きを云ふのであらうよ。十目の見る處十指の指す處は有繋に違はず、到る處で麒麟兒の名を指にして居ると云ふのもお父さんやお母さんの仕付が宜いからでもあらうが、併し一鶴丈は所謂天才の子であるからだ。先天的技能は研かざるに光を放ち新派、舊派の總ての變化を知り、時に團たり時に菊たり或は伊井たり高田たりとは妙と褒め過ぎたか知らないが兎に角く小憎らしき迄でに巧緻を極めて居る。イヤ一鶴さんには體の割合に年を喰つて居ますなと噂するものがあるとするれば、それは正に辟み根性と申すものなり。明治卅一年七月十四日は一鶴丈の誕生日に相違ない。所作事名人の坂東鶴之助はその實父である。六ツの時から今日迄で彼處此處へ出勤してお客を泣かせたり笑はせたりした事は數へられぬ程。

初代 中村梅雀 丈



柳盛座々頭 本名 三井梅之助
屋 號 成駒屋

趣 味 (小説其他) 院本、書報、中央、鹿の、おしるこ、餅、日本酒、白梅、草物、煙飲、食新、雜、聞誌、物、物、草、(愛粧用品) 白鉛、香水、スミレ、百美人

娛樂 (鐵砲、玉突、寫眞、大目、洋服、お召、音器、骨董、番、不動、稻荷、高、五尺四寸五分) 衣類 (洋服、お召、音器、骨董、番、不動、稻荷、高、五尺四寸五分) 愛玩 (洋服、お召、音器、骨董、番、不動、稻荷、高、五尺四寸五分) 崇拜 (洋服、お召、音器、骨董、番、不動、稻荷、高、五尺四寸五分) 氣質 (洋服、お召、音器、骨董、番、不動、稻荷、高、五尺四寸五分) 身體 (洋服、お召、音器、骨董、番、不動、稻荷、高、五尺四寸五分) 化粧 (洋服、お召、音器、骨董、番、不動、稻荷、高、五尺四寸五分) 齒磨 (洋服、お召、音器、骨董、番、不動、稻荷、高、五尺四寸五分)

は 部

若しも梨園に門閥なく眞の伎倆もてその甲乙を定むるものならんには優の如きは今や正に大立物たる事を俟たず。優は嘉永四年十月十四日日本郷湯島に生れ加賀藩の熊吉と云ふものの子なり。四五歳の頃芝の永壽座にて天川屋儀平の悴を勤めしが初舞臺にて十一歳の時市川門之助の門弟となり直ちに市川辨之助等と共に北海道松前へ乗込み暫く同地に在り、其後久々に歸京し更て中村芝翫の門に入り中村梅之助と稱し十八歳の時中橋澤村座に於て曾我の虎御前を演じ梅之助の名漸く人の知る所となりしがその二十八歳の時梨園に門閥のあらん限りは到底出世の途なしと洞察し斷然師芝翫と別れ自から中村梅雀と名乗り四方を巡業なし明治十八年六月柳盛座へ初めて入座しその座頭となりし以來今日迄で一日の如く同座に出勤なし今は其の悴梅之助と共に界隈の人氣を一身に集めつゝあり。妻はきんこて先年病歿せり。

▲石險、花玉
▲洗粉、クラブ

住宅 東京市下谷區竹町十五番地

六代 尾上梅幸 丈 (等一級等札鑑)



東京俳優組合副頭取 本名 寺島榮之助
歌舞伎座幹部技藝委員 屋 號 音羽屋 俳 名 扇舎、芳雪又香玉
「鳴るように引いてたまはれ花の鈴」
名題披露目録句

趣 味 (小説其他) 何んせ限らず、大抵見ます、時、都、朝、洋食、殿、天ぶら、洋酒、茶、クリ、補酒、茶、クリ、ツトサイダ、エジプト、草物、煙飲、食新、雜、聞誌、物、物、草、(愛粧用品) 白鉛、香水、舶來もの、齒磨、カフキ粉、化粧水、オベラ

娛樂 (鐵砲、玉突、寫眞、大目、洋服、お召、音器、骨董、番、不動、稻荷、高、五尺四寸五分) 衣類 (洋服、お召、音器、骨董、番、不動、稻荷、高、五尺四寸五分) 愛玩 (洋服、お召、音器、骨董、番、不動、稻荷、高、五尺四寸五分) 崇拜 (洋服、お召、音器、骨董、番、不動、稻荷、高、五尺四寸五分) 氣質 (洋服、お召、音器、骨董、番、不動、稻荷、高、五尺四寸五分) 身體 (洋服、お召、音器、骨董、番、不動、稻荷、高、五尺四寸五分) 化粧 (洋服、お召、音器、骨董、番、不動、稻荷、高、五尺四寸五分) 齒磨 (洋服、お召、音器、骨董、番、不動、稻荷、高、五尺四寸五分)

は 部

現代梨園に女形勢く名花に乏しき折柄、天稟の美貌と巧緻の藝風と相俟つて日本一の大歌舞伎に花を咲かせつゝある優は明治三年十月名古屋伏見町に生る父を朝次郎(後に松助また梅幸)と呼び奇代名人梅壽菊五郎の孫に當る人なり十二歳の時五代目菊五郎の懇望に依り上京し榮之助と名乗り千歳座(今の明治座)へ出勤せしが東京での初舞臺なり十九歳にして名題に昇進し榮之助改め榮三郎となり満都を狂せしめたりと云へば如何に當時人氣の大なりしか察するに難からず三十六年二月父を亡ひしより市川團洲の指圖により六世梅幸を相續せりその人となり穩健にして自然と具備せる品格は流石當代一流の名優たるに耻す先年東京俳優組合の副頭取に選ばれ今や歌舞伎劇壇の重鎮たり、妻は富士子(明治十五年生)とて才色兼備の名媛、結婚は去る三十六年十一月中なり、丑之助(三十三年生)はその實子なり。

▲石險、舶來もの
▲洗粉、オノール

住宅 東京市赤坂區仲ノ町三番地
電話新橋(四千四百二番)

部

- 趣味 (小説其他) 院本、文藝、都白、淡白、日本酒、草物、飲まず
- 愛用 (化粧品) ▲白鉛、みその、舶来もの、香水、舶来もの
- 娛樂 (衣類) 釣り、地味お召、花、植木、崇拝、金比羅、剛健
- 愛用 (化粧品) ▲化粧水、四季の花、歯磨、オベラ

澤村訥子 日代七 (等二級等札鑑)



澤村訥子

東京俳優組合評議員 本名 伊藤千之助

屋 號 紀の國屋

「身に餘る名をあびて只汗の滌」 訥子愛名俳句

豪健の藝風と懸河の辯舌を以て一方に覇たる優は萬延元年四月八日の出生なり。父を長谷川忠圓といひ尾州家の附家老竹越氏の家來にて優は其次男なり。仔細ありて幼年の頃京都大徳寺の小坊主に遣されしが、元來活達の優とて何條坊主に甘ずべき、遂に自ら僧籍を脱し、十六歳の時不圖俳優たらんと欲し中村千之助と名乗りて當時名古屋に旗上げせし小供芝居(座頭今の八百蔵)に加入し、其後一座と共に出京し春木座に現はれしが故人助高屋高助の知遇を得、遂に其女はる(慶應二年生にて宗十郎の姉)の女婿となり久しく絶えたる訥子の家名を興し七代目訥子と改め同時に名題披露目をなしたり、年二十三歳。二十七歳にして養父高助を亡ひし後は義弟源平(今の宗十郎)を輔けつ。星移り年變り其子には故小傳次を初めとし宗之助長之助の如き小名優あり、人の羨むも宜なりと云ふべし。

▲石鹸、アイボレ 住宅 東京市淺草區今月町十五番地 電話下谷(一千三百八十一番)

部

- 趣味 (小説其他) 學校教科書、演藝、時世、報知、肉類、少量、未だ飲まず
- 愛用 (化粧品) ▲白鉛、みその、オベラ、香水、オベラ
- 娛樂 (衣類) 寫眞、何でも好し、繪端書、稻荷、金神、崇拝、四尺七寸
- 愛用 (化粧品) ▲化粧水、レイト、歯磨、ダイヤモンド

市川右太衛門 日代二



市川右太衛門

明治座出動 本名 高橋道之助

屋 號 高島屋

優は明治二十七年九月二十七日を以て新富町に産聲を揚し今紅顔の美少年、一代の名優四代目市川左團次の二番目息子にぞある。五歳の時明治座にて太閤記の三法師に扮せしが初舞臺にして今日迄で各座に於て演せし重なる役名は左の如し、△高野長英(父左團次)の伴、△子持高尾(源之助)の子供、△團十郎追善興行にて富樫左衛門の太刀持、△父左團次追善興行にて紅葉狩の山の神、△日吉丸の竹松、△板額市右衛門、△牧の方(芝翫)の政則、己が罪の玉太郎等なり。三十七年八月七日父左團次は遂に白玉樓中の人となりぬ。ア、當時十にも餘らぬ優は如何に悲しかりしよ、父歿後は専ら嚴格の聞え高き兄左團次の薫陶を受け善く其の戒諭を服膺し熱心技藝は勿論學問に従事しつつあり昨年木挽町高等小學を優等にて卒業し今や進んで中學校に入學すべく用意をさし怠りなし。

▲石鹸、ホルマリン 住宅 東京市京橋區新富町二丁目三番地 電話新橋(四百六十八番)

ち
部

趣 (小説其他) 何でも讀みます
 趣 (小説其他) 何でも讀みます
 (愛用化粧品) 香水、白鉛、マイオレット、歯磨、オペラ

澤村長之助

(等五級等札鑑)



澤村長之助

本名 伊藤 玉吉
屋 號 紀の國屋

恐らく訥子丈程頼母じい子供を澤山持つた人は多く
 なからう、先づ第一に花の蕾の十六にて忽焉此の世を
 去り満都の好劇家をして均しく涙の袖を絞らしめし絶
 代の寵兒小傳次丈を初めとし夙に具眼者が後世恐るべ
 くと叫びたる現時賣出の花形、宗之助丈、又つた技に
 紹介する玉ちやんの如き、何れも誠に得易からざるの
 玉子と謂ふべし。玉ちやんは明治二十二年十一月九日
 生れとあるから三碧の己丑で、俳優は先天的である。
 四ツの時から舞臺に出て居るので十に足らない時分か
 ら浅草座の小供芝居に出勤し叩き上げた腕は確なもの
 藝事に掛けては曾て引けを取ら試めしなく名題の披露
 目こそせざれ、より以上の力量ある事勿論、今やいよ
 いよ技藝の研究に餘念ない。夫に氣質は至つて優しく
 兄弟中も宜く兩人手を握へて玉突を試みたり或は寫眞
 器を携へて遠足するなどは暫々認る所である。

▲石粉、舶來もの
▲洗粉、クラブ
住宅 東京市浅草區今戸町十五番地
電話下谷(二千三百八十一番)

と
部

趣 (小説其他) 涙香、西報、文藝
 趣 (小説其他) 涙香、西報、文藝
 (愛用化粧品) 香水、白鉛、マイオレット、歯磨、オペラ

中村時藏

(等五級等札鑑)



中村時藏

本名 波野 徳松
屋 號 播磨屋 獅 兒

立役女形孰れにても宜しけれと殊に女形の世評高き
 優は明治九年四月を以て大阪に生る。幼にして中村歌
 六(當時々藏)に養はれ幼名を種太郎と呼び六歳の時初
 舞臺を勤めたり。幼少の頃父と共に上京し各座に出勤
 して専心技藝に勵しかば種太郎の名漸く人の知る所な
 り三十四年即ち優の二十六歳の折種太郎改め歌昇とな
 り同時に名題に昇進せし以來重に明治座宮戸座等に出
 勤し花形と稱せられ四十一年四月同じ明治座にて父の
 名を襲ひ二代目中村時藏となり横川覺範(歌六)に義經
 を勤めたり同年六月父歌六、弟吉右衛門、米吉等と大
 阪角座に乘込み右團次、仁左衛門等の助勢を得て懐し
 き故郷に錦を飾り、華々しく改名披露をなし「名筆反
 魂香」に又平(歌六)女房おとくを演じて頗る喝采を博
 したり。同年妻女千代子(十四年生)を迎へ人も羨む
 陸じさとは實にも自出度限りにこそ。

▲石粉、舶來もの
▲洗粉、クラブ
住宅 東京市本所區縁町一丁目五十二番地
電話浪花(二千七百九十五番)

尾上蟹十郎丈

(等五級等札鑑)



尾上蟹十郎

歌舞伎座出動

本名 横山音八

屋 號

音羽屋 横 梅

- 趣味 (小説其他) 院本、講談もの
- 味 (飲食新雜) 都 洋食 日本酒大盆 大和
- (愛粧用品) 白鉛、みその香水、ムスク
- (娛樂衣類) 宮詣り 袴 城
- (氣身) 丈 質 子煩 五尺二寸五分
- (化粧用品) 化粧水、リソリン 齒磨、ライオン

部

三代目 中村歌六丈

(等三級等札鑑)



中村歌六

本名 波野時藏 播磨屋 俳名 師童

- 趣味 (小説其他) 速記物
- 味 (飲食新雜) 都 豆腐、野菜、小魚 日本酒少盆 敷島
- (愛粧用品) 白鉛、みその香水、同香精
- (娛樂衣類) 小供成長 大島 骨董
- (氣身) 丈 質 氣短 五尺三寸
- (化粧用品) 化粧水、オベラ 齒磨、オベラ

部

優は伎倆老巧、技藝圓熟を以て聞え、其の名所謂幹部連に劣らざるは、其手腕の妙なるに因らざるはあらず。優は元大阪の人、永四年四月初代歌六の末子に生れ、幼名を米吉と云ふ。六歳にして舞臺に現れ、二十歳の時米吉改め時藏となり名題に昇進し、二十五歳初めて出京なせし以來東京俳優となり、各大小劇場に出勤し時藏の名次第に知れたり、然れども優は充分にその眞價を認められながら尙ほ世評甚だ面白からざりしは、要するに其の藝風に所謂臭味ありしが故なるべし併しながら今は既にそれ等の分子を脱して技藝に入り世評益宜し、四十一年四月明治座に於て三代目歌六を相續し時藏の名を倅歌昇に譲れり妻の龜子(安政四年生)は吉右衛門丈や米吉丈を育て上げし人なれば如何に才女なるかを知るべく外に女二人ありて播磨屋の家運愈々盛んなるは實に羨しき限りにこそ。因に妻龜子は踊の名手なりと云ふ。

石鹼、アイボーン 住宅 (東京市本所區綠町一丁目五十二番地) 電話浪花(二千七百九十五番)

優は天保十年八月三十日日本橋區元大阪町に生れ父は相模屋與兵衛と呼びし大工職にて優はその三男なり十四歳にして坂東太藏と名乗り市村座太夫元十三代目市村羽左衛門(後に菊五郎)の弟子となり市村座に出勤し初舞臺を勤たり文久三年師羽左衛門初めて家橘の名を用ひ更に慶應四年八月祖父の名を嗣て五代目菊五郎と改めし時優も亦尾上尾上右衛門と改名し、其後甲州路より京阪地方を遍く巡業し随分と鳴せしものなりしと云ふ。斯て四方を廻りし事實に二十有餘年、久々にて歸京し明治二十四年即ち優の五十三歳の折二代目尾上蟹十郎を相續し名題に昇進せし以來、主として歌舞伎座に出勤し老巧圓熟の伎を演じて具眼者を喜ばせしめつゝあり。妻をらく(天保十二年生)と呼び今尙健在なり間に長女す(慶應元年生にて目下坂東新左衛門の妻)次女やす(明治二年生)三女こう(明治十年生)の三女を設く。

石鹼、競馬 住宅 (東京市淺草區千束町) 二丁目百九十五番地

尾上幸藏 (等五級等札鑑)

小説其他 院本
雑誌 都報
新聞 天都
飲食 都報
煙草 天都

娛樂 自轉車
衣服 洋服
愛玩 洋服
崇拜 成田不動
氣質 仁俠
化粧水、レイト
齒磨、みその



尾上幸藏

本名 大橋幸藏
屋敷 大橋屋
俳名 幸藏
五代目 菊五郎
『やり梅もまだ青竹の日並かな』
『その影を七尺さつて月の梅』
名題披露目録句

か 部

優は安政二年三月十一日を以て淺草區猿若町に生る父は中村鴻藏とて三世中村仲藏の門人なり五歳の時十三代目市村羽左衛門の門に入り坂東市の助と名乗り夙に神童の譽れ高く、その九歳の時名人小團次の演じたりし髮結藤次に伴國松を勤め満都を陰らせたり。後十四歳にして師市村羽左衛門祖父の名を襲ぎ五代目尾上菊五郎を相續し一門残らず坂東改め尾上となりし時優も尾上幸藏と改名せり。當時菊之助を襲名する筈なりしが師菊五郎は黙阿彌及び川竹新七と協議の上幸藏と改めしめたり、降て二十三年新富座に於て左芝菊の大一座にて名題披露目をなす、狂言は一番目左團次の佐々成政二番目師菊五郎のメ組の喧嘩なりし。其後引續き市内各座に出勤し今壽座の重鎮たり其藝風宛然菊五郎に髣髴たるものあり、妻お半は四十一年八月五十八歳を一期として逝けり紋三郎はその男なり。

▲石鹼、アイボレ
▲洗粉、三越
住宅 東京市深川區仲町十九番地

坂東勝見丈

小説其他 山人もの
雑誌 少年パワック
新聞 演藝新聞
飲食 子供新聞
煙草 天都
草物 牛乳

娛樂 自轉車
衣服 洋服
愛玩 手帖、鉛筆
崇拜 金神
氣質 活潑
化粧水、シート
齒磨、菊世界



坂東勝見丈

本名 水田
屋敷 大和屋

か 部

勝見さんのお父さんは坂東秀調丈、お母さんは坂東のしほ丈で勝見さんはその養子で明治三十四年三月三十日の出生である。有樂養父母の訓薫丈に舞臺も何處か大まかな處があつて、而かも形のキチンと極るなごはどうしても争はれない譯のものである。初舞臺は三十九年中村芝翫丈が新富座で十二代目守田勘彌の追善興行に島の爲朝を演じた時、島君に扮したので其後東京座、歌舞伎座、市村座等に出勤しまた一寸々々お伽芝居などにも頼まれる様である。當今はお父さんの秀調丈が伊井峯峰丈と握手して居るので此處一寸休んで居るが家に在つてはお母さんのしほ丈に色々な技藝を仕込まれ、また踊りは本家の藤間へ通つて居る。此に面白い話は市村座へ出勤中着物へ御園白粉を覆したので見られては大變と狼狽して油をつけて擦つた處却て着物がメチャクとなりワァー泣き出す。

▲石鹼、舶來もの
▲洗粉、かぶき
住宅 東京市本所區向島須崎町二百四十五番地
電話下谷(二)千九百三十六番

か
人
部

趣 味
 (小説其他) 紅葉、歌舞伎
 (雑誌) 時事、都
 (新聞) 内類
 (飲食) 葡萄酒
 (飲物) 巻簾なんでも
 (煙草) 巻簾なんでも

愛用品
 (化粧品) 白鉛、みその、御園香粉
 (香水) 香水、御園香粉
 (歯磨) 齒水、みその、四季の花、菊世界

守田勘彌 三代目
 (等五級等札鑑)



守田勘彌

歌舞伎座出動 本名 守田好作
 市村座出動 俳名 守田好作
 喜之字屋 秀可
 『うら成りもかぞへ玉はれ瓜の蔓』
 勘彌並名俳句

▲化粧水、みその、四季の花
 ▲洗粉、オノール 住宅 東京市京橋區日吉町一番地
 (電話新橋(四)千二百八十九番)

先代勘彌氏が劇壇の地位を高めんとして、有らん限りの心血を凝らし事は、事實に於て證明され吾等劇界に籍を置くもの均しく感謝せねばならぬ。故人の晩年は誠に不遇であつたが三津五郎丈また此の勘彌丈の如き秀才を置土産とされたので聊か安心せられた事であらう。

優は明治十八年十月の出生で七歳の時三田八と名乗り新富座で團菊左の大一座の砌り「樋口」の遠見を勤めたのが初舞臺である。優の最も得意とする所は和事師にて近來著るしき進境を示した必ずや將來此方面の役は此優を推すに至るであらう。十八歳の八月父勘彌白玉樓中の人となつたので一時守田系頗る寂寞の感があつたが三十九年勘彌追善興行として新富座に無慮四十名の大小名題が働きは誠に近來の快事であつた。此時優は連獅子の子獅子を勤め十三代目守田勘彌を相續し同時に名題に昇進したのである。

か
人
部

趣 味
 (小説其他) おとぎ噺、少年
 (雑誌) みない、天ぷら、ゆであづき
 (新聞) 天ぷら、ゆであづき
 (飲食) 天ぷら、ゆであづき
 (飲物) 天ぷら、ゆであづき
 (煙草) 天ぷら、ゆであづき

愛用品
 (化粧品) 白鉛、みその、ムスク
 (香水) 香水、ムスク
 (歯磨) 齒水、みその、四季の花、菊世界

市川蝠蝠



市川蝠蝠

歌舞伎座出動 本名 喜熨斗光則
 屋號 澤洞屋

▲化粧水、みその、四季の花
 ▲洗粉、オノール 住宅 東京市淺草區新吉原京街澤洞橋
 (電話下谷(一)千八百六十番)

蝠蝠ちゃんは音に響いた猿之助親方の三番目息子、つまり團子さんと芝海老さんの弟、三十五年一月二十六日淺草觀世音裏の千束町の宅でお母さんのお琴さんのお腹からオギャア〜と初めて世の中へ飛び出したのです。末子丈に子煩悩のお父さんやお母さんの可愛がりかたはまた特別、光よ々々と言たり擦たり是れが爲め兄さんの芝海老さんと時々衝突を起すが何日も軍配は蝠蝠ちゃんに上るのです。けれども確かりものお母さんの事ですからさう〜甘くばかりは育てず、偶にはお灸もするとの事、兎に角慈愛の中に威厳ありと云ふ育てかた、忙しい娼婦の傍ら多くの小兒を立派に教育して行く所、此お母さんならではの出来かねる藝、それから蝠蝠ちゃんも寅年丈けに性質中々剛毅屹度エライ敵役になるでしようとは今から評判々々、四歳の時歌舞伎座で團十郎の追善興業の口上に列席したのが初舞臺である。

か 人 部

本名 岩城米吉
舞鶴屋 秀鶴
「ゆだんすな小春日のあればとて」
名題披露目録句

中村勘五郎 目代二十
(等四級等札鑑)



中村勘五郎

- (小説其他) 涙香、院本
- (雑誌) 都、めざまし
- (新聞) ハタ、のブリ
- (食) コを除く他なん
- (飲) 日本酒に茶
- (煙) 白梅
- (愛粧用品) 白鉛、みその香水、オペラ
- (娛樂) 大弓、玉突、鏡
- (衣類) 結城、二子
- (愛玩) 香筒、骨董
- (崇拝) 神道
- (氣質) 忠實
- (身丈) 五尺二寸
- (化粧水、レイト)
- (齒磨、象印)

優は安政二年十月三日四ツ谷荒木横町の有名な餅屋梅林の悴と生れしが其父なる人非常に役者を鼠負になし爲に破産の已むなきに至れり。當時優は五歳に餘らず父の顔さへ辨まへず尾上和市(多見藏の男にてひつり、和市とて有名な人)に貰はれしが、其異相に怖れ養子たるを好まず然るに當時同家に暫は出入なせし留場の武藏屋金太郎なるもの優を愛すること一方ならず、恰も養父和市の歸阪するに際せしかば、優は遂に金太郎に養はるゝに到りぬ。五歳の三月十三代目勘三郎の門に入り後仲藏に師事したり初め米吉と名乗り七歳の時銀之助となり出藍の譽あり夙に故實に通じ時に或は團洲等の顧問たりし事あり三十歳の時鳥越中村座にて團十郎が高時天狗を演じたりし時名題披露目をなし以て今日に及ぶ、此間逸話奇談頗る多しと雖もこゝには述ぶるの餘地なし唯演劇に通達する事優の如きは蓋し稀とする所、妻を徳と呼び明治元年生なり。

住宅 東京市浅草區今戸町二十五番地

歌舞伎座出動 本名 波野米吉郎

屋 號

播磨屋

中村米吉



中村米吉

- (小説其他) 遊山人
- (雑誌) 薔報、少年世界
- (新聞) 都
- (食) 生玉子
- (飲) シンシヤ
- (煙) 飲まぬ、飲む
- (愛粧用品) 白鉛、みその香水、同橋
- (娛樂) 玉突、自動車
- (衣類) 洋服
- (愛玩) 寫眞
- (崇拝) 妙法
- (氣質) 早
- (身丈) 四尺
- (化粧水、レイト)
- (齒磨、ダイヤモンド)

米ちゃんの中村歌六丈の三番目息子、明治二十八年六月六日生れ、疾に役者一ト通りの體を備へ些の缺點もない。今若し小供芝居があれば差當り座頭は米ちゃんであらう初舞臺は兄さんの吉右衛門丈が淺草座で助六を演じた時秀を勤めたので、今は丁度俳優としての半間時代であるから一生懸命で踊りは花柳徳太郎下方は望月太左衛門に就き勉強しそれに甲新學舎へ通ひ英語、歴史なども學んで居る。それから米ちゃんの秘し藝はお父さんの聲色です。性質は活潑で極く氣短、自轉車が大好きで或時深川高橋邊を威勢よく乗つて來ると向から來た繪やに打付たので箆が 轉返り繪が町中へ飛出し繪やは面喰らつて拾込んで居る間に手早く逃出すとコラ待てッ! 思はず振り返ると鬼面のお巡査さんなので、ハイ僕は本所緑町一丁目五十二番地波野時藏の三男米吉郎ですと青くなつたなどは米ちゃん空前の大失策!

住宅 東京市日本橋區濱町三丁目十七番地 電話浪花(二)千七百九十五番

よ
部

趣 味 (小説 其他) 誌 齋 色 々 支那料理、餃、
 (新 聞) 支那料理、餃、
 (食 物) 支那料理、餃、
 (飲 物) 支那料理、餃、
 (煙 草) 支那料理、餃、
 (愛 用 化粧品) 香水、オベラ
 白鉛、みその
 香水、ホワイトローズ
 齒磨、オベラ

嵐 芳 三 郎 丈
 (等 五 級 等 札 鑑)



萬歳や兄に尋ねる舞拍子
 名題披露目録句

本名 寺田市太郎
 屋 號 豐島屋
 俳 名 丈

優は明治五年四月二十四日を以て大阪に生る、浪花の名家瑠瑠(初代)の孫に當る人なり(現代瑠瑠は初代瑠瑠の門弟にて瑠瑠といひしが二代瑠瑠歿後折角の名家を例へ暫しにても忘れしむるを惜み三代目を相続せしもの、優はこれを義兄となす)初めて九歳の時中座へ出勤す、一座は嵐橋三郎、故坂東太郎等なり。二十歳にして市太郎改め芳三郎となり二十五歳にして名題に昇進し多く且を勤め濃厚なる技を演じ花形として満都の人氣を一身に集めたり。三十七年十一月中村芝鶴が新富座の太夫元の披露をなせし時迎へられて徳三郎と共に初めて上京し芝翫、蕪美藏、勘五郎、芝鶴等と一座せし以來東京俳優となり芝翫等と各座に出勤中昨年より淺草宮戸座に居附となり何れ一兩年の内歸阪なし四代目瑠瑠を相続すと云ふ。其顔立は肉豊にして稀に見る好男子、人氣の盛んなるも亦た宜なる哉。

▲石輪、ケール
 ▲洗粉、オノール
 住宅 東京市下谷臨池ノ端三丁目二番地

よ
部

趣 味 (小説 其他) 少年世界 演藝書報 魚類、洋食 砂糖、牛乳
 (新 聞) 少年世界 演藝書報 魚類、洋食 砂糖、牛乳
 (食 物) 魚類、洋食 砂糖、牛乳
 (飲 物) 魚類、洋食 砂糖、牛乳
 (煙 草) 魚類、洋食 砂糖、牛乳
 (愛 用 化粧品) 香水、オベラ
 白鉛、みその
 香水、オベラ
 齒磨、ライオン

中 村 由 丸 丈



中村由丸

本名 祖父江由良
 屋 號 新駒屋

由丸ちゃん新富座太夫元として將た亦名人として聞へた中村芝鶴丈の天にも地にも掛替のない一人息子お母ちゃん吉原隨一の大文字樓の娘さんで豊子さんと云ふのです。明治三十三年花の眞盛り四月に生れた故が大變陽氣な質で何時も近所の餓鬼大將！そのかはり舞臺も決して敗けはとらない。明石學校の第二年生で習字に繪が一番出来が宜いとは何にして頼母しい譯だそれから家へ一寸々々来る山本と云ふ人から英語を教つて居ます一體記憶力がよく英語なども直ぐ聽へて終ひ之を應用してお父さんやお母さんを困らせる事が度々あるこの事、一番中よしが一鶴さん一番上手なのは自轉車一番好きなのは洋食、活動寫眞それから藝事は流石お父さんのお仕込み丈に中々多方面それからトコトンは南鍋町の花柳で懸命に仕込まれ勝氣丈に踊りの質も良く遠からずお父さんに勝るとも劣らない様になるでしよう。

▲石輪、競馬
 ▲洗粉、メリー
 住宅 東京市京橋區築地明石町三十一番地 (電話新橋) 三千八百七十二番

た
ノ
部

味 趣
 (愛粧用品) 化粧水、オパール
 (煙草) 白鉛、オパール
 (飲食) サイダー
 (新開) 少年、洋食
 (雜誌) 少年、洋食
 (小説其他) 大江健山人
 (娛樂) 活動寫真
 (衣類) 縮緬、西洋おもちゃ
 (愛玩) 迎門教會
 (氣身) 柔順
 (質丈) 三尺七寸五分

丈丸高屋高助



高屋高助

歌舞伎座出動 本名 澤村 昇
 屋 號 紀の國屋

▲石鹼、玉石鹼 住宅 東京市淺草區今月町二番地
 ▲洗粉、オパール 電話下谷(一千四百五番)

山姥の金太郎(二回)
 夫婦浪の千代松
 春日局の國千代
 加賀島娘お梅
 先代萩の鶴千代
 菊童道心の石童丸

高丸さんは宗十郎丈の總領息子、明治三十年三月二十一日の生れ性質は至極温順で流石兄さんらしい處があり目下尋常四年生である。清楚たる風采は確的將來澤村家の御家もの二枚目師として成功すべくその柱石たる正に相違なし振りは濱町の藤間に通つて勉強中七歳の時から今日迄で色々大役も勤めたれど何れも器用にやつてのけお父さんに御褒賞を貰つた事數知れずその勤めた主なる役を揚れば左の如し

よ
ノ
部

味 趣
 (愛粧用品) 化粧水、オパール
 (煙草) 白鉛、オパール
 (飲食) 餅菓子、甘酒、吸ひません
 (新開) 少年、洋食
 (雜誌) 少年、洋食
 (小説其他) おどろ、まだ讀まぬ
 (娛樂) キネオラマ
 (衣類) 色角力
 (愛玩) 連門教會
 (氣身) 五旗ひ
 (質丈) 三尺五寸

丈郎次由村澤



澤村由次郎

歌舞伎座出動 本名 澤村宗十郎
 屋 號 紀の國屋

▲石鹼、玉石鹼 住宅 東京市淺草區今月町二番地
 ▲洗粉、不用 電話下谷(一千四百五番)

由ちゃん(おん)は蝙蝠(かぶと)と同じで三十五年十月生れたから寅年である。成る程争はれないもので氣性が丸で虎のやうだ、まさかそんな事もなからうが、兎に角中々勝氣で先づ兄さんの高丸さんが十郎とすれば由ちゃん(おん)は五郎と云ふ處でしよう。そのかはり舞臺も中々活潑、論より證據昨年初めてお父さんの改名披露の時二番目羽左衛門さんのお祭佐七に魚やの小僧を勤めたのを見物した人は何誰も首肯(うなづ)く處で、とても初めて出たとは思はれません。未だ宗十郎さんは三十路の坂を幾つも越さないのに既に未來の高助未來の宗十郎の候補者が出來上つて居るのでから安心な譯です。もう十年も経つたら澤村一家だけで立派な一座が出來ましよう、まづ座頭が宗十郎丈、書出しが宗之助丈、中軸が長之助丈、立且が高丸丈、由次郎丈が二枚目と云ふ順で、それから別働隊としては訥子丈、源之助丈などの豪の者が控えて居る。こうして見ると早速澤村座を再興してやらせたいものである。

木 部

中 村 竹 三 郎 丈

(等五級等札鑑)



中村竹三郎

「若竹や盛へかげの二三寸」
「涼しさや竹に流るる月の影」
本名 村井道一
屋敷 成駒屋
俳名 芝玉
眼名 玉

味 趣

(小説其他) 探偵もの
(雑誌) 大抵見る
(新食) まぐろ(油身)
(飲食) 刺身
(飲物) 日本酒
(煙草) 大和酒

(愛用化粧品)

白鉛、みその香水、パイオレット

(楽類) 義太夫
(衣類) お召
(愛玩) 犬
(崇拜) 金神
(質丈) 淡白
(身氣) 五尺三寸七分

化粧水、レント
歯磨、ダイヤモンド

石鹸、ラクダ
洗粉、三越

住宅

東京市下谷區五軒町十四番地

三 代 目 市 川 團 八 丈

(等五級等札鑑)



市川團八

歌舞伎座出勤 本名 小川孝升
屋敷 成玉屋
俳名 柿猿
「雁啼やよう／＼ 質るなかおくて」
名題披露目録句

味 趣

(小説其他) 講談もの
(雑誌) 朝日、二六
(新食) そば
(飲食) 甘味
(飲物) 飲ます
(煙草) 草

(愛用化粧品)

白鉛、みその香水、ムスク

(楽類) 藝者買
(衣類) 大橋柄
(愛玩) なし
(崇拜) 神道
(質丈) 五尺一寸
(身氣) 丈

化粧水、レント
歯磨、オベラ

た 入 部

石鹸、ホーサン
洗粉、クランプ

住宅

東京市京橋區南八丁
堀町一丁目六番地

優は天保十四年十二月四日淺草猿若町に生る。父は大由事成田屋由五郎と呼び優は其次男なり。四歳の時二代目市川團八に養はれ八世團十郎の弟幸藏の門弟となり市川孝升と名乗り嘉永三年中村座にて八世團十郎の助六に白玉の禿を勤めしが初舞臺なり。文久三年六世團藏の世話にて二世澤村田之助の門に入り田三郎と改名せしが故ありて舊姓に復し明治元年正月河原崎權之助に師事し山崎孝升と改め後權之助九世團十郎を相續せしより更に市川の姓を名乗れり然るに一度團洲の勘氣を受け一時本性小川孝升を藝名となせり。當時中村芝翫の引立にて其附人となりしが應て師團洲の心解け養父の名跡を襲へよとの好意を以て迎られ十五年五月三代目團八を相續し此時山内侯及び柳原伯より定紋附の羽織を祝として贈られたり。三十九年十月歌舞伎座に於て名題に昇進し四十年十二月權少教正に補せられたり。

た
ノ
部

歌舞伎座出勤 本名 中村 太郎
屋 號 八幡屋 俳 名 麥 升
『澁柿の籠に盛られてはづかしさ』
名題披露目録句

市川團右衛門 二代目
(等五級等札鑑)



市川團右衛門

趣 味 (小説其他) 何と限らず
(新誌) 早稲田文學、笑
(飲食) 肉類、天ぷら
(飲物) サイダ
(煙草) 大和
(愛用品) 白鉛、みその
(化粧品) 香水、舶來もの
▲▲齒磨、象印

大兵肥満を以つて鳴る優は明治十五年二月八日大阪南區黒右衛門町に生れたのである。有名な二代目中村富十郎はその實父で、五歳の時春木座(今の本郷座)の駒之助富十郎芝鶴一座で「和田合戦女舞鶴」に門外の子役を勤めたのが初舞臺なので、元來優は幼少の頃は非常に悪戯で常に町内の悪者になつて居た丈に舞臺を嫌ひその九歳に及ぶ迄で家業を休んで居たのである。明治二十三年即ち優の九歳の時同じく春木座で一番目千本櫻、中幕旨兵助に倅を勤めたのが二度目の舞臺でその興行中は春木座は焼失したのであつた十五歳の時更めて團十郎の門下となり市川升太郎と改名し其後は懸命に技藝を勵み各座に出勤中三十四年二月父は不歸の客となつたのでその年の十一月師團洲の庇護に因り名題下に昇進し更に四十年一月歌舞伎座に於て芝翫高麗藏の口上にて二代目市川團右衛門を相續し名題に昇進したのである。

▲▲石鹼、花王
▲▲洗粉、オノール
住宅 東京市京橋區南船町五番地

市川團九郎
(等五級等札鑑)



市川團九郎

趣 味 (小説其他) 涙香
(新誌) 都報
(飲食) 乾もの
(飲物) 日本酒五合位
(煙草) 富士
(愛用品) 白鉛、みその
(化粧品) 香水、オペラ
▲▲齒磨、象印

た
ノ
部

本名 太田 長三
屋 號 大美屋 俳 名 小 栗
『身にあまる聲のみたかし枝蛙』
名題披露目録句

優は明治九年十二月三十日先代壽美藏の子に生れたのである。九子丸と名乗つて元地の市村座で五代目菊五郎が清玄を演じた時種太郎(今の時藏)等と共に出勤したのが七歳の時で初舞臺である。其後團次郎と改め常に父と共に有ゆる大小劇場へ出勤して居つたが、三十九年五月八日父壽美藏は六十二歳を一期として永眠したので懇ろにこれを雜司ヶ谷の本性寺に葬り四十二年五月宮戸座の「二人道成寺」で白拍子を勤め團九郎と改名し名題披露目をしたのである。幼少の頃坂東勝次に付いて研上げたどけ振り事が一番得手であるが長唄義太夫杯も中々堪能だ。それから先代團九郎と云ふ人には屋號も俳名もなかつたので優の今用ひて居る大美屋や俳名の小栗は優の考案である定紋は藤巴の中に桔梗を置いたのを用ひて居る。妻の名は春と呼び當代の壽美藏は優の義弟である。

▲▲石鹼、花王
▲▲洗粉、クラブ
住宅 東京市本郷區森川町一番地
牛屋横町一四七

市川團吉

(等五級等札鑑)



市川團吉

明治座出勤 本名 市村 弘
屋 號 小紅家 俳名 桃 紅

- 趣 (小説其他) 歴史もの、院本、喜劇、時評、時事、新聞、雑誌、都、油漬もの、日本酒、大和、草
- 味 (飲食物) 和服、手細工、類、玩、拜、質、伊勢大神宮、五尺四寸
- (愛用品) 白鉛、みその、香水、金瓶、化粧水、オペラ、歯磨、菊世界

たの部

優は阪地にて夙に有名なる市川市十郎の男なり。明治十一年一月十四日父市十郎 上京して新富座に出勤中、京橋南金六町に生れ直ちに父に伴はれ大阪南區坂町の自宅にて養育せられたり。年七歳に及びて大阪朝日座にて忠臣藏四段目の供奴を勤めしが初舞臺なり一座は父市十郎は勿論先代延三郎、璃笑、芝鶴等なりし明治二十一年即ち十一歳の時父と共に本郷春木座に駒之助等と一座し其折團十郎の門弟となり團吉と改めて歸阪せり後三十二年延二郎と共に東京座へ乗込みしが當時師團十郎は自分の門弟なれば歌舞伎座へ來たれよとの勧めに依り東京座を断り歌舞伎座へ出勤し同年九月團十郎の口上にて名題披露目をなせし以來東京俳優となりたり。容貌の示すが如く優は女形に成功すべき素質を有す、現に優の賣出し狂言は何れも且なりしが優の身長や甚は短からず且を嫌ひ立役を好むの風なり。

住宅 東京市淺草區五町二十番地

石鹼、競馬、洗粉、歌舞伎

市川團子

(等五級等札鑑)



市川團子

- 趣 (小説其他) 近松、四鶴、鏡花、紅葉、時評、時事、新聞、雑誌、都、油漬もの、日本酒、大和、草
- 味 (飲食物) 和服、手細工、類、玩、拜、質、伊勢大神宮、五尺四寸
- (愛用品) 白鉛、みその、香水、オペラ、化粧水、オペラ、歯磨、菊世界

歌舞伎座々付 本名 喜熨斗政泰
屋 號 澤潟屋 俳名 菊
稿焚て行年送る笑ひ哉
近作の味句

たの部

猿之助の子女が何れも確者であるのは確かに猿之助丈よりも寧ろその妻お翠の方の御手柄たる事勿論であるが、伎藝の研鑽に日も惟れ足ざる子供達に相當の教育を授くるが如きは正に猿之助丈特有の一見識と云はねばならぬ。此團子丈は京華中學卒業生であること事だ。普通の人なら中學卒業位でもないが俳優としては先づ優の外はない。明治二十一年五月十日に觀音裏千束町に生れたので五歳の十月初めて舞臺を勤め十一二の頃新富座で小供芝居の旗幟を翻し非常に評判が好したが幾もなく小供芝居へ出すのは有害無益だと云ふ師市川團洲の持論に基いて断然小供芝居に出るを廢し只管父の許で技藝を勉強し傍ら學事を勤みつゝあつたのである。藝筋も眞に質がよくそれに兎に角相當の識見もあるようだし、此分で進んだら通れ大立物となる事今から収入印紙の一百枚も貼て保証仕つる。妻君を春子と呼んで優と同年である。

住宅 東京市淺草區千束町二丁目二百五十五番地 電話下巻(一千八百六十番)

石鹼、競馬、洗粉、メリー

歌 舞 伎 俳 優

澤村宗十郎 目代七
(等二級等札鑑)



澤村宗十郎

東京俳優組合評議員
歌舞伎座幹部役員委員 本名 澤村福藏
屋敷 紀の國屋 俳名 澤村福藏
『澤むらにあさりし田鶴の時を得て』
『名のる千とせの聲さや、かなり』
訥升七代目宗十郎殿名に付東久世通福伯の送りし詠歌

- 趣 味 (小説其他) 何と限らず
新小説、文藝、其
他いろいろ
大抵とります
淡白質
葡萄酒、ビール
エジプト
- 愛用化粧品
▲白鉛、御園
▲香水、オペラ
- 娯楽 (小説其他) 小兒と散歩
洋服趣味なもの
洋服、小物、袋入
西洋小物、袋入
四守、妙法、蓮門
教會、厚篤實
五尺一寸五分
- 愛用化粧品
▲化粧水、レート
▲齒磨、オペラ

そ、ノ、部

鑑 明 優 俳

市川團十郎 目代初
(等五級等札鑑)



市川團十郎

本名 望月雄五郎
屋敷 飛昇屋 俳名 金峰
『是どても一ツ畑や秋の茄子』
『やうくと敷に入たり青瓢』
名匾披露目の味句

- 趣 味 (小説其他) 融禱物並紅葉派
色々
時事、俳
淡白質
和酒又ビール
エジプト
- 愛用化粧品
▲白鉛、みその
▲香水、スミレ
- 娯楽 (小説其他) 玉突
御召
寶玉
豊川稻荷
勝氣
五尺三寸
- 愛用化粧品
▲化粧水、レート
▲齒磨、オペラ

た、人、部

一俳優として、技藝の巧拙は姑く措き、人を使役する側に立つ者と、又使役せらるる側に立つ者とあり。優の如きは正に使役する側に立つ者即ち座頭の貫目のある人なり。優は明治十年十一月三日即ち天長二十六回の佳展を以て名古屋に生る父を佐吉と呼び、幼にして故人坂東秀調に養はれ、五歳の時坂東勝太郎と名乗り名古屋末廣座に出勤せしが初舞臺なり。後故ありて離縁となり、更めて團十郎の門弟となり二十年十一歳にて市川才三郎と改名し以來大いに賣出したり三十八年二十七歳の時明治座に於て才三郎改め團升となり名題披露目をなす、その藝風勇健にして押出しの立派さは宛然八百藏のその如し、年三十路を越すこと僅かに二ツ三ツ、前途や頗る多望なりと謂ふべし。他を操縦するの能と燃るが如き向上心のあるあり、後年一方の立者たること言を俟たず。

▲石鹸、玉石鹸
▲洗粉、クラフ

住宅 (東京市浅草區今月町二番地
電話下谷 (一四四五番))

優は明治八年十二月三十日の出生にて故人助高屋高助の一粒種。源平と名乗り、初舞臺を勤めしは七歳の時なり。十九年二月即ち優の十二歳の春父高助不歸の客となりし以來義兄訥子と共に有ゆる悪戦苦闘を續け一先づ大阪に落つき専心技藝の研鑽に餘念なかりしかばその名漸く高く十七歳の時四代目訥升を相續し三十二年十一月歌舞伎座より迎られ久々に歸京せり其後各座に出勤中選ばれて歌舞伎座幹部員となり四十二年九月七代目宗十郎を襲名し盛んなる改名披露をなせしは世人の記憶に新たなり。優の最も長する所は濡事ならんも現今女形振底の折柄。振袖物娘形などの女形に扮して優婉の藝風其眞を傳へ、所作事また妙域に達せり、妻をちか子(九年生)と呼び故人田之助の娘にて間に高丸、由次郎などあり澤村家の運勢、望月の缺くる事なしとは實に目出度き限りなり。

▲石鹸、玉石鹸
▲洗粉、クラフ

住宅 (東京市浅草區今月町二番地
電話下谷 (一四四五番))

坂東鶴之助

(等五級等札鑑)



坂東鶴之助

本名 渡邊房次郎
屋敷 音羽屋
俳名 龜鶴

趣味 (小説其他) 涙香外色、毒報文藝外色、濃白なもの、血の氣のない魚、日本酒一升位、救島

愛用 (化粧品) 白鉛、みその香水、色々

愛用 (歯磨) 齒磨、オベラ

愛用 (身丈) 短氣、五尺一寸五分

愛用 (衣類) 釣り、網、舟、結城の類、竹籠の類、佛を念ず

愛用 (玩物) 短氣

愛用 (崇拝) 短氣

愛用 (氣身) 短氣

部

澤村宗之助

(等四級等札鑑)



澤村宗之助

明治座出勤 本名 伊藤三次郎
屋敷 紀の國屋
名題披露目録句

趣味 (小説其他) 何んに限らず、色々、都、報知、時事、洋食、日本酒少々、飲まず

愛用 (化粧品) 白鉛、みその香水、ムスク

愛用 (歯磨) 齒磨、オベラ

愛用 (身丈) 五尺二寸

愛用 (衣類) 玉夾、お召、寫眞機、不動

愛用 (玩物) 勝氣

愛用 (崇拝) 勝氣

愛用 (氣身) 五尺二寸

部

「御ひるきのかたをたのむの祝哉」

名題披露目録句

幕が明けば、紀の國屋引と聲の掛る、今賣出しの花形は明治十九年三月九日の出生にて澤村訥子の次男なり容姿の美は言はずもあれその藝風も衷心燃ゆるが如き所ありて正に芝術のそれの如く特に可憐なる娘形に扮して絶妙と謂ふべく所作事また花柳壽輔に依りて叩き込みし手腕なれば上手下手は言ふ丈野暮宛然花に戯る胡蝶もかくやとばかり。初めての舞臺はまたもの心附かぬ五ツに足らざる時にて後子供芝居に出勤し兄小傳次又つた吉右衛門等と相俟て花と稱せられ四方の寵を得十六歳の時市村座にて名題披露目をなし滅多になき景況も呈したり從來主に父訥子と共に東京は勿論通關西地方の各座に出勤し益々その手腕を研ぎ今や私に風雲を待てり、最後に特筆すべきは優の語學に通達せる事これなり。先年東京座に於て荒川博士と「シイザ」を演じその流暢なる Pronunciation に満場殆んど恍惚たるものありき。

▲石喰、競馬
▲洗粉、クラフ
住宅 東京市淺草區今月町十五番地
電話下谷(一)千三百八十一番

優は萬延元年十一月三日淺草猿若町に生る幼にして所作事の名人坂東彦十郎(彦三郎の秘藏弟子)に養はれ其頭の大家松賀大藤に就き懸命に學びし振事猿之助の壘を摩するものあり。よくぞ斯く造身扮の出来しものぞとは黒人筋の動かぬ評なり。七歳の秋音丸と名乗り猿若座にて龜藏(坂彦の父)の權太に倅を勤めしが初舞臺にて其後引續き各座に出勤中二十九歳の折千歳座(今の明治)にて故人左團次初めて佐野次郎左衛門を演じ大當りをみて七十日間打續けし際龜藏と改め名題に昇進し盛んなる披露目をなせしが當時中村仲藏門下にも同名鶴藏ありしかば翌年團菊左協議の上特に彦三郎の幼名を許され鶴藏改め鶴之助となり三十三歳にして父彦十郎を亡ひぬ。妻を艶子(慶應二年生)と呼び去る十七年中結婚せしものにて間に神童の譽れ高さ一鶴坊外五人何れも末頼母しいものばかり。

▲石喰、玉石喰
▲洗粉、オノール
住宅 東京市京橋區築地一丁目二番地
電話新橋(四)千三百八十一番

市川雷蔵 六代目
(等五級等札鑑)



市川雷蔵

「細枝に蕾の重く山椿」

名風披露目録句

市村座出勤 本名 井上慶雄
屋 號 柏 屋 俳 名 柏 車

- 趣 味 (小説其他) 涙香、色、時高、都、讀、洋食、茶、福壽草
- (愛粧用品) 白鉛、みその香水、赤箱
- (娯楽) 釣、寫眞、繪、二子、小島、繪葉書、團十郎、八百藏、内氣、五尺一寸
- (愛衣) 絹、襪、袴、袴、袴
- (崇氣) 丈質、五尺一寸
- (化粧用品) 齒、水、オベラ

ら
ノ
部

市川萬丸



市川萬丸

(因に坊やは新派へ頼まれる時は本名の田中一を用ひて居る)

本名 田中一

つ
ノ
部

- 趣 味 (小説其他) 學校の本、幼年畫報、色、ゴッホ、流車手弄、御師匠さん
- (愛粧用品) 白鉛、みその香水、金鷄
- (娯楽) 活動寫眞、色、ゴッホ、流車手弄、御師匠さん
- (愛衣) 三尺六寸
- (崇氣) 丈質、三尺六寸
- (化粧用品) 齒、水、オベラ

やれ丸丸！やれ丸丸！と口の掛る事系の如しとは虚言でもなんでもない、と云ふのも丸丸ちゃん第一舞臺度胸があつて器用な奴であるからどんな大役でもどんな舞臺へ出てもビクともせず綺麗にやつてのけるので。一體放膽で替古などには身を入れない、併し是れは、一を聞いて十を知るの力があるからで、一の數を二ツおいて初めて二を知ると云ふ、迂遠敷ことは坊やには出来ない。藝は中々多方面で殊に活氣のあるのが何より嬉しい。兎に角此分に進んだなら未來の吉右衛門たり羽左衛門たる事、鏡に掛けて見る如しと云つても敢て世辭とばし思ひ玉ふな。坊やは市川左升さんの弟、左團次さんのお弟子、三十四年十一月十六日生れ。坊やの悪戯は有名なもの先年明治座で成駒屋の部屋の前で「成駒屋の部屋は何處だ」と怒鳴つたので人々皆目と目を見合はさぬ者はなかつたとやら……

▲石鹸、ケール、洗粉、オノール 住宅 東京市日本橋區米澤町三丁目二番地

優は明治二十三年二月九日現住所でオギキと生れたのですが、生れ落ると間もなくフトした事で其頃近處に住つて居た今の市川八左衛門に抱かれて樂屋へ行つたのが縁となり遂に何にも知らず八百藏に貰れ蝶よ花よとおんば日傘で育てられ、英太郎と名乗つて團洲の弟子となり三歳の時から舞臺に出て何に不足なく過しました。月に叢雲花に嵐の譬へに洩れすことに一大事が持上つたので、とはまた何んですか、養母の死です即ち人一倍優を可愛がつてくれた八百藏夫人の亡なつたのです、是です、實に是です。ア、言ふべからざる悲惨の涙に幾度袖を絞つたでしょうか、で其後の優の性質がラリと替り誠に陰鬱な人となつた、そして佛壇に向つて念ずるのをレッスンとして居ました。併し是れが家庭の破綻の原因となるのは神ならぬ身の知る由はありません、遂に離縁となりましたア、また已を得ません。四十一年三月明治座で英太郎改め雷蔵となり名題に昇進し今は唯もう一生懸命で勉強して居るのです。

▲石鹸、ホルマリン、洗粉、歌舞伎 住宅 東京市淺草區北橋島町九十七番地

む
部

柳盛座出動本名 三井喜一郎
屋 號
成駒屋

中村梅之助



中村梅之助

味 趣 (小説其他) 瀛六もの
 (雑誌) 都、中央
 (新報) 洋食
 (飲食) ビール、サイダ
 (飲物) オリエン
 (煙草) オリエント

愛用品 (化粧品) ▲▲白鉛、みその
 ▲▲香水、パイオレット

身氣崇愛衣娛 (樂類) 茶、花
 (玩品) お召
 (拜玩) 莫入の筒
 (質) 不動尊
 (丈) 故墟
 五尺三寸

化粧水、レイト
 齒 磨、バラ

小劇場ながらも年が年中打續け、何時も替らぬ大入満員の柳盛座でその人氣を一人で背負て立つて立旦は明治二十二年三月二十一日の生れ愛嬌たツぶりの無暗矢鱈にない好男子、梅ちゃんくと女の子に騒がれるのも無理ならず。九ツの時に初舞臺を勤めてから今日迄芝居と云ふ芝居、役と云ふ役、何んでもかんでもやッて来た丈け無類の腕達者併し達者にまかせて藝の荒れるには困る。今が最も大切な時期、修業時の一年は成功後の十年に當るのだから、何んとか名案はなきや、父親は兎も角此息子を何日迄も小芝居に置くのは能でもあるまいと云ッて差當り………ないが時機の来る迄で熱心にヤッて貰ひたい。年は若し柄はあり顔は好し出世は勉強次第だ。それから梅ちゃんの多能には驚く、曰く長唄、曰く清元、曰く常磐津、曰く義太夫、曰く踊り、曰く二絃琴、曰く清樂、曰く琴、曰く胡弓、オ、草臥れた。

▲▲石鹼、花王
▲▲洗粉、かぶき

住宅 東京市下谷區竹町十五番地

(二三)

尾上梅之助



尾上梅之助

味 趣 (小説其他) 草子
 (雑誌) 少年、演藝新聞
 (新報) ビフテキ
 (飲食) カワレフ
 (飲物) 冷水

愛用品 (化粧品) ▲▲白粉、みその
 ▲▲香水、オペラ

身氣崇愛衣娛 (樂類) キネオウマ
 (玩品) 色々
 (拜玩) 小細工、折紙
 (質) 櫻利支天
 (丈) 温順
 三尺寸分

化粧水、レイト
 齒 磨、ダイヤモンド

歌舞伎座、市村座出動 本名 保住秀雄
屋 號
音羽屋

む
部

梅之助さんは今をときめく梅幸丈の秘蔵弟子、明治三十三年十月八日、洲崎辨天町で生れた生粹の江戸兒。昨年初め梅幸丈の門に入り梅之助と云ふ名を貰ひ師と共に濱松の歌舞伎座へ乗込み八百藏丈の長兵衛に、性長松を勤めたのが初舞臺であります。二度目が歌舞伎座五月 狂言團藏丈の二の替りで千本櫻の安徳天皇に扮し芝翫丈に抱かれて勤めたのです。當今子役柳底の折柄市村座より頼れ梅幸丈から芙蓉丈に預けられ毎興行に大役を勤めて居るのです。一體優しい質であるから彼方からも梅坊此處からも梅坊と可愛がられ藝事も流石粹な育ち丈けに萬事に抜目なく仕込まれ中でもトコトンは師匠の聲掛りで濱町の藤間へ通ひ琴長唄は甘いもの。何れ遠からず芙蓉丈位に出世するとは記者が今から血大の判を捺して保証します。秘し藝は藤八拳が中々達者で大人跳足のお手際、目下尋常三年生で何時も級長とは蛇は寸にして人を飲むの態へ誠に頼母しい事である。

▲▲石鹼、玉石鹼
▲▲洗粉、三越

住宅 東京深川洲崎辨天町二丁目七番地
電話浪花 (一千三百七十番)

(三三)

丈ほしの東坂



坂東のしほ

此寫眞は優が先年新喜座にて女優大會の時しの(揚屋)に扮せし時のものなり

本名 水田ふく子
屋 號 大和屋
俳 名 秋 花

趣味 (小説其他) 西洋小説
 (雑誌) 都 報、文藝
 (新聞) 洋食、茶
 (飲食) 福壽草、敷しま
 (煙草) 草物

娯樂 (玉突、木棉物、寫眞器、不動尊、活達) 四尺八寸
 (衣服) 氣質
 (玩物) 丈質
 (類) 齒粧水、みその四季の花
 (化粧用品) 齒磨、御園齒磨

の部

石檢、鼓馬
洗粉、クラフ

住宅 東京本所區向島須崎町二百四十五番地
電話浪花 (二千九百三十六番)

市村羽左衛門 日代五十
(等二級等札鑑)



市村羽左衛門

『橘や細い幹でも十五代』
羽左衛門鑑名味句

東京俳優組合評議員 本名 市村録太郎
歌舞伎座幹部技藝委員
屋 號 可 江

趣味 (小説其他) 紅葉、演、文藝、新小説
 (雑誌) 讀ます
 (新聞) 油漬もの、葡萄酒、エジプト
 (飲食) 草物

娯樂 (競馬、お召、買入、不動尊、放駒) 五尺三寸
 (衣服) 氣質
 (玩物) 丈質
 (類) 齒粧水、レイト
 (化粧用品) 齒磨、菊世界

石檢、玉石檢
洗粉、オノール

住宅 東京市京橋區築地二丁目十五番地
電話新橋 (三千一百三十二番)

優は明治七年十一月五日の出生なり五歳にして故人坂東家橋に養はれ六歳の春竹松と各乗りて新富座に出勤せしが初舞臺なり。十九歳の時父家橋を失ひしより翌年歌舞伎座に於て團菊左の大一座の扱市村家橋と改名し更に三十歳にして船辨慶に靜御前と知盛を勤め十五代目市村羽左衛門を相續せり。舉止瀟灑として江戸兒の俵態あり、藝風放膽にして頗る多方面特に叔父菊五郎の伎を體得して生世話ものを演ずれば天下第一品と稱せらるる當代一の人氣役者なり曾て故三木竹二氏未來劇壇の牛耳をさるもの必ず優ならんと評せしも決して過言に非ざるなり。唯惜らくは柄の無きことなるが、優は其小柄を忘れしむる迄に人を魅するの手腕あり。竹松時代には多く見る可きものなかりしが、大器晩成とは正に優の如きを謂ふなるべし。妻を春子(十四年生)と呼び去三十五年中結婚せるもの間に勇(三十八年生)と云ふ男子あり。

女團洲市川九女八會て曰く『我々共の方は一向淺ましいほど、皆やくざものばかりでございます。たゞ一人女の方で頼みに致して居りますのは、あの、坂東秀調さんの奥様——のしほさんでふいます、あの方は大層藝道に御熱心でございます、いろいろ新規なお考へもございます、第一有名な大和やさんのお嬢さんですから總ての素養もありますし、あの方は是れから段々女優として立つてゐらつしやるのに——口幅た

い事を申すやうでございますが誠に望みの多い方と存じます』と九女八の評至れり盡せり。優は明治十四年十二月二十二日故人秀調の女と生れ幼より技藝を好み荷も劇に關するものにして知らざるなく知つてゐる通せざるはなし。蓋し現時及び將來の理想的女優ならんか。その秀調と婚せしは十八歳の時にて一男勝見あり、初舞臺は二十二歳本郷座に於て。

市川九團次
(等五級等札鑑)



市川九團次

演伎座出動本名 佐治時太郎

屋 高島屋 俳 高 升

趣味

小説其他 講談もの
演藝新聞 都
エビフライ
ワイスキー
エンヂヤンテレス
草物物聞誌
煙飲食新雜

愛用化粧品

白粉、バウチリ
香水、不用
齒化粧水、不用
齒磨、ライオン
身氣崇愛衣娛
丈質拜玩類樂
淡白 穴守 結物
五尺三寸八分 勝負事

部

石鹸、ウキワ
洗粉、クラブ

住宅

東京市下谷區寄居町十四番地
三升家方

凡そ何事に依らず一方に長たる人は何處か異つた處がある。今や赤坂演伎座にたてこもり一方の大將として數多き俳優を操り近來好景氣を續けつゝある優は、兎に角、人の長たる資格を具備して居る様に思はれる。優の成功は未だ大なるものはないが俳優として成功したものの一人と云て差支へない。産れは慶應元年、先代左團次の門弟となつたのは中年からで、三三と稱した。後年九團次と改め名題に昇進し常に明治座で働いて居たが兩三年前今の演伎座の主任となつたのである。此間種々の話があるが、都合に依り茲には載せない事とした。その藝風も骨があつて淡白で、恐らく左團次の遺跡を傳ふるもので優のやうなのは少いであらうよ。何しろ優の前途は遠達である、優は尙ほ發展すべき未來の多くを有て居るのである。努めよや九團次、確りしろよ高升先生!

市川男寅



市川男寅

部

瀧野屋 荒川 清

趣味

小説其他 學校の本、お伽
演藝新聞 都
西洋料理
みかん水
草物物聞誌
煙飲食新雜

愛用化粧品

白粉、みその
香水、赤箱
齒化粧水、四季の花
齒磨、ライオン
身氣崇愛衣娛
丈質拜玩類樂
温順 金光散
三尺 寸分

石鹸、ケープ
洗粉、歌舞伎

住宅

東京市淺草區五町二十八番地

男寅さんは當代一の女形の名人女寅太夫の一人息子明治三十一年八月八日生れ、五ツの時團十郎の門に入り初舞臺を勤めるに就きお父さんと師匠の家へ藝名を貰ひに行た處が團十郎の云ふには「何にも殊更己がつけるには及ばねエお前の家に善い名がある。男寅とつけるがいよ」との返事。一體此男寅と云ふ名は女藏の幼名であるからお父さんの女寅と云ふ名よりいゝ名前である。だからその定紋を隅切角の一紅葉でお父さんのとは違つて居る。將來は立役にするとの事であるが太夫の息子丈に體の質が女形に成功する様な氣がする。毎日濱町の藤間へ通つて踊りの勉強中であるが、指す手引く手が一々藤間のお師匠さんの氣に適ひ、流石は太夫のお子だ、頼母しい」と師匠も舌を巻いたこと、それに給が一番好きで中でも軍艦と水雷艇の繪が最もお手際、それも殊更ら師匠がある譯ではない、自分の器用で書くのだとは愈々以てエライ。

市川九郎次郎
(等五級等札鑑)



市川九郎次郎

演伎座出動本名 佐治時太郎

屋 高島屋 俳 高 升

趣 味

小説其他 講談もの
雑誌 演藝叢報
新聞 都
飲食 都
煙草 都
新物 都
物物 都
草物 都

愛 衣 類

樂 勝負事
類 緋袴
玩 生花
拜 穴守
質 淡白
丈 五尺三寸八分

化粧水、不用
齒 磨、ライオン

愛 用 品
白粉、バツチリ
香水、不用

部

石鹸、カキワ
洗粉、クラフ

住宅 東京市下谷區數寄屋町十四番地
三升家方

市川男寅



市川男寅

部

名 荒川 清

屋 瀧野屋

趣 味

小説其他 學校の本、お伽
雑誌 都
新聞 都
飲食 都
煙草 都
草物 都

愛 衣 類

樂 軍艦の給、掛、串、鉤、洋、空、金、温、丈、三尺寸分

化粧水、四季の花
齒 磨、ライオン

石鹸、ケイバ
洗粉、歌舞伎

住宅 東京市淺草區五町二十八番地

男寅さんは當代一の女形の名人女寅太夫の二人息子
明治三十一年八月八日生れ、五ツの時團十郎の門に入
り初舞臺を勤めるに就きお父さんと師匠の家へ藝名を
貰ひに行た處が團十郎の云ふには「何にも殊更己が
けるには及ばねエお前の家に善い名がある。男寅とつ
けるがいく」との返事。一體此男寅と云ふ名は男女藏
の幼名であるからお父さんの女寅と云ふ名よりいく名
前である。だからその定紋を隅切角の一紅葉でお父さ
んのは違つて居る。將來は立役にするとの事である
が太夫の息子丈に體の質が女形に成功する様な氣がす
る。毎日濱町の藤間へ通つて踊りの勉強中であるが、
指す手引く手が一々藤間のお師匠さんの氣に適ひ、流
石は太夫のお子だ、頼母しい」と師匠も舌を巻いたと
のこと、それに繪が一番好きで中でも軍艦と水雷艇の
繪が最もお手際、それも殊更ら師匠がある譯ではない、
自分の器用で書くのだとは愈々以てエライ。

凡そ何事に依らず一方に長たる人は何處か異つた處
がある。今や赤坂演伎座にたてこもり一方の大將とし
て數多き俳優を操り近來好景氣を續けつゝある優は、
兎に角、人の長たる資格を具備して居る様に思はれる。
優の成功は未だ大なるものはないが俳優として成功し
たものゝ一人と云て差支へない。産れは慶應元年、先代
左團次の門弟となつたのは中年からで三三と稱した。
後年九團次と改め名題に昇進し常に明治座で働いて居
たが兩三年前今の演伎座の主任となつたのである。此
間種々の話があるが、都合に依り茲には載せない事
としたその藝風も骨があつて淡白で、恐らく左團次の
遺跡を傳ふるもので優のやうなのは少いであらうよ。
何しろ優の前途は遠達である、優は尙ほ發展すべき未
來の多くを有て居るのである。努めよや九團次、確り
しろよ高升先生!

中村翫助
(等五級等札鑑)



中村翫助

歌舞伎座、市村座出勤本名 加藤松太郎
屋 成駒屋 松 塘
『やう／＼に育て上げたる鉢の梅』
名題披露目味句

- 趣味 (小説其他) 深香、弦響
 (新誌) 色々
 (食聞) 都 都
 (飲物) ビフテキ
 (煙草) 天ぶら 日本酒大盆 福壽草
- 愛用 (化粧品) 白粉、みその香水、金鷄
 (歯磨) 齒 齒、象印
- 娛樂 (釣り) 釣り
 (類) 結城立結
 (玩) 竹葉
 (拜) 神道
 (質) 硬直 五尺

く、ノ、部

敵役に扮して絶妙の評高き優は文久三年六月八日淺草山谷に生れ故人中村鶴藏の甥に當りて、父は加賀藩の幸吉と云ふ人なり。十一歳の時先代芝翫の弟子となり中村芝次郎と名乗り猿若座に出勤し、一番目三日太平記にて師匠の光秀、仲藏の嘉平、宗十郎の藤吉、大三郎の皐月、鶴助の一作に十次郎を勤めしが初舞臺にて十四歳の時小供芝居(左喜松等)の加入しその別箱となり 遍く東海道より美濃路を經京阪地方を巡業し久方振にて歸京し故人菊五郎が新富座にて初めてメ組の喧嘩を演じたりし時芝次郎改め翫助となり名題下に昇進し其後市村座にて故片岡市藏の『長榮稻荷利生記』(一番目)の時中幕實録先代萩に鐵之助を勤め名題下目なせり三十二年師芝翫歿後は現芝翫て青年俳優を輔け、其得意の實惡ごころり。妻をるい子と呼び優と同年、間に定ね子、福子の二男二女あり。

▲石鹸、アイボレ
▲洗粉、メリー 住宅 東京市淺草區村 四丁目一丁目

市川國松



市川國松

市村座出勤本名 堀越鐘吉
屋 成田屋

- 趣味 (小説其他) お伽噺 少年、幼年番報
 (新誌) 刺身、フライ
 (食聞) コーヒー
 (飲物) |
 (煙草) |
- 愛用 (化粧品) 白粉、みその香水、不用
 (歯磨) 齒 齒、ダイヤモンド
- 娛樂 (活動寫真) 活動寫真
 (類) 好なし
 (玩) 繪端香
 (拜) 稻荷
 (質) 内氣 三尺寸分

く、ノ、部

可愛らしい顔をして居るではありませんか、此の子は猿藏さんの忘れ形見です。お父さんの全盛時代には世辭愛嬌に取巻かれて居た坊やも、今はどうだか考へれば、不覺涙がこぼれます。生は明治三十三年七月三十日で、蝶よ花よと擲育はれ、四歳の春歌舞伎座で踊子になつたのが初舞臺、三十九年四月十五日父猿藏がとう／＼長へに歸らぬ旅に赴かれた後はお母さんのお千代さん(明治九年生)の手一ツで育てられ、田村さんや女寅さんの庇護で市村座または演伎座へ出勤して居るので、お母さんは今築地成田屋の隣で小綺麗な小間物化粧品の店を開き名も三升屋といつて居る。坊やはこゝに居るので藝事の一通りは仕込まれ一番お手筋がトコトンで御師匠さんは本家藤間、それに義太夫が中々甘く橋辨慶が十八番、目下尋常三年生であります。性質は極く沈着いた方です。

▲石鹸、ケールバ
▲洗粉、オノール 住宅 東京市京橋區築地二丁目二十五番地 (電話新橋 四百十一番)

市川九藏 目代四 (等五級等札鑑)



市川九藏

市川のなかれを汲みて桃の花 さかえ行くへき春や幾はな 爲九藏丈東久世通祿

- 趣味 (小説其他) 院本、古代史、新誌、都報、時、甘いのもの、日本酒少量、煙草、吸はぬ
(愛粧用品) 白粉、みその香水、同、香粉
(身氣崇愛衣娛) 名所古跡(旅行) 地味なもの、鼓、琴、不動、稻荷
(化粧水、齒磨) 四季の花、蘭世界

部

中村太翫 目代二 (等五級等札鑑)



中村太翫

- 趣味 (小説其他) 講談もの、新誌、中央、魚類、日本酒一升位、煙草、白梅
(愛粧用品) 白粉、百助美人の香水、色々
(身氣崇愛衣娛) 酒に酔ふ事、結城紬、小細工のもの、天地神、金光
(化粧水、齒磨) ダイアモンド

歌舞伎座、演伎座、出勤 中村久太郎

部

私どもには別に経歴談と申して、此のとは有りませんが、一體私は清水六郎の赤坂で三十俵取の役人で清水清兵衛と云うたで、私は七歳の時先代中村太翫の三十三歳で、佐野松と呼び十三歳の時六代目太翫の時六改め二代目太翫となつてからは京阪地を到る所非、此時分の艱苦勞はともお話にはなりませぬや、今の俳優の苦上から蛇の墮る所や雪の中を歩いて、青天井の遊張の小屋で見物が雨の時は傘をさして観て居るやうな所ので芝居をするのを知て居る者は八百藏さん、故秀調さんに私にくらゐる者でしようとい一杯機嫌の太翫は白髪頭を振り立て、爾かく談じた。太翫君の妻君はお花(文久二年生)と云ひ二十年前に合巻になつた人で中々愛嬌ものである。

石鹸、花玉 洗濯粉、たつた 住宅 東京市京橋區木挽町三丁目三番地

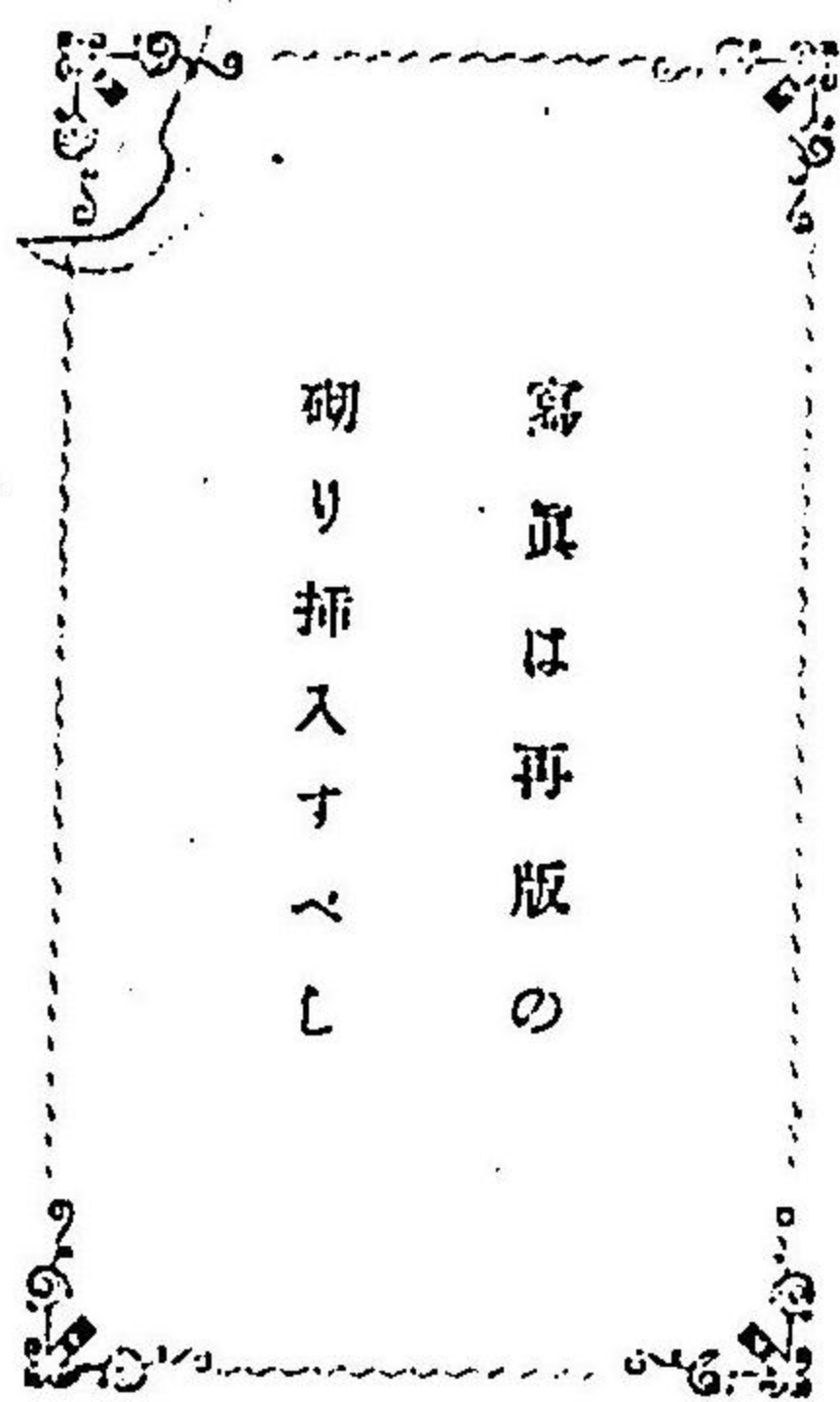
優は明治十五年五月十五日寶慈を以て鳴る近世名人七代目市川團藏丈の次男に生る。幼名を銀藏と呼び三歳の時初めて舞臺に出動せり。三十年即ち優の十六歳の折銀藏改め茂々太郎(父團藏の幼名)となり、淺草座(今の國華座)新富座等の小供芝居に出動し銀藏の名愈愈高かりしが父團藏故人團洲と合はす東都梨園を脱するに付き優は淺草座に於て鈴ヶ森の幡隨院長兵衛を演じ(權八は叔三郎當時幸之助)之れをお名残りとなし父と共に阪地に赴きしは既に十早霜の昔にて一時東都より忘れられたるが如き觀ありしが、四十一年春偶々父團藏に伴はれて歌舞伎座彌生狂言に乗込み父が一番目先代萩に仁木彌正を演じて一代の盛事を盡し、時中幕鈴ヶ森に優は權八を勤め四代目九藏を相續し華々しく改名披露をなせり、以來再び東京俳優となり益々技藝の研鑽に怠りなし、顔も美しく、年も若く、蓋し優の發展は今後に在りとす。

石鹸、ホーサン 洗濯粉、カメラヤ 住宅 東京市日本橋區箱崎町四丁目一番地

く
部

本名 守住 ケイ
屋 號 雅 號
成田屋 月 華
「淑徳嘗聞絶點瑕。豈唯伎藝早成家
當壇四面光瑩徹。恰好美名呼月華」
贈九女八學海居士

市川九女八丈



寫眞は再版の
砌り挿入すべし

味 趣 (小説其他) 院本、演藝、歌舞伎、文藝、
煙飲食新雜 (歌舞伎、文藝、
草物物聞誌 (歌舞伎、
白梅、野菜、
白粉、みその
香水、同
齒化粧水、四季の花
磨、黄蘗

故人成田屋優の伎藝の勝るを稱揚して「糸八に翠丸が有たら立派な己の相手だが」と云へり蓋し優の伎藝の非凡なる洵に當代の珍と云ふべし。優は天保五年神田豊島町に生れ後牛込赤城に住みけり。父は三人扶持ぐらゐの極く輕き身分なりしが天性踊りを好み兩親に隠れて坂東三枝八の弟子となり七歳の祝に汐汲を踊り長屋中の誰彼れを驚かせし處より愈々藝道を以て身を立てんと欲し更に其頃の名人坂東三津江の門弟となり桂八の藝名を許され師と共に各大名屋敷へお狂言に上り其後寄席芝居へ出勤するに付き桂八の名を返して半四郎の弟子となり岩井糸八と改め次に團洲の門に入り市川升之丞と改めしが永年糸八にて通りし故人々依然糸八々々と呼びしより今は舊名に復せる也。曾て師の勸氣を蒙り破門されしが櫻癡居士の口利にて團洲に歸り更に九女八と改名す。

住宅 東京市下谷區上野櫻木町四番地

岩井三條丈郎 目代五 (等五級等札鑑)



岩井三條

歌舞伎座、市村座出勤 本名 淺田久次郎
屋 號 俳 名
大和屋 燕 子
「たけ狩や聞ながら行く山の道」
名題披露目味句

味 趣 (小説其他) 源平盛衰記、
煙飲食新雜 (歌舞伎、
草物物聞誌 (歌舞伎、
白粉、みその
香水、御園香精
齒化粧水、四季の花
磨、ダイヤモンド

く
部

優は明治十五年六月二十八日の出生にて、四代目糸三郎の實子即ち八代目岩井半四郎の孫に當る。六歳の時歌舞伎座に於いて團十郎の河内山に子役を勤めしが初舞臺にて紀之丸と名乗れり。十三歳にして明治座にて故人左團次の明智三羽鳥の安田作兵衛に伴を勤め左團次の口上にて紀之丸改め久次郎となり、其後東京座の異風の行列(芝祝の)に五代目糸三郎を襲ぎ成駒屋の口上にて名題に昇進し同座解散後一時宮戸座へ出勤なせしが先般某有力者の盡力にて歌舞伎座へ附俳優となり近頃は市村座に出勤して其花形たり。股肱と頼みし松之助歿後岩井家の運命を双肩に擔ふべき身の兎角健康勝れざるは誠に遺憾ならずや、然れども道に熱心なる優は往々病體を忘れて心を技藝に専らにするに至ふべし。元西川姓、後淺田と改む、妻のてい子大に内助の効あり。

住宅 東京市京橋區出雲町二番地
電話新橋 (四千八百三十六番)

や

東京俳優組合評議員長 本名 橋尾龜次郎

旭の影をちからに開く牡丹かな
八百藏殿名跡可

立花屋 俳名 中車

市川八百蔵
市川八百蔵



小説其他 院本 色々 時事、報知 時、栗、符 日本酒 福壽草、エジプト

愛用化粧品 白粉、御園 香水、御園橋 御園橋

娯楽 旅行 骨董 音楽 金神 謙讓 五尺一寸五分

化粧水、レイト 齒磨、菊世界

優は萬延元年二月二十七日京都宮川町新道に生れ五歳にして尾上多見藏の弟子となり尾上當次郎と名乗りにて伏見及び大西の芝居に藝道の趣を窺ひ十二歳の時名古屋に來り中山喜樂の世話となり名を中山鶴五郎と改む。此の時優は小供芝居を組織しその座頭となる。十六歳の折一座を引連れ上京して春木座に乘込み伊達の大木戸、吃又、法界坊を演じて大評判を博し、二の替り三の替り迄で出したれど故ありて一旦歸國し明治十三年即ち二十一歳の時再び上京し猿若座にて七代目八百藏を襲ぎ改めて團洲の門に入り、剛健の藝風と特有の口跡とに因りて團洲の史劇を助け久しく其の股肱たり。優が何等門閥なくして今日歌舞伎劇壇の棟領と仰がるゝに到りしは有ゆる難行苦行の結果にて若手俳優等の夢にたも知らざる所、寔に斯道の龜鑑也。妻をみつ子(五年生)と呼ぶ。

石鹸、玉石 洗濯粉、オノール 住宅 東京市赤坂區新町三丁目九番地 電話新機(三千六百二十六番)

尾上松助 目代四 (第四級等札鑑)



尾上松助

歌舞伎座出動本名 栗原梅五郎

屋敷 音羽屋 俳名 梅賀

小説其他 院本 新小説 都報、時 天ぶら 日本酒少量 福壽草

愛用化粧品 白粉、みその 香水、同

娯楽 讀書 總て茶がまつた 植木 なし 質朴 丈質 五尺二寸

化粧水、レイト 齒磨、黃髮

ま

部

役によりて日本一の稱ある優は天保十四年二月二十九日を以て大阪に生る。幼少父に伴はれて上京し團十郎(當時權之助)の門に入り芝河原崎座に出勤せしは七歳の時なり。父の名をかんと呼び衣裳屋なりしとかり、されば人々優を小かん子々々と呼ぶ。後幾もなく市村家橘(後に菊五郎)の門弟となり坂東橘五郎と名乗て前途に多大の望みを囑せられたり。二十六歳即ち慶應四年八月師家橘五代目菊五郎と相續せしは尾上梅五郎と改名しその特有の妙技を以て師を輔け夙に名優の評高く遂に五代目の目録に松助の名を許されたり。元より松助の名尾上由緒ある名跡にて容易に與ふべからざるもの。おゑい(嘉永六年生)は四十一年六月優が歌舞伎一座と大阪角座に乘込みと際同行せしがす所となりて黄泉の人となれり。

石鹸、色々 洗濯粉、不用 住宅 東京市京橋區築地三丁目二番地

丈助之源村澤 目代三
(等四級等札鑑)



澤村清三郎

宮川座出動 本名 澤村清三郎
屋 號 俳 名 香
紀の國屋 秋 香

- 趣味 (小説其他) 院本 藪報 都 洋食、天ぷら
 (新新聞誌) 草物 救島
 (飲食) 煙草
 (愛用品) 化粧用品 白粉、みその香水、マジック
 (愛用品) 化粧用品 齒磨、歯粉、香水、マジック

け、ノ、部

丈郎五又村中
(等五級等札鑑)



中村庄次郎

明治座出動 本名 中村庄次郎
屋 號 俳 名 紫 琴
播磨屋
『はひ歩くまでの業なり蝸牛』
名 腹 披 露 目 味 句

- 趣味 (小説其他) なんでも 演劇、歌舞伎
 (新新聞誌) 各新聞 天、洋食、鳥 葡萄酒、サイダー
 (飲食) 煙草
 (愛用品) 化粧用品 白粉、みその香水、舶來品
 (愛用品) 化粧用品 齒磨、歯粉、香水、マジック

ま、ノ、部

持て生れし器用にて時代生世話何んでもかんで、麗麻張やツて退け、夙に腕達者の評判高き優は明治八年一月元旦を以て大阪に生れ、父を中村紫琴、母を阪地の立女形として久しく梨園に花を咲かせた。その名人なり。優はその一粒種梅檀は二葉より六歳の春初めて道頓堀朝日座に寺子屋の小太その非凡の技に人々を驚かせたり。爾來いよ天才を發揮し大阪子役中優の右に出づるものな未だ十にも満たぬ小冠者が既に名題役者並の給金を給されしと云へば、如何に人氣の絶大なりしかを思ふべし。十四歳にして上京し阪地の好劇家を失望せしめたるが以來小供芝居の座頭として小傳次吉右衛門に劣らざるの人氣を集中し、三十九年歌舞伎座に於て名題披露をなせり。

▲石鏡、玉石鏡 住宅 東京市日本橋區濱町三丁目一番地 電話浪花 (一千百三十四番)

優は宮川座の花である、又事實上の主である。何時も観客の視線の中心となつて居る。實際宮川座から源之助を取除ければ、恐らくその観客の半を失ふであらう。優の最も長する所は女形で特に出刃丁に秀で、當代無類なるは記者が今更事々しく云ふ迄でもない。しかし優は近來色々ものに手を出す様である。立役として無類の妙味がある。是も一ツは清楚な風彩と、綺麗な面貌と巧妙な技藝と、此の三ツのものが、相俟つて然るのであらう、安政六年三月十四日生であるが、若くは云はれぬが人氣は當座否東京を通じて、此年齢で此だけの優はない。一體大阪の生れで幼少の頃その伯父さんと共に上京し二代目源之助に養はれ、最初清十郎と名乗つて居たが新富座で名題になると同時に改めたのである。妻を高子(慶應二年生)と云ひ、二十九年中夫婦になつて仲に幸次(三十五年生)と云ふ位がある。

▲石鏡、レバー 住宅 東京市下谷區龍泉寺町百二十番地

中村兒太郎



中村兒太郎

歌舞伎座出動本名 山本慶次
屋 號 成駒屋

- 趣 味 (小説其他) 大江連山人 時事の少年 千供新聞 洋食 サイダ
- 愛用化粧品 (化粧用品) ▲白粉、みその香水、舶來品 ▲化粧水、磨、特製梅の香
- 樂 類 (衣服) 縮緬 澤山ある (玩物) 金神 四尺寸 (拜賀) 草 丈 四尺寸

部

有繫今をさきめく成駒屋芝翫丈の秘藏息子才あつてその人品と云ひ縹緞といひ將又藝の質と云ひ一點の申分なし。舞臺一舉一動、一言一句、苟も荷旦にせず。観客に思はずホロリとさせるなど、此兒ならでは出来兼ねる藝、新派の高田實の倅亘と共に神童と褒らるゝも理りなり。それに大概のものならんには日常世辭愛嬌に取巻かれ居ることゝて我意強く雇人等を泣かせる事間々あるべきに兒太郎丈に至りては決してさる事なく、天賦の氣品と莊重なる態度、確かに後年大立物となりて人の頭に立つの特長を今より示すぞ床しき。藝名の兒太郎は父芝翫の幼名にて本名の慶次は明治三十三年五月 東宮殿下御慶事の當日 出生せしを以て爾かく名づけしものなりと。

住宅 東京市京橋區築地三丁目十五番地 電話新機 (一千二百九十四番)

尾上芙蓉



尾上芙蓉

- 趣 味 (小説其他) 何に限らず 演藝もの全部 國、報、都、洋食、天ぷら サイダ 飲まず
- 愛用化粧品 (化粧用品) ▲白粉、みその香水、オペラ ▲化粧水、磨、菊世界
- 樂 類 (衣服) 無邪氣な事 和服地味 小鳥、おもちゃ (玩物) なし (拜賀) 無邪氣 五尺寸

優や容貌花の如く、音聲麗としてよく透徹し、藝風また巧妙を極む。蓋し當今若手女旦中恐らく優の右に出づるものなけん。これ決して溢美の言ならず、一度優の舞臺を見たるものと輿論なり。優が全くの素人より出で、今日天下に通用する立旦となりしは固よりその非凡なる伎倆によるを、雖も兩親の後援亦た與りて力ありしと思はる。優は明治十五年十一月の出生にて、父は岡田常三郎とて一時出版界に盛名ありし人、優は其長男に生る。幼にして義太夫に通達せり。これ應て俳優たるの動機にて十二歳の時五代目菊五郎の門に入り尾上梅次郎と名乗り春木座にて釋迦八相記に童子を勤めしが初舞臺なり。其後小供芝居に出勤し三十八年三月歌舞伎座に於て八代目芙蓉の名を襲ひ盛んなる名題披露目をなせり。(因に名題適任状を得たるは優を以て濫臨とす)

住宅 東京市神田區桑所町一番地

ふ

歌舞伎座出動本名 岡田幸次郎

市村座出動本名 音羽屋 俳 名 鷺 友
「大庭の隅に芽生への芙蓉かな」
名 匪 披 露 目 味 句

市川高麗屋 丈藏麗高川市 目代八 (等二級等札鑑)



市川高麗屋

東京俳優組合評議員 藤間金太郎 本名 高麗屋 俳名 錦升又は紫香

趣味 (小説其他) 何と限らず (大抵見る) 同 (何でも) 何んでも (草物) 葡萄酒少許 (マイアナ)

愛用 (化粧品) 白粉、御園 (香水、オペラ) 齒磨、御園四季の花 (化粧水、オパール)

部

住宅 東京市日本橋區濱町三丁目十一番地 (電話浪花 五百四十一番)

團菊左後歌舞伎劇壇の振はす徒らに新派俳優の爲に其虚を乗せられんとするの時、優の如き一代の英才が頭角を露し來りてよく衰勢を挽回し得たるは最も喜ぶべきなり。優は團圓門稀に見るの才物誠を得易からざるの材なり、然るに世の評家なるもの間々優を墮すの傾向あるを見る、其真意那邊にあるや知るべからずと雖も果して吾人の秘かに思ふが如くんばア一笑ふ可き哉。

市川團次 丈次團小川市 目代五 (等四級等札鑑)



市川團次

東京俳優組合評議員 須原清助 本名 高島屋 俳名 米升

趣味 (小説其他) 院本 (文藝、新聞) 俳、朝日、時 (津食) 豊川稻荷 (湯茶) 急性 (ナイル) 五尺二寸

愛用 (化粧品) 白粉、みその (香水、オペラ) 齒磨、オパール

部

住宅 東京市日本橋區元大阪町五番地 (電話浪花 二千二百四十九番)

優は嘉永三年八月日本橋元大阪町に生る。彼の名人小團次は優の實父なり。先代が如何に吾劇界にその赫灼たる光彩を放ちしかは好劇家の既知する所なるが慶應二年五月八日即ち優の十七歳の折殺せり此時迄優は俳優たるの意志なく、幼少より花柳壽輔に就き懸命に學びたりし振り事も、其實俳優たらんとしての素養にはなく、振付師たらんとてなりき。併しながら父歿後は將來其家名を襲がざるべからざるに至り、翌年即ち十八歳にして子團次と名乗り初めて市村座に出勤し箱王丸を勤めたり。以來故人黙阿彌の薫陶を受け明治六年新富座に於て五代目小團次を相續せり常に義兄左團次を輔け永年明治座の重鎮否東京劇壇の先輩として推賞せらる。左團次歿後は甥左團次の後見として専ら力を盡しつゝあり。妻女の豊(安政元年生)は元芳町隨一の名妓、二人の仲に一子鯉丸あり。

市川座 出動 本名 中八幡千代松

深川座 出動 本名 青木八重太郎

屋敷 俳名 桃 升

「おそろく 芽の輪を潜かふ夕金難」
名題披露目味句

市川高麗三郎

(等五級等札鑑)



市川高麗三郎

趣味 (小説其他)

何と限らず
薔薇、歌舞伎
都、洋食
茶、日本酒
敷島

(愛用品)

白粉、みその
香水、同香精

娯楽 (旅行)

お召
植木
不動
温順
五尺二寸八分

(化粧用品)

歯水、オベラ
歯磨、オベラ

優の風采を仔細に究むれば宛然羽左衛門に髣髴たるものがある。黒眼勝バツチリとした所、鼻筋の透ッて居る所、口許に締りの有る所、耳の大きな處、頬の瘦けし所、度胸のある所? 何れもよく似通ッて居る。これを推して考へると優の前途多々益々有望と云はざるを得ない。處で優は未來劇壇の頭領と擬せらるゝ市川高麗三郎の高弟で幼名を桃吉と云つた。生れは明治十八年八月十五日、父は元徳島藩士(江戸詰)の甲冑師で保譽と呼び優はその長男である。十二歳の時歌舞伎座慈善興行の二人景清に三保の谷伴時松を勤めたのが初舞臺でその後猿之助の依頼により新富座で初めて開演せし小供芝居團子一座に加入し桃吉の名漸く人の知る所となり、同一座の解散後は歌舞伎座は勿論東京市村座また深川座に出動す。四十年六月歌舞伎座に於て高麗三郎と改め名題に昇進した。

▲石鹸、ホルマリン
▲洗粉、オノール

住宅 東京深川區宮岡門前仲町四十四番地
電話浪花(四千三百七十八番)深川座

中村駒助 目代二

(等五級等札鑑)



中村駒助

歌舞伎座 出動 本名 青木八重太郎
市村座 出動 本名 青木八重太郎
屋敷 俳名 斗 玉
成駒屋

「やうくと敷に入りたり草の花」
名題披露目味句

趣味 (小説其他)

紅葉派
文藝、薔薇
都、洋食
葡萄酒
オリメント

(愛用品)

白粉、みその
香水、赤箱

娯楽 (釣)

お召
犬
金光、不動
謙讓
五尺三寸

(化粧用品)

歯水、オベラ
歯磨、オベラ

部

實力程確かなるものなし。優が門閥なくして今日の地位を得るは實力の然らしむる事を俟ず、明治十九年六月中村駒助(元祐八)の子と生れ七歳にして靉兵衛と名乗り吾妻座(今宮戸座)の傳五郎、福四一座が縮屋新助を演せし時子役に出でしが初舞臺にて翌年靉兵衛改め玩後に假名にておもちやと改む)となり十二歳の時淺草座の小供芝居に出動し「妹脊山婦女庭訓」に入鹿を勤め連れ出藍の譽れあり其後嶺然頭角を露し小傳次吉右衛門に劣らずその妙伎愈々出でゝ其名いよく上り荷くも劇を談するものにして、おもちやの名を知らざるものなきに至れり、三十四年四月師福助五世芝翫を相繼せし折優はおもちや改め駒助となり、三十七年二月五日父駒助を失ひ、三十九年東京座にて名題披露目をなせり、其長所は老役、敵役ならんも、凡そ何を演じても會て不評を招きし事なし、思案子が當座(市村座)一流と評せしも理りなり。

▲石鹸、ホルマリン
▲洗粉、たつた

住宅 東京市京橋區木挽町一丁目十一番地

優 俳 伎 舞 歌

七代目 尾上榮三郎
(等五級等札鑑)



尾上榮三郎

歌舞伎座 出動 本名 寺島英造
市村座 屋 號 俳名 梅朝
音羽屋 植付てもらひしまゝや菊若葉
榮三郎假名味付

趣 味 (小説其他) 何でも
(小説其他) 演藝ものに「山岳」
(小説其他) 都、報、時、天ぶ
(小説其他) 洋食、鳥、天ぶ
(小説其他) サイダー、
(小説其他) エジプト
(小説其他) 草物、聞誌、大島袖、
(小説其他) 舞臺模型、
(小説其他) 大神宮、
(小説其他) 舞臺、
(小説其他) 五尺四寸

(愛用品) 化粧用品
▲▲白粉、みその
▲▲香水、赤箱
▲▲化粧水、レント
▲▲齒磨、らいおん

えの部

▲▲石鹼、玉石鹼
▲▲洗粉、三越
住宅 東京市日本橋區濱町一丁目三番地
電話浪花(一千六百四十七番)

兎角坊ちやん仕立のものは親父の餘威を頭に戴き、
ヤ、もすれば我儘勝手を働く井の蛙多き中に、優の如
きは誠に感ずべきものなり。兎に角梨園隨一の名家に
生れながら早くも世の人情を察してか決して高ぶらず
至極温厚の交際振りは恰例ならでは出来ぬ。斯くて
こそ其家柄と共に萬衆の徳望を集むる所以なれ。明治
十九年十月十二日五代目菊五郎の三男と生れ、初め俳
優たるの意志なく工藝家たらんとせしも十三歳の時明
治座にて父の千本櫻の忠信に狐を勤めしが動機となり
英造と名乗り各座に出動中十八歳にして父菊五郎歿せ
しかば同年兄等と同時に優は七代目榮三郎を襲名して
名題に昇進せり。優の義氣に富は人既に知る處なるが
先年東京座にて芝翫、高麗藏等悉く歌舞伎座に買収せ
られ爲めに東京座甚だ振はざるに同情し獨り止り懸命
に働きしが如き優の義氣躍如たり。因に優の山岳趣味
火事趣味は有名なるものなり。

鑑 明 優 俳

二代目 市川小文次
(等五級等札鑑)



市川小文次

明治座出動 本名 谷内柳吉
屋 號 高島屋
「目に付きて嬉しき花見小袖哉」 小圓次
有難や花の蕊の敷に入る
名題披露目味付

趣 味 (小説其他) 紅葉、
(小説其他) 色々、
(小説其他) 都、時事、
(小説其他) 淡白質、
(小説其他) ビール、
(小説其他) 敷島
(小説其他) 草物、聞誌、地味なもの、
(小説其他) 柏來繪葉書、
(小説其他) 大神宮、
(小説其他) 孝順、
(小説其他) 五尺一寸二分

(愛用品) 化粧用品
▲▲白粉、みその
▲▲香水、オペラ
▲▲化粧水、ローヤル
▲▲齒磨、象印

この部

▲▲石鹼、敷島
▲▲洗粉、名題
住宅 東京市日本橋區上板町七番地

優は明治十八年五月二十三日下谷二長町に生る。父
は谷内與吉と呼び母は嘗て女優たりし人、七歳の時九
女入の門に入り桃丸と名乗り吾妻座に於て九女入の山
姥に金太郎を勤めしが初舞臺なり。十三歳にして改め
て小圓次の門弟となり小若と改名し淺草座新富座等の
小供芝居に加入し最初小野道風の妻、毒茶の丹助の嘉
兵衛等に扮して評判よく、尙も種々大役を勤たりしが、
三十三年小傳次死後は主に明治座に出動し名優の間に
採れ兼ねて深川座へ掛持ち、こゝを練習場と定め専ら
技藝の上達を心掛し功顯はれ無類の腕達者となり人氣
もメツキリ増し何處へ出しても耻かじからぬ腕前とな
りければ組合より名題適任の許しを得て四十一年四月
明治座に於て師小圓次の口上にて二代目小文次を襲名
し華々しくその披露目をなし、直ちに東北地方を師小
圓次、蓮女、團吉等と共に汎く巡業なし昨年十一月目
出度歸京し今や益技藝の勉強に餘念なし。

え
ノ
部

明治屋出動本名 近藤寅之助

屋 號
高島屋

市川登瀛女丈



市川登瀛

趣味

- 小説其他 (小説其他)
- 新誌 (新誌)
- 飲食 (飲食)
- 煙草 (煙草)
- 幼年畫報 (幼年畫報)
- 海老フライ (海老フライ)
- ビフテキ (ビフテキ)
- 日本酒大好 (日本酒大好)
- 奇術、活動寫真 (奇術、活動寫真)
- 定めなし (定めなし)
- 人形 (人形)
- 天神 (天神)
- 元氣好し (元氣好し)
- 三尺寸分 (三尺寸分)
- 樂 (樂)
- 衣類 (衣類)
- 愛玩 (愛玩)
- 崇拜 (崇拜)
- 質丈 (質丈)
- 齒粧水、不用 (齒粧水、不用)
- 磨、オペラ (磨、オペラ)

▲▲化粧用品
▲▲香水、オペラ

▲▲石鹸、玉石
▲▲洗粉、三越

住宅 東京市淺草區八幡町十九番地

え
ノ
部

實川延太郎 二代目

(等五級等札鑑)



實川延太郎

「苗代や實りを願ふ日のめくみ」
名題披露目味句

本名 井上 正
屋 號 俳 賞 正
井筒屋

- 小説其他 (小説其他)
- 新誌 (新誌)
- 飲食 (飲食)
- 煙草 (煙草)
- 何と限らず (何と限らず)
- 文藝、畫報 (文藝、畫報)
- 都、大阪毎日 (都、大阪毎日)
- 精進料理 (精進料理)
- 飲まず (飲まず)
- 茶 (茶)
- 藝大 (藝大)
- 大島細 (大島細)
- 油繪 (油繪)
- 妙見 (妙見)
- 短氣 (短氣)
- 五尺一寸五分 (五尺一寸五分)
- 樂 (樂)
- 衣類 (衣類)
- 愛玩 (愛玩)
- 崇拜 (崇拜)
- 質丈 (質丈)
- 齒粧水、不用 (齒粧水、不用)
- 磨、オペラ (磨、オペラ)

▲▲化粧用品
▲▲香水、オペラ

▲▲石鹸、競馬
▲▲洗粉、三越

住宅 東京市淺草區千代田二丁目二番地
電話 下巻 一七九七番

わんごまめちゃんは明治三十五年正月十七日の生
れで市川登瀛さんの一人息子、三ツの時に初舞臺を勤
め昨年(四十一年)春明治座で桃山譚に藤吉の悴捨松を
勤めて好評でした。誠に元氣のよい質で、それはく
随分悪戯であります。一番好きなのは活動寫真で
一晩も缺さない。それに面白いのは日本酒が非常に好
きて二合位はペロリと飲んで終のです。ですから着な
ごも大人の好むものを喜んで食べるそうで、一盃機嫌
で浅くともや一本鎗を喰る時は傍人皆な腹を抱へると
同時にその甘いには驚かされるこの事です。一徹藝
事は大變好きな方で中でも踊が上手でお師匠さん(材
木町藤間龜壽さん)の家へは如何なる雨の日でも風の
朝でも通はない事はなくお父さんに催促されて溢々行
くような事は更に有りません。

優は四代目實川延三郎の實子で今の延三郎はその義
兄なのである。明治二十一年二月十一日を以て大阪に
生れたのであるが、一番奮發して東京へ實川畑を作らん
ものと出京して、實川延子と名乗り東京座へ出勤した
のが初舞臺でかれは十三歳の時である、三十九年五月
即ち十九歳の時同座にて延子改め二代目延太郎となつ
て芝居の口上で名題に昇進し、一先づ歸阪してその
披露に及んだ。然るに其後一時新派に入り本名井上正
を以て秋月と共に四十一年五月東京座へ乗込んだが一
回限りで脱け、以來宮戸座、國華座並びに明治座へ出
勤したが殊に國華座ではその立旦となつて一生懸命に
舞臺を勉めたので、同座の人氣の中心點となり技藝も
著しく進境を認められ各新聞紙などの評も至つてよ
くその評も概ね次の様なものである。「顔は宜し、年は
若し、藝も誠に肉のある道方で結構、此分で進んだな
ら確的遠からず東都名優の内に數へるべき者なり。」

市川猿之助

(等二級等札鑑)



市川猿之助

東京俳優組合評議員 本名 喜熨斗龜次郎

屋 號 澤海屋 俳 名 笑 樂

- 趣 味 (小説其他) 自然主義 讀ます 時、國、都、報
- (飲食新雜) 煙草 煮酒、淡白なも
- (愛用品) 化粧用品 白粉、みその 香水、ムスク松澤
- (衣服愛崇) 衣服 旅行 總て地味なもの
- (樂類玩拜) 樂類 時計 成田不動
- (質) 丈質 元祿 五尺三寸
- (化粧用品) 化粧水、みその四季の花 齒磨、ライオン
- (洗粉、競馬) 石鹼、競馬 洗粉、メリー

え の 部

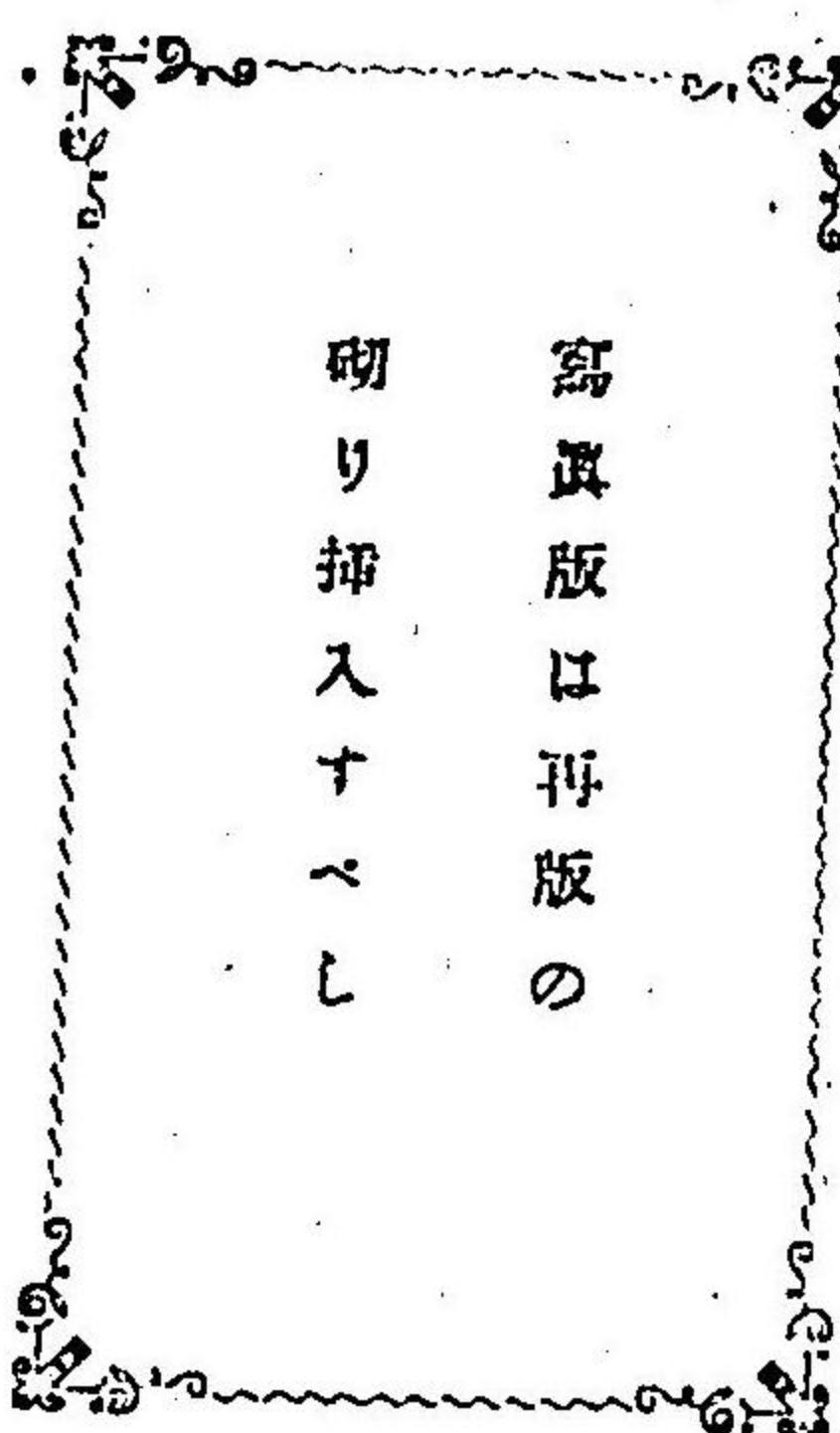
何を演ても上手いのは猿之助であるとは夙に道樂世界の劇評家が言はるゝ所であるが全く其老練なる妙伎には敬服の外はないので、然るに其伎倆程人氣のないのは如何な譯でがなうらう。要するに優は俳優以外の藝術家のような性格を持つて居られるのではあるまいか、オ、然り々々その日常を仔細に研究したらんには正に藝術家と云ふのであらうよ。得意の所作事(のみではないが)の妙はその伎神に入ると云うても敢て溢美ではあるまい。

優は相中上分坂東三太郎と云つた立師の男で安政二年二月二十一日の生れ、長松と名乗つて出たのが五ツの年、一體最初は音羽屋の弟子であつたが中途で團洲に所望されその門弟となつたのだ。曾つて團洲の勘氣を蒙り一時松尾猿之助と云ふたが後歸參適ひて市川の姓を免されたのである。妻君はお琴と呼、中々のエラ者で小供は團子を初め芝海老蝙蝠など末頼しい者斗り。

住宅 東京市淺草區千束町二丁目二百五十五番地 電話下谷(一千八百六十番)

市川丞之助

(等五級等札鑑)



「人真似の手振りばかりや壬生駒」 名題披露目録句

本名 青木茂三郎

屋 號 瓢屋 俳 名 樂 昇

- 趣 味 (小説其他) 講談もの 文藝俱樂部 都 野菜、烏、そば
- (飲食新雜) 煙草 葡萄酒 キライ
- (愛用品) 化粧用品 白粉、百美人 香水、ムスク
- (衣服愛崇) 衣服 女 縮類 小島 觀世音
- (樂類玩拜) 樂類 邪味なし 五尺三寸八分
- (化粧用品) 化粧水、四季の花 齒磨、象印

立役、女形何れにても、明治三十五年正月十七日生なり特に生世話ものに、入息子、三ツの時に初舞台を推すべし?生れは明治八年九月二十八日、作樂を坂東彦十郎の門下、後藤屋、式に初舞台を勤めたり。其後十二歳にして牛込赤城下の千代盛座の子供芝居の座頭となり三ヶ年間打續け十五歳の春地方各地を巡業し十八歳の時歸京し柳盛座に出勤し故人又三郎と共に界限の人氣を一身に負ひこゝにて充分腕を研き早くも三星箱經しが某有力家に引立られ新富座芝居(先)團藏一座に出勤する事となり鶴三郎と改めまた市村座へも出勤せり同年四月歌舞伎座にて團洲助六を演せし時猿藏の門弟となり猿之丞と改名し三十三年四月東京座にて名題に昇進す三十四年の頃北海道又轉じて京阪の四方に巡演し三十七年より宮戸座へ出勤せり。妻女を琴子(十七年生)と呼び去る三十五年中結婚せしもの、間に壽輔(三十八年生)と云ふ男子あり。

住宅 東京市神田區元柳町四十四番地

えの部

明治座出動本名 近藤芳松

高島屋

「一葉だもまだ整はず高かつら」
右は昨年優が秋田にて興行の際同地新聞記者露葉子に政岡おそのと藝を辱られて逆席に味まれたのだそう

市川蓮女 (等五級等札鑑)



市川蓮女

- 味 趣 (小説其他) 院本 寄席
 (雑誌) 新聞、新小説 何に依らず立錫
 (飲食) 都、報知 昔の錦給
 (飲煙) めん類、淡白なもの 金光
 (草物) ビール、日本酒 さつぱり
 (愛用品) 香水、みその 五尺五分
 (化粧用品) 白粉、色々
 歯、磨、マダネシヤ

優は明治元年三月五日伊勢松坂に生る。五歳の時名古屋橋座にて尾上多見藏一座の片岡我童(後に先代仁左衛門)の弟子となり片岡我久松と名乗り齋藤實盛の手塚の太郎吉を勤めしが初舞臺なり。其後澤村田之助來名の折その門に入り澤村小田六と改め明治二十二年始めて上京し田之助の姉てう子の養子となり歌舞伎座に於て第五郎の口上にて更に田之助の俳名曙山と改め各座に出動中故ありて二十六年中明治座舞臺開きの際先代左團次の門弟となり市川蓮女と改名せり。當時左團次の俳名蓮升と改む可かりしも優は女形専門なれば升に代ふるに女を以てせしなりと云ふ。女形としての伎倆は世人既に認むれば事々しく茲に言はざれども其の日常生活の如きも常に自己の女形たる事を忘れず太夫の氣品を常に存するが如きは特筆すべき事にこそ。元來器用なる質なれば茶の湯生花は言すもあれ裁縫なども黒人跳足の御手際なり。

住宅 東京市淺草區八幡町十九番地

市川猿十郎 (等五級等札鑑)



市川猿十郎

- 味 趣 (小説其他) 歴史もの
 (雑誌) 都々 刺身、手料理
 (飲食) 日本酒 和洋いろく
 (飲煙) 和洋いろく
 (草物) 和洋いろく
 (愛用品) 白粉、みその 香水、オペラ
 (化粧用品) 歯、磨、はこべ鹽

歌舞伎座出動本名 井澤兼吉
成若屋 俳名 連升

歌舞伎座の立師として重寶がらるる優は文久二年九月十五日生れの生粹の江戸兒で父は加賀藩の直吉と云ったが元を探ると甲州井澤(舊伊佐和と書く)で由ある人の流れである事は其定紋の竹田菱また井澤と云ふ姓など仔細に調べても争はれない事實である。幼少の頃父と共に加賀侯に附隨して金澤へ行つた處が當時同地に居た關三十郎(當時八百歳と云ひ加賀藩の最負役者)の勤めに因り同人の世話になり關三子と名乗つて十一歳の時初舞臺を勤め十九歳の時三子改め孫六となりすでに立派な立師となる。後關十郎が守田座にて薄雪の團九郎を勤めし際立廻りの形を依頼れた以來は譯もななく團門の人となつて終つた其後團兵衛と改名し更に三十九年二代目猿十郎を襲ぎ名題に昇進したのである。一體器用で頗る温順な質であるから團洲の寵愛殊に深くまた總掛り(立廻)などは、優の考へたものだ。妻はきよといひ、はると云ふ娘もある。

住宅 東京市京橋區大銀町二番地

えの部

住宅 東京市京橋區大銀町二番地

え
ノ
部

明治座出勤本名 鈴木鐵彌

高島屋
『人の氣のあつまる空やあげ花火』
名題披露目録句

市川若



市川若

趣味
小説其他
紅葉
文藝、露報
時事、都
うなぎ、天ぷら
葡萄酒
禁煙

愛用化粧品
白粉、みその香水、オベラ

愛用化粧品
歯磨、鹿

趣味
小説其他
紅葉
文藝、露報
時事、都
うなぎ、天ぷら
葡萄酒
禁煙

愛用化粧品
白粉、みその香水、オベラ

愛用化粧品
歯磨、鹿

趣味
小説其他
紅葉
文藝、露報
時事、都
うなぎ、天ぷら
葡萄酒
禁煙

愛用化粧品
白粉、みその香水、オベラ

愛用化粧品
歯磨、鹿

徐かに母の體內を潜り出で愛らしき瓜々の聲を揚
げたりしは明治十九年九月二十三日、所は日本橋區久
松町明治座々付茶屋猿屋方なり、其十歳の折先代左團
次の門に入り左喜松と稱し、會津合戦の狂言に學校通
ひの小供に扮せしが初舞臺なり。有繁樹下に生れし丈
けに藝道の素性殊に宜しく、新富座小供芝居時代より
女形専門として舞臺にときならぬ花を咲かせつ。早
くも一ト昔を過せし三十七年八月、あはれ、師左團次
は遂に長へに歸らぬ旅に赴けりとぞ云ふなる。され
ば其の追善を乞、明治座に於て三十九年約二十名の名
題俳優打集ひし大一座にて一番目『酒井の太鼓』の烏
居妹梅ヶ枝又た中幕『布引』の葵御前の二役を勤め師
の追善を兼て左喜松改め若若となり名題の披露目をな
したり。爾來其進境宛然竹の伸びるが如く、高島屋門
下の異彩として夙に具眼者をして舌を巻かしめつゝあ
り。

中村明石



中村明石

明治座出勤本名 藝名に同じ
屋號 俳名
舞鶴屋 鶴童
『若もちの拍手に舞ひて候申の年』
大概如電扇の味句

趣味
小説其他
何と限らず
文藝
二六
淡白なもの
サイダ、茶
巻煙草

愛用化粧品
白粉、みその香水、不用

愛用化粧品
歯磨、象印

趣味
小説其他
何と限らず
文藝
二六
淡白なもの
サイダ、茶
巻煙草

中村勘三郎といへば吾國梨園の鼻祖としてその名況
く人に知られたる斯界唯一の舊家なり。而して連綿と
して今日に及びしは誠に喜ぶべき事なるが優の代に至
り、甚だ振はず亦た遺憾ならずや。優は明治六年四月
九日の出生にて、十三代目勘三郎の實子なり。中村明
石はその本名にて十二歳の時初舞臺を勤む。元來器用
なる人にて、且つ頗る凝性なれば、一度或物に凝れば
飽迄で其奥を究めざれば已ざるの熱心は頼もしけれど
それが爲め先年忽焉として其姿を没せしが如きは一大
失態と言はざるを得ず。併しながら今や大いに覺る所
あり今度はその天職の劇に凝り初められたれば今後先祖の
名を汚す様の事は、萬々なかるべし。四十年三月名題
に昇進せし以來、演伎座に出勤なしつつあり。天性繪
畫を好み名題披露の配り扇の如きは優が一々ものした
るものなりと。姿を没せし原因もこれ。性淡泊に
して些の邪味なし。

あ
ノ
部

趣味
小説其他
何と限らず
文藝
二六
淡白なもの
サイダ、茶
巻煙草

愛用化粧品
白粉、みその香水、不用

愛用化粧品
歯磨、象印

趣味
小説其他
何と限らず
文藝
二六
淡白なもの
サイダ、茶
巻煙草

愛用化粧品
白粉、みその香水、不用

愛用化粧品
歯磨、象印

趣味
小説其他
何と限らず
文藝
二六
淡白なもの
サイダ、茶
巻煙草

愛用化粧品
白粉、みその香水、不用

愛用化粧品
歯磨、象印

石鹸、花王
洗粉、立田

住宅
東京市淺草區藤下町八番地

部

東京俳優組合評議員 高橋榮次郎

「節も未だきさらぬものよ今年竹」

襲名詠句

市川左團次 (五代目)



趣味 (小説其他) 何と限らず 大抵見る 切抜通信 牛肉、しるこ お茶 エジプト

愛用品 (化粧品) 白粉、みその 香水、舶来もの

優は明治十四年の出生にて一代の名優先代左團次の長男なり。五歳にしてはたんと呼び新富座に於て團次郎の助六に金棒引を勤めしが初舞臺なり。後ぼたん改め小米となり更に二十一歳の時父の俳名進升を嗣ぎ名題披露をなし三十七年八月七日父を亡ししかば伯父荒次郎小團次等と懇命に其後を引受け幸ひ満都の同情を得、三十九年父の追善興行を行ひ丸橋忠彌を演じ五代目を相続せり。品行方正にして風雅を愛し、又文學を好む。是を以て諸文士の交りをつむぐもの多く、大いに見る處あり三十九年十二月を以て歐米劇壇視察の途に上り、四十年八月歸京翌年一月兼ての理想通り大勇猛心を起し萬般の組織を改革して從來の弊害陋習を洗滌せんと大英断を試みたり。其成果は敢て問はず、只その向上的精神に至っては眼前の小利慾に甘じ、若しくは徒に其聲のみ大にして實の上からざる滔々たる儂張の群を抜く事實に數等と云ふべし。

石鹼、玉石鹼 住宅 東京市京橋區新富町三丁目三番地 電話新橋 (四百六十八番)

部

市川左喜之助 (二代目)



明治座出勤本名 松田達三 高島屋 富升 名詠披露目録句

趣味 (小説其他) 何と限らず 文藝、讀報 魚類 日本酒少量 敷島

愛用品 (化粧品) 白粉、みその 香水、金鷄

優は明治十二年九月四日を以て日本橋區小網町萬善善次郎とて彼の金米糖の總本店として知られたる萬善の伴と生れ、六歳の時當時賣出しの市川鬼丸の弟子となり鬼名子と呼び中島座にて初舞臺を勤めたり。一座は故人壽三郎、時藏(今歌六)猿之助、鬼丸等にて二度目は矢張り同座にて故嵐みんじの常盤御前にて乙若を演じ評判よく二十四年即ち十三歳にして更めて先代左團次の門に入り左喜丸と改名し元地の市村座に於て五代目菊五郎の大當狂言筆屋幸兵衛の妹娘おしをも勤め又同年師左團次の「小人國朝夷夢の場」に故人玉三郎と小人國の老夫婦に扮し無類の上出来、後世恐るべしとせられたり。其後新富座の小供芝居に出勤し最も世評高かりしは「白虎隊」にてこれが爲め優は相中上分に進み二十八年十月左喜丸改め左喜之助となり以來明治座へ出勤し今日に及びしもの昨年名題適任状を得本年一月明治座に於てその披露をなせしは讀者の記憶に新たなる處なるべし。

石鹼、ホルマリン 住宅 東京市日本橋區芳川町十番地 電話浪花 (千三百九十一番) 見番取次

關十三郎 目代五
(等五級等札鑑)



關十三郎

本名 關 花助
屋號 尾張屋
歌名 山

趣 味 (小説其他) 何と限らず
演藝書報 時事、都
支那料理 茶
チエリ
草物物聞誌
愛用化粧用品
▲▲白粉、みその香水、金麴
▲▲化粧水、オベラ
▲▲歯磨、オベラ
▲▲洗面、オベラ

部

明治十二年七月二日下谷龍泉寺町で生れ先代三十郎の實子です。五ツの時が初舞臺で何んでも元地には相違ありませんが何座だか不詳です。時事新報の伊坂は兄弟分ですからあの男に聞いて下されば萬事わかります。十一の時先代がなくなりました。昨年(四十年)明治座で蜘蛛の糸を出して名題披露目をしました。一座は訥子さん女寅さん小團次さん荒次郎さんなぞです。一體馬鹿に上手な事と馬鹿に下手の事があります。近頃の大當りは雷六郎でしやう、あの爲めに赤坂(演伎座)へ客がつく様になつたのです。その次が高田の馬場で、得意なものは荒事です。振りには濱町の藤間(勘右衛門でなし)へ通つたんです。妻くんは有りません(かぶ母さんの様なのが一人……ありません)それから代金はいらぬんでしやうな?……とは關三の番頭さんのお話しそのまゝ。

住宅 東京市淺草區旗本町一丁目十七番地(電話下谷)二千四百六番

市川左升 目代二
(等五級等札鑑)



市川左升

趣 味 (小説其他) 紅葉派
演藝書報 時事、都
支那料理 茶
チエリ
草物物聞誌
愛用化粧用品
▲▲白粉、みその香水、オベラ
▲▲化粧水、レント
▲▲歯磨、ライオン
▲▲洗面、オベラ

部

明治座出動本名 由良常太郎
屋號 高島屋
俳名 高島屋 名亭

故團洲翁常に門弟に教へて曰く、人の精粕を嘗むる者は名人と云ふ能はず。凡そ技藝を學ぶ者は自から工夫せよと、亦一見識ありと謂ふべし。然れども現代の俳優は概ね先人の型をのみ追ひて自ら工夫せんとはせず否工夫し能はざるなるべし。優は然らず先人の精粕は絶対に之を斥け、自から工夫を凝らす底の人なり。先年明治座にて「瑞西義民傳」を演じたりし時山番の鈴作に扮しその聲調の抑揚に新機軸を出せしが如き、近くは「ヘニスの商人」にグラシヤノを勤め各新聞紙が筆を揃へて賞揚せしが如き好個の具體的證明ならずや。優は元三州岡崎に生る、十一歳の時當時名古屋に在りし先代左團次の門に入り左喜松と名乗り師と共に上京して由來明治座付となり三十八年二代目左升を襲ぎ名題に昇進せり。性温順にして書を善くし又情歌に巧みなり妻はまつ子(明治十六年生)と呼び娘まつ子は四十年生れなり。

住宅 東京市日本橋區元柳町二十三番地

市川鬼丸 目代四 (等五級等札鑑)



市川鬼丸

宮戸座出勤本名 市川鬼昇

屋 號 高島屋 俳 名 洲

- 味 趣
- (小説) 院本
 - (雑色) 都々木
 - (新編) 油漬もの
 - (飲食) 甘味
 - (飲煙) 飲まふ
 - (草物) 草
 - (愛用化粧品) 白粉、みその香水、スミレ
 - (愛用歯磨) 化粧水、レート、磨、オベラ
 - (衣服) カルタ
 - (愛玩) お召
 - (崇拝) 袋物、昔道具
 - (身質) 親世音、稻荷
 - (丈質) 五尺三寸

部

石鹼、ホルマリン 洗濯粉、立田 住宅 東京市本郷區湯島天神町三丁目十六番地

何を演じてても巧妙なるは優なり。芝居の真髓を味はんとするものは宮戸座へ行けとは夙に具眼者の唱ふる所なるが畢竟優の如き真伎倆を備へし重寶役者が動きつゝある故なるべし。優は嘉永六年三月二十日大阪に生れ、父は三世淺尾工左衛門とて其頃の名人なり。七歳の時大阪若太夫座(今辨天座)にて新海雪に小僧を勤めしが初舞臺にて其後父に伴はれ中國筋より九州へ巡業せしが不幸にも十九歳の時肥前島原に於て父を失ひ二十二歳の時久し振りにて歸阪なし市川右衛門の庇護により市川鬼昇と改め明治十二年初めて上京して父の俳名鬼丸を襲ひ名題に昇進し久松座にて、小栗判官に萬長の娘お駒を演じ、鬼丸の名高く満都に轟きたり。一座は九藏(今の團藏)、我童(先代仁左衛門)尾上多賀之丞等なりし。以來東京俳優となりしものなり妻をエイ子(慶應元年生)と呼び間にじゆん子あり。

中村吉右衛門 代初 (等四級等札鑑)



中村吉右衛門

- 味 趣
- (小説) 涙六、狂言
 - (雑色) 都々木、時
 - (新編) 洋食、道徳
 - (飲食) 葡萄酒
 - (飲煙) 大和
 - (草物) 草
 - (愛用化粧品) 白粉、御園香水、オベラ
 - (愛用歯磨) 化粧水、レート、磨、ダイヤモンド
 - (衣服) 豪華、大号
 - (愛玩) 好みなし
 - (崇拝) 妙法
 - (身質) 着實
 - (丈質) 五尺四寸

部

歌舞伎座幹部准技藝委員本名 波野辰次郎

「我宿の若竹やツとのびにけり」
 「酸漿草邪魔をにじきに植立て」
 名題昇進咏句 楓 童 時 藤 歌 六

優は明治十九年三月二十四日の出生で中村歌六の長子である。初めは役者になるのを嫌ひ切りに醫者になるを父を困らせたとの事であるがその十一の時市村座の團藏一座で越後騒動に仙千代を勤めたのが動機となつて翌年淺草座の小供芝居に出勤し小傳次と共に然群を抜き神童の譽れ高かつた事は世の既に知る所であるが會つて市川團洲が現時少壯俳優に末頼しき輩多き中にも吉右衛門こそ特に勝れたれ。他日劇壇に雄飛するものは必ず彼れならんと曰つた事があつたが其後愈々頭角を露し今は既に青年俳優中一二を争ふに至つたのである。三十八年八月歌舞伎座で出世景清を演じ名題に昇進せし後歌舞伎座幹部准技藝委員に選ばれ今亦菊五郎と共に市村座へ出勤し凡ならざる腕を揮ひ、イヨ十代目と褒られて居るのである。性質は至極穩健着實誠に賞すべきものがある。是れ一ツは優が人氣の大なる原因であらう。

住宅 東京市日本橋區濱町二丁目十七番地 電話浪花(二千七百九十五番)

尾上菊太郎



尾上菊太郎

歌舞伎座出動本姓花柳音羽屋

趣味 (小説其他) 歴史もの 探険世界 都 洋食、しるこ (飲食新誌) サイダー、モンド (煙飲食物) 草物 (愛用品) 白粉、みその 香水、金箱 (化粧用品) 齒磨、オベラ

部

優は明治二十六年十月三日を以て淺草田町に生れたので、父は名に負ふ花柳壽輔翁なのである。今の大立物であつて恐らく壽輔翁の嚴格な薫陶を受けざるはななく受けて而してその妙域に達せざるはない。思へば翁は誠に吾歌舞伎劇壇の大恩人であつた。優は實に此壽輔翁の子で殊にその七十二歳の時の誕生である。然るに父壽輔翁は三十六年一月二十八日に歿した。で一時優は横濱の富貴樓へ預けられたのが縁となつて六代目菊五郎の門弟となつたのである。歌舞伎座で八百蔵の安宅新關に草薙を勤めたのは十二歳の時で是れが初舞臺であつた。處が生憎その年配が俳優としての所謂合の子時代であつた爲これと云ふ目ぼしい役がつかかなかつたが追々年も取り藝も熟して來、殊に幼少の頃から父壽輔や兄徳太郎から仕込まれた踊りは比類稀なる評判で時々先輩の代役をしては無類の上出來、近來メキメキ賣出して來た。

住宅 東京市京橋區元數寄屋町丁目番地 電話新編(四百八十一番)

市川旭梅



市川旭梅

歌舞伎座出動本名堀越富貴子 成田屋

趣味 (小説其他) 何んぞ限らず (小説其他) 刺身、蒲燒 色、新小説 刺身、蒲燒 潮茶 福壽草 (煙飲食物) 草物 (愛用品) 白粉、みその 香水、マジック (化粧用品) 齒磨、みその

歌舞伎座出動本名堀越富貴子 成田屋

娛樂類 (愛用品) 白粉、みその 香水、マジック (化粧用品) 齒磨、みその

優は明治十六年六月十六日の出生にて九代目團十郎の次女なり。此旭梅と云ふ名は五代目團十郎妻の別號(因に姉翠扇の名は二代目團十郎の俳名なり)にて先般姉翠扇と共に明治座へ出動するに付名づけしものなり。初舞臺は六歳の時に新富座に於て三升會の慈善演劇に「藤娘」を踊りたり(姉翠扇は濱の松風を踊る)其後舞臺に現れしは二三にして止まらざれど先般明治座に出勤し、ポーシヤ及び鶯娘を演せしが女優を標榜して出し初舞臺なり。當時劇評は種々様々に褒貶の聲相交はりしが、孰れも優の舞臺度胸絶倫なるを賞揚せぬものはない。兎に角宗家の娘の事なれば藝道は一通り以上の上達故舞臺数を重ねるに随ひ進境見るべきものあらん、遠からず所謂理想的女優を吾劇界に出さんか。踊りは五六歳の頃より藤間勘右衛門を師として叩き上げ搦て加へて父團十郎のお仕込なれば巧拙は云ふ丈野暮なり。

住宅 東京市京橋區築地二丁目廿七番地 電話新編(四百十四番)

部

歌舞伎座幹部准技藝委員 本名 寺島幸三

屋號 俳名 音羽屋 三朝

尾上菊五郎 代六 (等三級等札鑑)



尾上菊五郎

趣 味

- (小説其他) 色々
- (雑誌) 時事、國民、日本
- (新食) 何んでも好き
- (飲食) 葡萄酒
- (飲煙) 大和
- (草物) 大和
- (愛用化粧品) 白粉、御園香水、金鶴
- (娛樂衣類) 洋服、蓄音器、犬
- (玩物) 蓄音器、犬
- (拜玩) 蓄音器、犬
- (質丈) 五尺四寸
- (樂類) 蓄音器、犬
- (愛用化粧品) 化粧水、レイト
- (齒磨) 齒磨、菊世界

本名 吉田房次郎

屋號 俳名 音羽屋 梅美

「人並に出て居ならぶや涼み臺」 名題昇進味句

尾上菊三郎 (等五級等札鑑)



尾上菊三郎

趣 味

- (小説其他) 院本
- (雑誌) 大抵見る
- (新食) 朝日
- (飲食) 肉類、野菜類
- (飲煙) 茶、サイダ
- (草物) 飲まず
- (愛用化粧品) 白粉、みその桶
- (香水) 香水、みその桶
- (娛樂衣類) 旅行、運動
- (玩物) 糸織、結城、洋服
- (拜玩) 書齋、骨董
- (質丈) 天照大神
- (樂類) 天照大神
- (愛用化粧品) 化粧水、四季の花
- (齒磨) 齒磨、オベラ

部

優は五代目菊五郎の實子、明治十八年八月二十六日新富町に産聲を揚げぬ。幼名を丑之助と呼びまだもの心つかざる内より舞臺に出て常に父菊五郎と共に出勤せり。三十六年二月十八日父菊五郎を失ひしより同年歌舞伎座に於て曾我の對面に五郎時致に扮し六代目を相續せり。以來興行毎にその進境著しく宛然父菊五郎の幼時に髣髴たるものありとは有繋に争はれぬものと謂ふべし。性質極めて放膽にして物事に頓着せざる質なれど藝術に對しては用意中々周到、緻密の舉動に注意し、人の想ひ至らざる微妙の點を寫したる故實にも頗る精通し人その強記に感嘆せざるものなし。その得意とする處は亡父の好んで演じたりし生世話ものなるべく、所作事も滅多になき舞手なり。兎に角此分にて益々伎倆を研磨したらんには決して、父菊五郎に勝るとも劣る事あるまじとは一般の定評なり妻を安子と呼ぶ。

▲石鹸、ホルマリン
▲洗粉、オノール
住宅 東京市京橋區西紺屋町二番地
電話新橋(三百五十七番)

優は萬延元年十二月十七日名古屋に生る。十二の年故尾上多見藏の門に入り登美松と名乗り小供芝居に出勤し忠臣蔵に判官、勘平及び七段目の由良之助を演せしが抑にて十六の春當時静岡在江尻に女役者と共に乗込み八百藏(當時中山鶴五郎)一座は男女合同の故を以て許可せられず爲めに優は招かれて其立女形となり甲州路を経て初めて上京し春木座に乘込たり。一座は八百藏訥子(當時中村千之助)等なりしが幸ひ好評にて兩三回興行の上一旦歸國し十二年十一月再び訥子と共に上京し先代團升登美三郎(後に先代壽美藏)と一座せしが後市村座に出勤し五代目の演せし朝鮮騷動に餅屋の娘に扮し菊五郎の知る所となり更めて其門弟となりし以來種々大役も勤め舞臺に花を咲かせしより二十四年市村座に於て小金井小次郎の芝居の時名題披露目をなせり。妻を富美子(明治七年生)と呼び美知子(二十二年生)と云ふ愛女あり。

▲石鹸、ホルマリン
▲洗粉、オノール
住宅 東京市京橋區新富町七丁目四番地

めノ部

趣味

- 小説其他 弦響もの
- 雑誌 文藝、劇報
- 新聞 萬、都
- 魚類 魚類
- 草物 福壽草
- 煙飲 福壽草

市川女寅 二代目



明治座出動本名 荒川清太郎
屋號 瀧野屋
俳名 女寅 假名 味旬

「嬉しさに顔から染める紅葉かな」

愛衣

- キネオラマ
- 高麗格子
- 繪葉書
- 天神さん
- 温順
- 四尺五寸

樂玩

- 子供弟子と散歩
- お召
- 莫入
- 金光教
- 優雅
- 五尺一寸五分

- 化粧水、みその
- 香水、赤箱
- 化粧水、みその四季の花
- 歯磨、オペラ

- 石鹸、玉石
- 洗粉、歌舞伎

住宅 東京市淺草區五町二十八番地

きノ部

趣味

- 小説其他 學校の教科書
- 雑誌 劇報、少年世界
- 新聞 甘酒
- 魚類 甘酒
- 草物 未だ飲みません
- 煙飲 未だ飲みません

市川錦吾



歌舞伎座出動本名 菱野京三郎
屋號 高麗屋

愛衣

- キネオラマ
- 高麗格子
- 繪葉書
- 天神さん
- 温順
- 四尺五寸

樂玩

- 子供弟子と散歩
- お召
- 莫入
- 金光教
- 優雅
- 五尺一寸五分

- 化粧水、レイト
- 歯磨、ダイヤモンド

- 石鹸、スマイル
- 洗粉、クラブ

住宅 東京市芝區烏森町二番地

錦吾さんは明治二十九年五月十日の生れ九ツの時高麗屋高麗藏さんのお弟子になつて、先代左團次さんが亡つた時、師匠の「蒙古」成駒屋さんの「玉菊」に禿を勤めたのが初舞臺、其後彼處此處で色々な役を勤め上出来又上出来、師匠も前途有望だと喜んで居る。此分で勉強したら屹度いゝ役者になるでしようとの評判、踊りは濱町の師匠の處へ通ひ一生懸命で勉強中それにかで姉さんに長唄、清元、義太夫その外なんでもかんでも仕込れて居る。學校は今高等二年生給が一番上手で何日も先生に赤丸をつけられ通し、姉さんは烏森の花近江家種吉と云つて何誰も首肯有名な大姉?

如何なる女性的男子でも、男が女を真似て一舉一動真に迫り些細な點迄でも能く女の情を寫し出すのは難中の難で、況んや藝人には惜き程魁岸の骨相を備へた優に於てをやだ。然るに優の伎の非凡なる、時代、世話の役々の性根を發揮して見物に感動を興へるに至つては當代女形中まづ優が第一である。優は文久二年六月十日出雲國松江在楫屋村に生れ、六ツの時村の俗に云ふ左義長芝居に出動したのが動機となつて遂に地廻り役者坂東歌調の門に入り坂東秀之助と名乗り田舎廻りをして居る中、或最負客の勧めにて明治十二年大阪へ登り市川右團次の門弟となり市川福之丞と改め更に十八年初めて上京し本郷春木座に乘込み「雪の常盤」を演じ團洲の目鏡に叶ひ二十一年元地市村座に於て二代目市川女寅を襲名したのである。妻女はなか（明治八年生）と云つて誠に温順な人、子供は男寅君一人である。

み 部

市歌舞伎座出動本名 守田 壽作

「身に餘る親の光や花衣」
三津五郎殿名味句

七代目 坂東三津五郎



坂東三津五郎

趣 味 (小説其他) 紅葉派、文藝、歌、舞伎、時事、新聞、日本、洋食、天ぷら、クレープ、ムサイダ、草物、物聞、散島

愛用化粧品 (白粉、みその香水、赤箱) 娛樂類 (釣り、お召、寫眞、大神宮、健體) 氣質 (五尺一寸)

優は明治十五年九月二十一日吾劇壇の大恩人たる故守田勘彌氏の長子に生れたのである。八歳の時新富座にて團菊左の大一座の折り「先代萩」の鶴千代君に扮したのが初舞臺で、藝名を八十助と呼んだ。幼少の頃から花柳善輔同じく勝次郎又つた藤間勘右衛門に付き専心勵んだ功露はれて、その手の舞足の踏む處、正に藤間花柳の法則に適ひ通れ名手と稱せらるゝのみならず其伎藝も時に或は幹部以上の力量を示すのである。怨らしくは柄のなき爲め引立たず、チエー天二物を與へずとは此事なるか残念々々。三十年八月二十一日は優の一族ばかりでなく、恐らく芝居道に關係あるもの均しく涙の袖を絞つたとはまた何んであらうか？優の父君即ち十二代目守田勘彌の死である。三十九年に父勘彌の追善興行に「連獅子」の親獅子を勤め七代目坂東三津五郎を相續して名題に昇進し目下市村座で益々伎藝の研鑽に餘念ないのである。

市川芝海老



市川芝海老

歌舞伎座出動本名 喜熨斗 宗治

屋 號 澤 瀉 屋

趣 味 (小説其他) 謎山人、少年、于供新聞、洋食、サイダ、吸ひません、煙草、物聞、草物

愛用化粧品 (白粉、みその香水、ムスク) 娛樂類 (フランコ、洋服、繪本、不動、活潑) 氣質 (四尺二寸五分)

部

芝海老さんは明治三十三年七月四日生れ澤瀉屋猿之助丈の息子さん五歳の時が初舞臺で團十郎さんのお弟子です。芝海老さんも蝙蝠さんと同じで矢張り無暗矢鱈に元氣よく云ツて決して行儀が悪い譯ではない。ツマリ唯元氣が好いと言ふ迄で、勿論やかましいお父さんやお母さんそれからお兄いさんのお仕込みであるから言ふ丈け無駄ですが、今尋常三年生ですが此の筆跡を皆さん宜しくお目を止めて御覽を願たい。活氣があつてそして雅のあること、これがヤツト尋常三年生であるとは受取れません。字はその心を表すと云ふ事があります。頼母しい譯ではありませぬか。猿之助丈は斯んな前途有望の小供を幾人も々々持つて居るのは誠に羨しい次第で、この連中がもう十五年もたつた後は何れ夫れ々々立物になつて舞臺に花を咲かせることではやうが、そなたならばどんなにうれしうでしやう。

石鹼、競馬、洗粉、名馬

住宅 東京市新吉原京街澤瀉屋内 電話下谷(一千八百六十番)

し
ノ
部

- 味 趣
- (小説其他) 弦齋、嗽石、新小、齋報、萬、やまど
 - (雜誌) 新小、齋報、萬、やまど
 - (新聞) 洋食、お茶、福壽草
 - (飲食) 福壽草
 - (煙草) 福壽草
 - (化粧品) 白粉、みその、香水、金鶴
 - (愛用品) 香水、みその、金鶴
- 身 氣 崇 愛 衣 娛
- (樂類) 繪畫、挿花、お召立、お召立、お召立
 - (玩類) 植木、絹刺、大神宮
 - (拜類) 優柔
 - (質類) 四尺八寸一分
 - (化粧水) 四季の花
 - (齒磨) オペラ

河原崎紫扇



河原崎紫扇

明治座出勤本名 河原崎 貞子
屋 號 山崎屋

▲石鹸、ホーサン
▲洗粉、オペラ
住宅 東京市芝區神明町六番地

し
ノ
部

- 味 趣
- (小説其他) 短編もの、新聞、切抜通信、鹽せんべ、サイダ、茶
 - (雜誌) 鹽せんべ、サイダ、茶
 - (新聞) 鹽せんべ、サイダ、茶
 - (飲食) 鹽せんべ、サイダ、茶
 - (煙草) 鹽せんべ、サイダ、茶
 - (化粧品) 白粉、みその、香水、佛蘭西のもの
 - (愛用品) 白粉、みその、香水、佛蘭西のもの
- 身 氣 崇 愛 衣 娛
- (樂類) 挿花、お召、お召、お召
 - (玩類) 絹刺、金光、愉快
 - (拜類) 愉快
 - (質類) 四尺七寸八分
 - (化粧水) レート
 - (齒磨) 鹿印

市川松川



市川松川

明治座出勤本名 高橋 幸子
屋 號 高島屋

▲石鹸、玉石鹼
▲洗粉、オノール
住宅 東京市京橋區新富町二丁目三番地
電話新橋 (四百六十八番)

優は明治二十四年彌生半の誕生、父は音に聞へし先代左團次優は實に、そが一人娘なり。未だ咲出の花ながら名に負ふ名家の令嬢とて凛とせし顔付、人品善じと云て決して氣取屋には非ずその温情や玉の如くその紅顔や花の如く一度微笑する時や丈夫をして心恍たらしむ。幼少の頃より踊りは藤間勘右衛門につき長明は梓屋秀につき琴は坂東あやめにつき義太夫は竹本某につき、その奥を究め、其他茶の湯活花は言はずもかな、禮儀作法に至る迄で何一ツ堪能ならぬものなく、通れ名媛と聞えたり。明治四十一年一月兄左團次の意を領し團十郎姉妹河原崎貞子等と共に女優として立ち明治座へ出勤し「ベニス」の商人にネリヒサーに扮したり。其後主人公ポーシヤを勤め關西地方を汎く巡業に至る處その伎の妙と勇氣を以て観客を感せしめ、半年餘にして芽目度歸京せり。優や新女優の内年配最も若く、發展すべき未來の最も多くを有す。夫れ努力せよや。

部

歌舞伎座 小山元之助
東京俳優養成所講師
本名 小山元之助
成田屋 俳名 猿
『さうことも牡丹と見える芽生かな』
名匠披露目味句

市川新十郎

(等五級等札鑑)



市川新十郎

趣味 (小説其他) 演六、演香、演藝もの色々、都時、毎、淡白質、ビール、サイダ、何とも定めず
愛用品 (化粧品) 白粉、みその桶、香水、みその桶
娯楽 (衣服類) 釣り、極華か極地味、小鳥、草花、不動、稻荷
愛玩 (拜質) 騾、五尺二寸八分
身氣 (丈質) 五尺二寸八分
化粧水、レイト
歯磨、ライオン

彼處からも新十郎此處からも新十郎と宛然引張風の姿となり一寸の暇もないと云ふのも畢竟優が幼少の頃から一日の如く團洲に忠勤して色々な故實に精通して居られるからであるが、またその人となり誠に濃厚篤實で人好きのする質であるからでもあらう。優は慶應二年四月八日淺草駒形の有名な川升料理店の倅と生れたので現今の川升はその伯父に當るとの事。明治七年即ち優の九歳の時市川團十郎(當時河原崎權十郎)の門に入り福之助と名乗り芝の河原崎座に出勤したのが皮切りで二十三歳の時福之助改め團七となり更に三十四歳で新十郎と改名し名題に昇進したのである。明治三十六年九月十五日は優の爲めには大悪日で其師九世市川三升は遂に十萬億土へ旅行して終つたので、一時呆然自失したとは宜なる哉である。妻は春子(十五年生)と呼び優が三十五の時結婚したので間にふじ(三十八年生)と(四十年生)の二女がある。

住宅 東京市下谷區竹町一番地

市川壽朝

(等五級等札鑑)



市川壽朝

趣味 (小説其他) 院本、歌舞伎、都、歌、舞、肉類、野菜もの、洋酒、少、白梅
愛用品 (化粧品) 白粉、みその桶、香水、みその桶、歯磨、ライオン
娯楽 (衣服類) 旅行山、精城、骨董
愛玩 (拜質) 成田、不動、氣長にして淡白、丈質、五尺
化粧水、レイト
歯磨、ライオン

本名 岩本善太郎
屋敷 大見屋 俳名 喜升
『さしやなぎ木になる迄のねかひかな』
名匠披露目味句

老役敵役又三枚目などに扮しても評判よく近來舞臺も老巧の内に數へらる。優は元治元年八月一日の出生にて、十一歳にして先代壽美藏の内弟子となり登喜松と云ひしが後壽美太郎と改名せり。十八歳の時猿若町市村座に於て初舞臺を勤めたり。明治十七年即ち優の二十一歳の折英國倫敦博覽會へ招かれ自から市川壽升と名乗り同地に渡り、有ゆる浮沈に會し滞在する事足掛約五年(此間種々珍談あれど述ぶるの餘地なし何れ紹介する處あるべし) 歸朝後は壽美藏と改め又壽美五郎となり又々壽美升となり三十九年師壽美藏を失ひ四十年五月四十四歳にして東京座に於て名題に昇進し同時に壽朝と改めたり。性淡泊にして嫌氣なく人好する質なり。妻ふさ子は明治二年生にして明治二十一年中優と合巻せしもの夙に貞女の聞へあり。

住宅 東京市下谷區竹町一丁目五十二番

優 俳 伎 舞 歌

優 明 俳 舞

市川鼻升丈
(等五級等札鑑)



市川鼻升

歌舞伎座 出動本名 佐藤 三代吉

屋 號 高麗屋

- 趣 (小説其他) 角力大鑑 演劇、文藝
- 新 (飲食) 都、毎日
- 飲 (煙草) 茶、天ぷら
- 味 (愛粧用品) 白粉、みその香水、ムスク
- 愛 (衣服) 格子縞
- 衣 (愛玩) 花見
- 崇 (氣質) 日遊
- 身 (愛粧用品) 齒粧水、レット磨、サイオン
- 丈 (質) 五尺二寸五分

部

片岡十藏丈 目代三
(等四級等札鑑)



片岡十藏

歌舞伎座 出動本名 片岡龍三郎

屋 號 松島屋 俳 名 我 長

- 趣 (小説其他) 派色、時等
- 新 (飲食) 都、時等
- 飲 (煙草) 野榮物、日本酒少量
- 味 (愛粧用品) 白粉、みその香水、赤箱
- 愛 (衣服) 自轉車、釣
- 衣 (愛玩) 地味なお召
- 崇 (氣質) 犬、法華
- 身 (愛粧用品) 齒粧水、レット磨、オメガ
- 丈 (質) 五尺二寸五分

部

『時を得て咲くや櫻の三歳振り』
名題昇進咏句

優は明治十三年十月七日の出生なり。幼に於て名優片岡市藏に養はれ八歳の時龜藏と名乗り、市川鼻升に於て團十郎我童の一座、梅忠新口村の仕出を勤め、初舞臺なり。三十三年徴兵適令に合格し滿三ヶ年在籍し三十七年一月歌舞伎座に於て龜藏改め十藏となり、題に進みしが間もなく日露の開戦となり再度の召應じ總司令部付となり出征し曹長に昇進し三十八年大山元帥と同時に芽出度凱旋せし爲め一時軍人俳優と云ふ破格なる名稱のもとに大人氣ものとなりしが、肝腎要の修養時期を五ヶ年間に軍隊生活に送りし事なれば優の身にこりては確かに出入十年の相違と見るべく、人知れぬ氣苦勞は吾人の衷心より察する處なり。是を思へばお芽出度もありお目出度もなし。併しながら優の熱心は應て父の名を顯はす事勿論なり。三十九年十二月十一日は誠に大悪日にて優の父市藏は遂に不歸の客となれり。

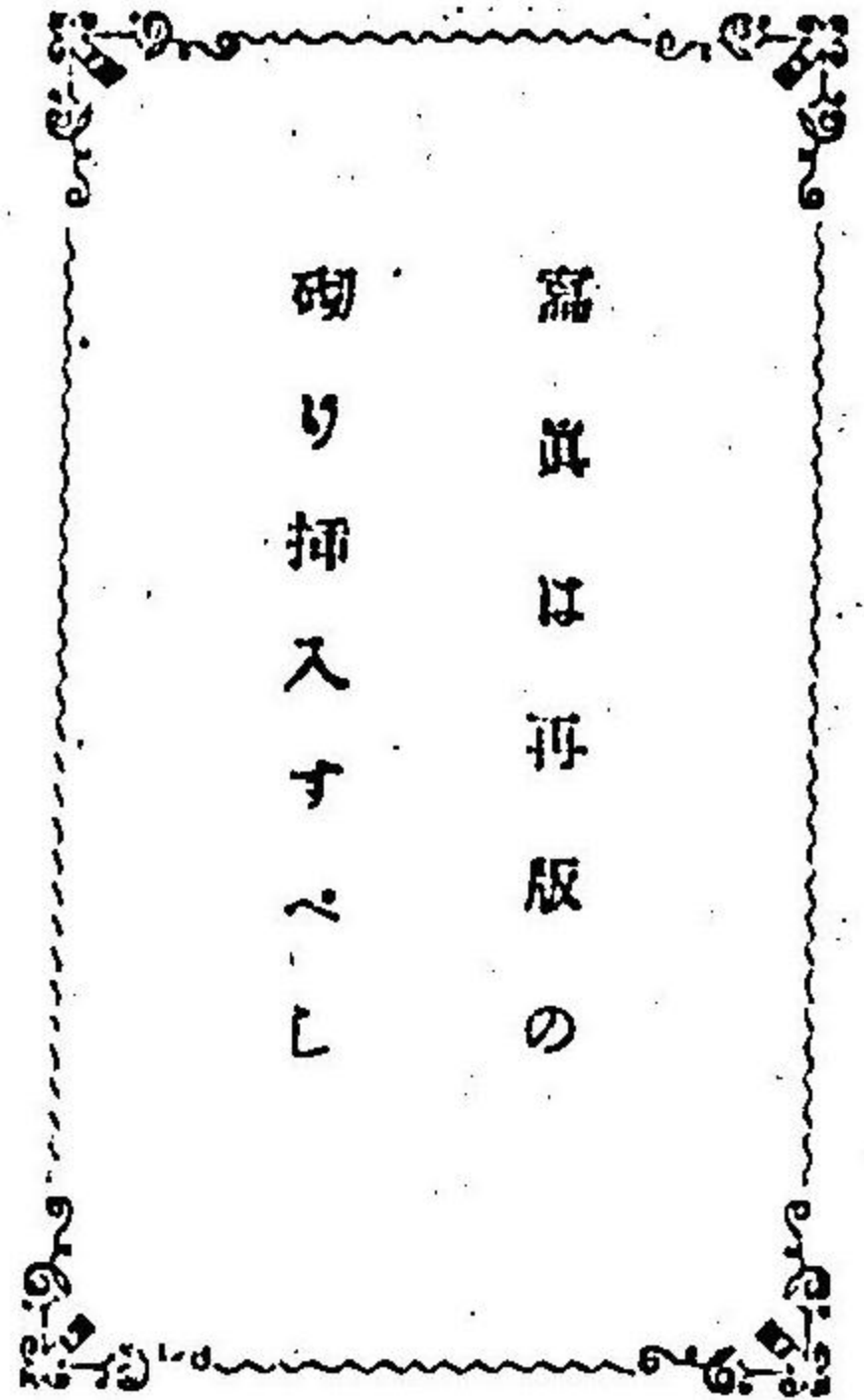
▲石鹼、玉石鹼
▲洗粉、立田
住宅 東京市芝區宇田川町十六番地
電話新橋(三千五百二十六番)

優は安政二年二月三日の出生なり。八歳の時三吉茂三(後に桃猿)の一座に入り三代吉と呼び新宿大宗寺境内の百日芝居に出動せしが皮切にて同年九藏(いまの團藏)の門弟となり十一歳にして蔭店小供芝居の座頭たり。十七歳の時更めて先代左團次の門に入り島三郎となりしが二十三歳の折高麗三郎を嗣ぎ九藏がその口上を中村座に於て述べたり。然るに二十七歳の砌り高麗三郎の俳名鼻升となり暫らく柳蔭座へ出動し其後二十年即ち三十三歳又前名高麗三郎を名乗り淺草公園の常磐座の舞臺開きに座頭となり辨慶と清玄の二役を勤め好評を博したり。後年京阪地方より北海道を巡り巡業し三十七年歸京以來は又更に鼻升と改め高麗藏の世話となり歌舞伎座又市村座へ出動し今回組合より名題適任證を得たり。性温厚而して諧謔家、妻みきは先年病歿せしが其男倉吉は既に父を補ひ、その女ふさ、なるは稀に見る美貌、何れ劣らぬ梅櫻。

▲石鹼、アイボレ
▲洗粉、クラブ
住宅 東京市淺草區田島町七十番地

文次々百川市 (等五級等札鑑)

- 趣味 (小説其他) 何んぞ限らず
 (雑誌) 演劇、文藝
 (新聞) 都
 (雑誌) 鍋るい、カレー
 (雑誌) 日本酒少量
 (雑誌) 大和
- 愛用化粧品
 ▲白粉、百美人
 ▲香水、色々
- 娯楽 (旅行山) 織もの
 (旅行山) 植木
 (旅行山) 鬼子母神
 (旅行山) 縁起
 (旅行山) 五尺三寸四分
- 愛用化粧品
 ▲化粧水、ローヤル水
 ▲歯磨、ライオン



歌舞伎座 出動本名 前田兼太郎
 屋敷 俳名 立花屋 三花

部

優は明治十三年八月十四日日本橋蛸殻町に生る。父は高橋和三郎とて同處に百花園なる菓子商を営み相應なる暮しをなせしものにて優はその長男なり。性來芝居を好み其十三歳の時中洲真砂馬十、福圓一座に加はり翌年古手や八郎兵衛の狂言にて秀を勤めしが初舞臺なり、其年更めて八百藏の門に入り百々次と改め二十一歳の時師と共に真砂座へ出動中、徴兵に合格し軍籍に在る事滿三ヶ年、間もなく日露の開戦となり再度召集せられしが病氣の爲め除隊となり其後は師に従ひ歌舞伎座に出動し兼ねて國華座等にも出で専心技藝の研鑽に勉めたり。其得意とする處は勿論女形にて特に源之助ものに秀で賣出狂言とも云ふべきは新富座團子一座の小供芝居にて平假名盛衰記のお筆、關ノ戸の小町近くは國華座にて白木屋お駒、筆賣幸兵衛の小雛女郎等なり。本年は二代目八百藏の本名吉三郎を襲名し名題披露目をなすと云ふなり妻をぎん子と呼ぶ。

▲石鹸、アイボレ
 ▲洗粉、クラブ
 住宅 東京市日本橋區蛸殻町三丁目十番地

丈郎三紋上尾 (等五級等札鑑)

- 趣味 (小説其他) 浪六、坂田、中野、中野、中野
 (雑誌) 報知、都
 (雑誌) 洋食、鳥
 (雑誌) サイダ、淋酒
 (雑誌) 富士
- 愛用化粧品
 ▲白粉、みその
 ▲香水、赤箱
- 娯楽 (旅行山) 留世、玉突
 (旅行山) お召
 (旅行山) 時計
 (旅行山) 不動
 (旅行山) 柔順
 (旅行山) 五尺五分
- 愛用化粧品
 ▲化粧水、シモンクリーム
 ▲歯磨、丸八



歌舞伎座 出動本名 大橋七郎
 屋敷 俳名 大橋屋 梅喬

部

優は明治二十二年七月十二日を以て日本橋蛸殻町に生る。尾上幸藏の長子なり。初め役者たるを嫌ひ器者を望みしが宗十郎(當時訥升)等の勸めに横濱萬座に於て榮藏と名乗り宗十郎の主水に伴幸次郎を勤めしが初舞臺なり。以來淺草座新富座等の小供芝居に出動せしが、なにがさ玉を欺く顔容と天品の器用と相俟つて忽ちに賣出し麒麟児の名を擅にせり後歌舞伎座にて故人菊五郎が羽衣を演じたりし時同座に出動なせしが當時今の榮三郎も同じく英造と呼びしかば其折優は父の幸の字を取り幸之助と改めたり。其後更に新富淺草兩座に出動せり優が素晴き人氣を得しは新富座に於てダーク人形の自轉車曲乗を演せし時なり。四十年四月團藏 上京の折芝翫幸菊五郎の口上にて四代目紋三郎を嗣ぎ盛んなる名題披露目をなせり。從來歌舞伎、市村、壽座等に出動しつゝあり。舉止清楚として稀れに見る好男子なり。

▲石鹸、スミレ
 ▲洗粉、不用
 住宅 東京市深川區仲町十九番地

す
ノ
部

趣 味
 (小説其他) 重に歴史もの
 (雑誌) 演劇物すべて
 (新聞) 時事、都
 (飲食) 牛、洋食
 (飲物) 平野水
 (煙草) 喫せず

娯 樂
 (衣服) 登山、遠足
 (愛玩) 地味な變り柄を
 (崇拝) 神社、佛閣の印を
 (氣質) 聖天、觀世音
 (身丈) 溫和、觀世音
 五尺二寸五分

化粧用品
 ▲白粉、みその
 ▲香水、オペラ
 ▲化粧水、レート
 ▲齒磨、菊世界

六代市川美藏丈
 (等五級等札懸)



市川美藏

明治座出勤本名 太田 照造
 屋 號 俳 名
 升 田 屋 登 升
 「畑ほどに力及ばず鉄はじめ」
 名題披露目味句

▲石鹸 ケーパ
 ▲洗粉 クラブ

住宅 東京市下谷區松永町十八番地

す
ノ
部

趣 味
 (小説其他) 何んとも限らず
 (雑誌) 色々
 (新聞) 都時、報讀
 (飲食) 洋食
 (飲物) 湯茶
 (煙草) 福壽草、敷しま

娯 樂
 (衣服) 芝居見物、讀物
 (愛玩) お召
 (崇拝) 不動、拵花
 (氣質) 勝氣
 (身丈) 五尺

化粧用品
 ▲白粉、みその
 ▲香水、マジック
 ▲化粧水、レート
 ▲齒磨、みその

市川翠扇丈



市川翠扇

明治座出勤本名 堀越 實子
 屋 號
 成 田 屋

優は明治十四年八月二十一日の出生にて故人九代目團十郎の長女なる事は世の既に知る所なり。優が俳優として立つにつき世に非難の聲を放つものあれど、此女優問題たるや父團十郎が在世當時よりの希望にて現に幼少の頃より再三再四(俳優鑑札を受け)歌舞伎座へ出演せし事もありたるが西園寺前宰相も達つて勸められ「帝國座建設も近きにあり其折は是非共女優の必要があるからお前達二人は一つ奮發して女優になつて貰ひたい、しかし今日女優を作るには、藝術に對する世間の思想はまだそれ程に開けて居ないから多少の批難を免かれないが、率先して犠牲になつて呉れなければ後からができない。幸ひ市川宗家の娘なり。又踊りの素養もあり、亡父の志でもあり、お前達も將來の希望として居つた事だから無論異存はなからう」と云ふ勸めにより一家一門の同意を得て女優として打て出し譯なり。

▲石鹸、舶來色
 ▲洗粉、歌舞伎

住宅 東京市京橋區築地二丁目廿七番地
 (電話新橋(四百十四番))

市川三壽之丞

市川宗三郎

市川紅若

尾上菊四郎

市川左傳次

尾上榮次郎

尾上梅助

市川紅車

坂田半五郎

市川栗三郎

澤村百之助

尾上松鶴

右の諸優を本書に逸したるは返すべくも残念の事ながら固より已むなき事情のある故なれば是非もなし他日第二版の時は之れを補填する所あるべし請ふ諒せよ。

但し宿所氏名は其の二(卷末)にあり。

新派俳優之部

(い)がは順

鑑 明 優 俳

市川三壽之丞
市川宗三郎
市川紅若
尾上菊四郎
市川左傳次
尾上榮次郎

尾上梅助
市川紅車
坂田半五郎
市川栗三郎
澤村百之助
尾上松鶴

右の諸優を本書に逸したるは返すべくも残念の事ながら固より已むなき事情のある故なれば是非もなし他日第二版の時は之れを補填する所あるべし請ふ諒せよ。
但し宿所氏名は其の二(巻末)にあり。

優 俳 派 新

伊井蓉峰君



伊井蓉峰

東京俳優組合評議員 本名 伊井申三郎

雅 號 十千里園

趣 味

小説其他 何と限らず
大抵見る
同 淡白なもの
清涼劑 朝日又は大和
草物物聞誌

愛用化粧品

▲▲白粉、みその香水、オベラ

娯 樂

色々 洋服 おもちゃ
洋服 おもちゃ
神佛 淡白にして向上
心に密む 五尺二寸

▲▲化粧水、レート歯磨、煉歯磨

部

我が邦新派劇壇を支配する二大勢力あり。一は高田實にして一は即ち優なりとす。而して始終一貫大人氣役者として其名汎く世に知られたる優は、明治四年八月十六日を以て東京に生る。その初めて劇界に投じたりしは二十二歳の時にて當時の新演劇なるもの猶未だ至極幼稚なるものにて、名を新演劇に藉るもの、探偵ものや立廻を唯一の賣物として居たる時代なりき。然るに優の炯眼や早くも時代の風潮を洞察し男女合同劇、戀愛劇、近松研究さては新舊合同演劇と演り初めて我新派劇の一生面を拓きたる優の勞や誠に偉大なるものあり。常に最も向上の意氣に富み、財を得ること社會の最高額に在るも宜く之れを交際場裡に散じて清貧を樂み、弱きを助け強きを挫く天品の俠氣満々たり。こゝ腰子の口吻を藉りて「ア、伊井なる哉、申三郎なる哉」妻女はてい子(七年生)娘は静枝(三十一)と呼ぶ。

▲▲石鹼、三越ソーパー 住宅 東京市下谷區大塚町十七番地
▲▲洗粉、オノール

井口昇君

小説其他
新雜誌
飲食
煙草

俳諧もの
文藝
都白
淡白
ビール
オリエン
香水、
唐の土
ムスク

娯樂類
愛玩
崇拜
氣質

寄席
和服
下駄
佛放
五尺三寸
化粧水、
不用
齒磨、
ダイヤモンド



井口昇

明盛座出勤本名 明林彌三郎

部

一見豪慢の人らしく思はる。白き人なり。明治四年十二月一日を以て、目に生れ、父は明林權兵衛とて、後、神田東區一番地に住む上地買賣業を営みし巨萬。優はその次男と生れたり。明治三十一年、八歳の時心切りに動き市村座伊井、山口合同演劇に入り、美人の生理に仕出を勤めしが初舞臺なり。の井口の意は伊井の井の字に山口の口の字をこれけ井口と名乗りしものなりとか。其後四方を巡業な一度本所壽座に旗揚をなしその主任となりしが幾くもなく解散後は淺草開盛座中野信近一座に加入し以て今日に至れり。その得意とする處は敵役なり。特筆すべきは優が日清日露の兩戰に参加し戦功拔群とあつて勳七等、青色桐葉章等を賜はる。稀とすべきはその清元の旨さなり、殊に神田祭は十八番中の十八番。

住宅 東京市淺草區馬道町八丁目七番地

石川新水君

小説其他
新雜誌
飲食
煙草

浪六、風葉
齋報、歌舞伎
都報、毎電讀
淡白
サイダ
大和

娯樂類
愛玩
崇拜
氣質

雜俳
飛白大しま
化粧品具
荒神
勝氣
五尺一寸二分
化粧水、
レント
齒磨、
オペラ



石川新水

新那座出勤本名 石川直水

部

優は明治二十年九月一日を以て神田松木下町に生れ、父は相場師で財政は裕かであつた所から優は不自由の味を知らず、春花秋月、幾星霜は矢の如く走つて其十三歳の時、京華中學へ入學し學業も人後に墮ちぬ迄に勉強したが二年級の一學期を濟せし頃フト俳優にならうと決して當時野州栃木町の明治座に開演中の原澤新一座に加はり遂に俳優となつて終つた。時に十五歳狂言は「血の涙」と云ふので仕出を勤めたのがその皮切りであつた。後同一座と共に約一年間各地を巡業し歸京後は伊井、藤澤、中野の各座で一生涯懸命に勉強し三十八年一月淺草公園常盤座へ加入して毎興行舞臺に花を咲せ俄に賣出したが好事魔多しの譬で常盤座は四十年二月限り灰燼に歸した。併し或は之れが幸福だつたかも知れぬ、爾來新富本郷兩座へ出勤し伊井の庇護に因つて重い役がつくようになったのである。此扮は「怪光」の西條妹雪子だ。

住宅 東京市淺草區阿部川町十七番地 (電話下谷六百十七番) 神谷取次

英 太 郎



英太郎

東京座出勤本名 上田英太郎
雅 號 香 葉

趣 味
小説其他 鏡花 文藝、畫報
雜誌 色々讀み
新聞 精進料理
飲食 煎茶、酒
煙草 煎茶、酒

(愛粧用品)
▲▲白粉、御園香水、金雞

娛 樂 玉突、落語
芝居見物
遊 園 地味な結城大結
玩 具 舶來のおもちゃ
愛 慕 金神、稻荷
氣 質 細心
身 丈 五尺五分

▲▲化粧水、レイトン齒磨、ライオン

は 人 部

▲▲石鹼、地球洗粉、クラン

住宅 東京都神田區三崎町三丁目一番地
電話本局二二三三番四十七番
本宅大阪市南區宗右衛門町十八川

花 園 薫 君



花園薫

東京座出勤本名 大野兼吉

趣 味
小説其他 鏡花 文藝
雜誌 都 醉の物に甘味
新聞 サイダー
飲食 好まざる

(愛粧用品)
▲▲白粉、すみれ香水、すみれ

娛 樂 寄席 結城の類
遊 園 植木 稻荷と月讀
愛 慕 陽氣
氣 質 五尺二寸

▲▲化粧水、レイトン齒磨、ダイヤモンド

▲▲石鹼、メリー洗粉

住宅 東京市淺草區小島町七十三番地

優は明治十年世間の人が今日飛鳥上野と浮れ廻るその月に生れた故か愛嬌たつぷりの中々面白い人でお座敷へ花を咲かせるなどは巧いもの。秘し藝も色々あるが優の十八番は新舊役者の聲色で中でも羽左衛門の聲色は得意中の得意、本人の橋やから所望された位、それと云ふのも根が融通の達く質であるからだ。現に河合や木下の缺勤の時に代役を勤めても兎に角器用にやッてのけるお手際は此の人でなくてはできかねる。生れは芝濱松町でお父さんは井上八郎とて元を究すと井上大九郎の幾代かの血統であるとの事。幼少の頃先代秀調の内弟子となり佳子三と呼んだが三十四年師秀調が逝いてのちは到底舊俳優では發展の餘地がないと自覺して名も花園薫と改め新俳優となり改良座へ出勤し「紫海苔」の狂言に花魁を勤めたのが其二十七歳の時、なにかして佳子三時代に叩込んだ腕は確かなもの、今日あるは満更故なきに非ず。

秋月門下の一異彩、現時賣出しの花形は明治十八年十一月十九日産れ、干支で乙酉本命七赤大中小の三輪は緩結奮と云ひ、納音は泉水の水、藝術は先天的に具はり、性質は負嫌い、藝事に掛けては五分も透なく、そして緩大論だから、人に取り入ることも上手、遠からず大したものになるだらう。けれども色情は餘程つしまねばならぬ。生地は京都上京區木屋町上るで、小學を卒業し商業學校の豫科へ入學し間もなく銀行へ入ったが、心氣一轉、當時關西新派の大將秋月桂太郎の門を叩き、三十四年朝日座に於て金色夜叉に待合茶屋の娘を演じたのが初舞臺、常に可憐の娘に扮し妙々どすべく最も好評なりしは「通夜物語」のお松、「観音岩」のお豊なごて無類の上出来。東京にては四十一年五月師と共に東京座へ乗込み「月魄」に梅小路令嬢水江茶を勤めしが初舞臺にて、次で「夏木立」のお琴と共に好評を博せり。

若松信乃君

趣味

(小説其他) 何と限らず
(雑誌) 同
(新聞) 萬朝
(食) 洋食
(飲) ビール
(煙草) 敷島

(愛用化粧品) ▲白粉、パツチリ
▲香水、色ケ

(娯楽) 釣魚
(衣服) 大名袴
(愛玩) 小鳥
(崇拜) シェクスピア
(氣質) 穩健

(樂類) 尺八
(玩) 五尺三寸一分
(拜) 丈質



若松信乃

明盛座出動本名 相木 満
龍 共
「深く散る神前の櫻哉」

わ の 部

▲化粧水、レット
▲歯磨、ライオン

▲化粧水、レット
▲歯磨、ライオン
▲石鹸、アイボレ
▲洗粉、樂屋
住宅 東京市淺草區藤下町十一番地

優は明治十三年六月十日の出生で、劇界に身を投じたのは三十四年十月であるとの事、中野信近の内弟子と成た際、優が能筆である所から出動俳優の臺詞書を書く事を擔任され次第に内情に馴るゝに隨ひ筆を脚本家たらんとし、然しそれには舞臺上の経験を必用とするから依然俳優となつて居るとの事三十五年六月初めて「迷の夢」と云ふ脚本を師中野の校閲を経て舞臺に掛けし以來續々執筆する様になつた。そして彼の宮古紫郎と云ふ異才一回置きに筆を執り其後宮古紫郎のちは毎月二回の興業の脚本を間に合せつゝあるのである。恐らく何人とも其健筆に驚かざるものはなからう、元より其文章は勿論修辭上又は文法上の誤謬が、少くないのであるが、兎にも角にも、自己の言はむと欲する所を、言盡し得て、所謂放膽文の特色を顯はして居る。充分の時間と充分の修養させたら屹度立派なものが出るに相違ない。

小河幸雄君

趣味

(小説其他) 何と限らず
(雑誌) 都、二六
(新聞) ビスケツト
(食) 味淋
(飲) 吸はす

(愛用化粧品) ▲白粉、百美人
▲香水、ムスク

(娯楽) 公園見世物見物
(衣服) 飛白類
(愛玩) 犬
(崇拜) 不動
(氣質) 陽氣

(樂類) 尺八
(玩) 五尺〇二分
(拜) 丈質



小河幸雄

東京座出動本名 石井卯三郎

お の 部

▲化粧水、露の花
▲歯磨、ライオン

▲石鹸、ラクダ
▲洗粉、名題

住宅 東京市下谷區西馬町五番地

優は明治十四年生とあるから本命が二黒の巳の年である故に陰氣の質でなければならぬ筈だが馬鹿に陽氣だから不思議と探つて見れば何んのことはない世間の人が大浮れに浮れ廻つて居る眞最中四月八日の生れなのだ。生所は日本橋てりふり町、足袋股引問屋吉野屋事石井惣吉の次男で十五の時海軍を志願して荒井中將の從僕たる事三箇年、フトした事で濱の羽衣座で森三之助一座を見物してこれが動機となつて海軍々人石井卯三郎と改め新俳優小川健となり各地を巡業し三十二年一月水野の奨励會で河合武雄の門弟となり小河幸雄と云ふ名を貰ひ河合が當り矢お金を演じ大當をみた時藝妓に出たのが初舞臺由來師河合に附いて今日に及んだのである。元來器用な達であるから舊芝居なども好んでやるとの事。それに藝事は何んでも大好きで清元などは中々乙な聲で殊に山姥は十八番中の十八番黒人跳走の御手際であると。

33
15
28

和田卷二郎君



和田卷二郎

推 號
神 水

本郷座出動本名 藝名と同じ

趣 味 (小説其他) 紅葉其他色々
 (雑誌) 演藝もの色々
 (新聞) 好まし色々
 (飲食) 牛、豚
 (飲物) ビール
 (煙草) 何んぞ定まらず

(愛用化粧品) ▲▲白粉、みその
 ▲▲香水、オペラ

(娯楽) 芝居見物
 (衣服) お召もの類
 (愛玩) 瀬戸もの類
 (崇拜) 観世音
 (氣質) 悠長
 (身丈) 五尺

(娯樂) 遠足
 (衣服) 好みな
 (愛玩) 雀箱
 (崇拜) 大師
 (氣質) 忠實
 (身丈) 五尺三寸五分

(愛用化粧品) ▲▲化粧水、レポート
 ▲▲齒磨、鹿印

わ 部

若水美登里君



若水美登里

趣 味 (小説其他) 春葉
 (雑誌) 新小説、歌舞伎
 (新聞) 都、鳥、貝類
 (飲食) 湯茶
 (飲物) 福壽草

(愛用化粧品) ▲▲白粉、みその
 ▲▲香水、ムスク

(娯樂) 芝居見物
 (衣服) お召もの類
 (愛玩) 瀬戸もの類
 (崇拜) 観世音
 (氣質) 悠長
 (身丈) 五尺

(愛用化粧品) ▲▲化粧水、レポート
 ▲▲齒磨、オペラ

わ 部

真砂座出動本名 北澤濱之助

優は明治十五年二月十七日横濱羽衣町三丁目北澤清右衛門の三男と生れ蝶よ花よと育てられしが天性遊藝を好み揃て加へて身體甚だ健康ならず。遂に意を決し三十三年即ち十九歳の折水野好美の奨励會に加入し若水美登里と名乗り常盤座に於て初舞臺を勤めたり楚々として風に耐ざるが如き容姿と丹花の如き唇より洩す會話は宛然婦人のその如く、玉を欺く顔容は小娘に扮して、一寸眞似手なかりしかば、忽ちにして賣出し其後數年間水野一座の人氣の中心となり奨励會解散後も水野と共に國華座又眞砂座等に出動せしが、四十年七月眞砂座革新に向へられてその座附俳優となり第一回興行として都新聞掲載の伊原青々園の「夫さのため」を演じ藝妓力彌に扮せし以來常に山崎長之輔と共に其長所を發揮し、同座の花と稱せられ技藝も興行毎にその進歩を示し近來メキメキ評判ものとなれり。

▲▲石鹼、敷島
▲▲洗粉、名題

住宅 東京市淺草區旅籠町二丁目十二番地

優は明治七年十一月二十四日を以て神田連雀町に生る。十四歳の時高等小學を卒へし後は習字、英語を專習しつゝありしが二十一歳の十一月當時淺草座に開演中の山口定雄一派へ加入し翌年二月病を得て一時休業の已なきに到りしが同年十二月轉じて市村座に在りし川上音次郎の門を叩き、その長所を認識され以後川上一派の三枚目師として重寶がられ三十二年四月川上第二回の洋行に従ひ米英佛耳等汎く歐米の巡演を終り三十四年一月歸朝なし大阪朝日座に出動し四年間同座に勤続せり。三十七年六月高田と共に本郷座へ乗込みしが一回限り大阪へ戻り春日座に於て山田九州男等と旗揚をなし幾くもなく再び川上一座へ加はり同一派の解散後は自ら一座を組織して中國、九州、四國を巡業し四十一年五月以來伊井、喜多村、村田一座の甲部となりその得意の三枚目に於て異彩を放ち夙に具眼者をして首肯せしめつゝあり。性淡泊にして些の邪味なし。

▲▲石鹼、色々
▲▲洗粉、オノール

住宅 東京市下谷區中根岸町六十九番地

か
ノ
部

東京座出動本名 門脇清三郎

門脇清三郎



門脇清三郎

趣味

小説其他 何んとも限らず
太陽、中央公論
報知、都
日本料理
日本酒
不好

飲食新誌
煙飲食新誌

草物物開誌

愛衣娛 釣、勝地に遊ぶ
好みなし
家具
佛教

化粧用品
白粉、百美人
香水、金鷄

化粧水、レイト
歯磨、ワイオン

優は明治七年八月二日淺草永住町に生れ、父を平藏と云ひ母をよねと呼びだが不幸にも、父は三歳の時母は二十歳の時此世を去られたのである。で優は幼少の頃神田小柳町の森島と云ふ藥種屋へ奉公に行つたが間もなく假をとり神田の私立商業學校へ二年程通ひ後築地のサンマースのスクールへ通學して英語を專習したが、二十一歳の時演劇に言はれぬ趣味を覺へ勉學を捨て川上音次郎の門を叩き、川上座で「日本の娘」に娘おるんを勤めたのが初舞臺であるが其後山口定雄一派へ加入し専ら女形の研究に勉めたので、熱心の功空しくならず通れ一人前の女形役者となつたのである。優は常に「兎に角私しの今日あるは全く川上先生、藤澤先生また故山口先生のお庇護に因るので」と語られるを以て優の一般が明るであらう。從來各地方へ巡業したのは無論の事、高田藤澤一派へ出動したのは四十年九月本郷座「大農」以來である。

住宅 東京市淺草區四三筋町十一番地

河合武次郎



河合武次郎

東京新派俳優組合評議員本名

河合武次郎

趣味

小説其他 何んとも限らず
同、國民
都、園民
しやも、機幸
サイダ
好まず

飲食新誌
煙飲食新誌

草物物開誌

愛衣娛 和洋服ハイカラ
船來品
芝居好きの人
深切な處もあり
ズボラの處もあり
五尺三寸

化粧用品
白粉、みその
香水、ダジック

化粧水、レイト
歯磨、オペラ

か
ノ
部

常に天賦の美貌と麗妙なる伎倆と相俟て、些の遺憾なくその長所を發揮し、観者をチャームさせるの偉大なる恐らく優の右に出づるものなげん。優は明治十年三月十三日故人大谷馬十の長男と生る。初め父馬十は優を藝人にするを好まず、然れども優の決心や牢乎として抜くべくもあらず飽迄で藝術をもて身を立てんと欲し十八歳の夏當時横濱某座に在りし山口定雄の門下となり河合武雄と改め追々腕を上げ四方を巡業の末、大阪辨天座へ乗込みし時澤村源之助の世話となり一時澤村百之助と名乗り北海道へ渡り歸京後源之助と別れ横濱羽衣座にて佐藤(歳)金泉等と一座なし縮屋殺しの女房を勤め河合の名俄に高く其後水野兒島等と淺草常盤座に奨勵會を起し兼ねて伊井納升等とも握手なし其名愈々上り今は既に新派第一流の立旦として名聲宇内に冠たりと妻をいと呼ぶ。

住宅 東京市町町區永田町二丁目五十四番地
電話新機(三千三百三十七番)

横山運平君



横山運平

東京座出勤本名 横山彌太郎

趣味 (小説其他) 紅樂もの、演、劇、萬朝、ライスカレー、日本酒、何と定まらず

愛用 (化粧品) 白粉、色々、香水、スミレ

愛用 (化粧品) 白粉、色々、香水、スミレ

よ

部

化粧水、不用、ダイヤモンド

石鹸、ラクダ、立田

住宅 東京市赤坂區田町三丁目十番地

何日も枯れた藝を見せ好事家を嬉ばしてゐる優は明治十四年一月元日にオギヤノと初めて五月蠅世の中に飛出したのである。藝人には惜い程魁偉な骨相を具備し日常力自慢をする所などを見るところでも關東武士さしか受取れないがあれで大阪の生れであるといふ一寸以外である。十二歳の時から二十歳の時迄で一日の如く角藤定憲一座に働いて居たので二十歳の時角藤一座を脱け初めて上京し演伎座の青木千八郎一座で村正勘次の狂言の時出たのが東京での初舞臺、其後伊井福井合同演劇にも暫く出勤して居たが一先づ大阪へ歸り更めて當時朝日座をつた高田實の弟子となり其後師の高田の上京と共に再び東京の舞臺に現れ端役ながら何日も群を抜いて居るのである。日本酒は中々強い方、またライスカレーが大の好物で何日ぞや友人と競走し八枚も一時にペロリと平らげ第一等賞を得たことは有樂にエライ。

河本重徳君



河本重徳

趣味 (小説其他) 春菜、文學趣味のもの、萬朝、鹽もの、紅茶、フランス刺

愛用 (化粧品) 白粉、色々、香水、同

愛用 (化粧品) 白粉、色々、香水、同

化粧水、手製、麿、象印煉り

石鹸、アイボレ

住宅 東京市本郷區湯島新花町四十一番地

優は明治九年二月二十六日を以て鳥取縣西伯郡逢坂村に生る。幼にして漢學を修め夙に政治運動をなし各地を奔走中福島縣飯野川にて舊知人壯士芝居を組織し強盗判事を演ずるにつき優は頼まれて面白半分には警部を扮せしが動機にて遂に身を劇界に投ずるに至れり。其後角藤定憲、武智元良合同一座に加入し二十七年同一座分離後は武智元良につき作者兼俳優となり四方を巡業せしが二十九年徴兵適齡の爲め歸郷なし一時俳優を断念し地方新聞に記者たりし事あり三十五年大阪に出で再び俳優となり本町平林座に出勤し、三浦榮之助等と一座せしが後別れて丹波丹後地方を汎く巡演し三十八年歸阪なし當時天満座に立籠りたりし喜多村線郎に師事する事となり。以來師喜多村に従ひ今日に至れり。性頗る磊落にして文學趣味に富み文筆に堪能なる處より常に座附作者を補けて重寶がられ居れり。

か

部

本郷座出勤本名 牧野徳松

『優の風姿宛然萬朝報の松居松葉子に髣髴たるものあるを見ずや』

48/11

高浪定次郎君



高浪定次郎

趣味 (小説其他) 竹皮道人
 (新誌) 文藝、太陽
 (飲食) 刺身
 (飲物) 日本酒
 (煙草) 敷島

愛用 (化粧品) ▲白粉、百美人
 ▲香水、色々

愛用 (化粧品) ▲化粧水、不用
 ▲齒磨、パラ

娯樂 (衣服) 藝談を開く事
 (玩類) 趣味な織物
 (拜玩) 法華
 (質丈) 柔順猫の如し
 五尺

たノ部

高田實君



高田實

趣味 (小説其他) 何んぞ限らず
 (新誌) 同
 (飲食) 都、國民、報知
 (飲物) 洋食、天ぷら
 (煙草) 蒸葉子
 (草物) 葡萄酒
 エジプト、敷島

愛用 (化粧品) ▲白粉、みその
 ▲香水、オペラ

愛用 (化粧品) ▲化粧水、不用
 ▲齒磨、オペラ

娯樂 (衣服) 登山
 (玩類) 大島飛白
 (拜玩) 佛像
 (質丈) 金神
 冥黙
 五尺七寸

たノ部

東京新派俳評議員 本名 藝名に同じ

「新派の中で臺詞の抑揚緩急のうまいのは矢張り高田君でせうが、彼の人は御承知の通りの身振ですから、ぬつと舞臺へ現はれると大向ふは高田と叫びます。そして相手の役者の呼吸を計って臺詞をいふ、其の意氣込と云ひ臺詞の緩急と云ひ少しも油断といふものはない。素人目にはぬつとして居るから隙があるやうですが仲々隙がない。此方の意氣計りを覗つて居る。そして観客をチャームする事が頗る巧みなのです。ヌツとして誰も知らぬ中に細密な表情と巧緻な藝當をするつまり練々として藝に餘裕があるのです」とは秋月氏が嘗て某誌へ掲げた高田の藝評である。蓋し衆目の見る處は此話に首肯する事勿論、然らば其人物は如何んとも見るに之又一頭地を抜いて居る。要するに優は先天的頭領たる資格を具備した人である。明治四年三月十九日を以て府下千住に生る、妻女を浪子と呼ぶ。

▲石鹼、ホルマリン 住宅 東京市神田區駿河臺南甲賀町十番地
 ▲洗粉、不用 電話本局 (三百二十七番)

優の舞臺は既では幾分のお可笑味あり。然れども見よ、優が自己の自然を巧みに利用し、満を持して放たざる處中々の眞價ならずや。優は明治四年五月四日下谷坂本に生る。元吳服商なりしが一度淺草座に於て川上一座の又意外の初日に見物せじより心しきりに動きその閉場迄一日も缺さず見物なし遂に川上の門下となりしは三十一年一月即ち優の二十八歳の時なりし。當時の狂言は一番目膽才子、二番目梅田源次郎にて百姓を勤めたり三十二年五月三十日川上と共に歐米各地を興行し翌年十二月三十一日歸朝せり其後福井茂兵衛一座或は木村一一座等に參加し京阪地方を巡業なし三十八年八月久振りにて歸京し直ちに當時眞砂座に在りし伊井一座に出勤し以つて今日に至れり。性頗る柔順且つ滑稽愛すべきものあり。

▲石鹼、花王 住宅 東京市下谷區四町一番地
 ▲洗粉、クラフ

都築文夫君



都築文夫

本郷座出動本名 都築七五三太郎
草々軒胡蝶

- 趣味 (小説其他) 紅葉先生、新小、歌舞、太陽、時事、都、毎電、鹽煎餅、レモナル、放島
- (愛用化粧品) 白粉、百美入、香水、ムスク
- 身氣崇愛衣娛 (三遊樂) 既て格子、鼓馬おもちゃ、御嶽山
- 丈質拜玩類樂 (五尺四寸一分) 香水、齒化粧水、ローヤール、磨、ダイヤモンド

部

優は明治十六年十二月二十七日日本所竹町に生れたチヤキの江戸兒である。十九歳の時、淺草常磐座の水野好美の獎勵會で『自轉車お玉』の狂言の時兒島文衛の門人となつたので其後師兒島が單身洋行する事となつた爲め師より村田正雄に預けられ、其れ以來優は村田の妙伎に服し兒島師歸朝の後も尙且つ村田に従つて居たのであるが昨年師兒島文衛不歸の客となつたので更めて村田正雄門下となつたのである。今日迄で演じた中で最も好評を博したのは眞砂座の伊井村田一派で金色夜叉の佐分利、栗田口の萩原などであらう。男は宜し柄はあり、而かも熱心で藝風も華かで何處やら同門の井上正夫に髣髴たる所がある。兎に角此分で進んだら確の東都名優の中には數へられるであらうとは今から評判々々、妻を愛子(十六年生)と呼び優の二十歳の時結婚したのである。

住宅 東京市淺草區淺草公園第五區六十八番

高杉三郎君



高杉三郎

眞砂座出動本名 竹林義彦

- 趣味 (小説其他) 涙六、文藝、毒報、都、魚肉、ビール、リッパ
- (愛用化粧品) 白粉、色、香水、バイオレット
- 身氣崇愛衣娛 (個大に戲る事) 結城紬、蓑入、不動、人情深、馬鹿正
- 丈質拜玩類樂 (五尺一寸五分) 齒化粧水、ローヤール、磨、鼻印

優は明治五年十一月二日福岡縣小倉市大領町に生る父は請負師にてその六歳の時父に伴はれ上京し十六歳にして巴小學校を卒へ二十六年八月靜岡縣へ測量技師として出張中其當時靜岡若竹座に於て武智元良が強盜判事の開演中武智及び座員の野崎三郎道家市太郎の三名官吏侮辱の件を以て拘引され道家が遂に獄死なし武智、野崎が出獄後直ちに拘引當時の模様を狂言中に仕組み再び開演せし處非常の好人氣にて、優は一日是を見物せしが動機となり遂に同座員の余根田耕三なるもの一座を組織するに當り其座員となり當時中村健(今の木村猛夫)の指圖に依り舞臺を勤め汎く地方を巡業なし角藤一座また武智一座等にも参加なし其後自ら太夫元となり總州野州より東北地方を巡演し歸京後は眞砂座に出勤なし一意専心舞臺大切に勤め居れり。性至つて穩健誠人に好きのする質なり妻はヨシ子(十年生)と呼ぶ。

住宅 東京市淺草區淺草公園第五區六十八番

4.2
164
26.1

部

眞砂座出動本名 折井吉二郎

月 岡 一 樹 君



月岡一樹

趣味 (小説其他) 鏡花、柳屋、太陽、歌舞伎、新小、都、朝日、淡白なもの、草物、物聞誌、草、散島、福壽草

愛用品 (化粧品) 白粉、色々、香水、同

楽類 (衣服) 水彩畫、好みなし、繪畫、淡白、五尺

愛用品 (化粧品) 齒、水、磨、ライオン

近來眞砂座にて好評を博しつゝある優は明治九年六月二十日の出生なり。郷里は信州松本にて其祖父なる人劇場に關係ありしかば自然と優は演藝趣味濃厚となり遂に東京に出て伊井容峯を訪れたり。然るに伊井よりその困難なる事情を諭れ一時は断念せしと雖も二十歳の時渡臺し有志を集め新演劇を開演せり。これ一面には優の初舞臺と一面には臺灣に新演劇を興行せし濫觴なり爾來九州各地を巡業なして後革新派なる一團を組織し關西北陸地方より北海道に渡り歸途三十八年新富座に「己が罪」を開演し優は塚口と作兵衛の二役に扮し月岡の名漸く高かりしが幾くもなく北海道へ迎へられ至る處巡演なし去九月以來眞砂座へ出勤しつゝあり。優が北海道に於ける人氣は非常にて所謂正劇なるものを北海の天地に輸入の其觀劇眼を高めしものは優等の革新派なりと言ふも敢て溢美の言に非ず。妻を貞子(十二年生)と呼ぶ。

住宅 東京市赤坂區榎坂町二番地

中 野 信 近 君



中野信近

東京新派俳優組合評議員 本名 藝名に同じ

趣味 (小説其他) 紅葉一派、文藝、新小、太陽、高朝、時事、肉類、ビール、救し

愛用品 (化粧品) 白粉、みその、香水、不用

楽類 (衣服) 釣、木綿、小鳥、盆栽、温情、五尺三寸

愛用品 (化粧品) 齒、水、磨、鹿印

部

趣味 (小説其他) 紅葉一派、文藝、新小、太陽、高朝、時事、肉類、ビール、救し

愛用品 (化粧品) 白粉、みその、香水、不用

楽類 (衣服) 釣、木綿、小鳥、盆栽、温情、五尺三寸

愛用品 (化粧品) 齒、水、磨、鹿印

今や新劇擅一方の大將として侮るべからざる勢力を有し淺草開盛座に立籠り二六時中好景氣を續けつゝある優は慶應二年三月十五日を以て備前國松山に生る、父は舊幕臣なり。其成長するに及びて彼の大井憲太郎の部下となり純たる壯士たり。然るに二十四五年の頃福井茂兵衛の勸めにより初めて俳優となり川上音次郎に師事し以て今日に及びたり。此間或は沈み或は浮きたる事多々ありと雖もそは既に各新聞雜誌に於て紹介せられたれば茲に事々しく畧せず只その三十五年七月優が率先者となり開盛座にて萬難を排し夜興行開始せしが如き將亦三十六年愛嬌會なるものを組織し吾妻座に於て初めて文士もの即ち正劇を演じたるが如き吾演劇史上特筆せざるべからざる事項なりとす部下を愛する事優の如きは稀に見る所なり。妻正子は舊自由黨員林三郎の娘にて明治四年生なり。

住宅 神奈川県鎌倉市那須川口村字片瀬 府下荏原郡大井町九百七十六番地

な 部

新座出動 本名 中村播之助

屋 號 播磨屋

中村播之助



中村播之助

趣 味 (小説其他) 院本 歌舞伎 大阪毎日、都
(新誌) 大坂毎日、都
(飲食) 洋食
(煙草) 日本酒 敷島

愛 衣 娛 (樂類) 釣り 和服 地味な名
(玩) 釣竿
(拜) 不動尊
(質) 勝負 五尺

化粧用品 ▲白粉、百美人 ▲香水、スミレ ▲化粧水、リート ▲歯磨、鼻印

▲石鹸、アイボリン ▲洗粉、樂屋 住宅 東京市淺草區橋場町二百五十八番地 吉田磯吉方

中村秋孝



中村秋孝

眞砂座客員本名 藝名に同じ

無 郷

趣 味 (小説其他) 滑稽もの 滑稽もの
(新誌) 時都 報 萬
(飲食) 魚飯、果物
(煙草) 朝日、日本酒

愛 衣 娛 (樂類) 盆裁 大島、結城
(玩) 木綿、草花、奇石
(拜) 天皇
(質) 沈着 五尺三寸

化粧用品 ▲白粉、みその ▲香水、色々 ▲化粧水、不用 ▲歯磨、鼻印

▲石鹸、ラクダ ▲洗粉、不用 住宅 東京市日本橋區濱町二丁目一番地

優は明治十九年十一月二十一日を以て淺草橋場に生る。その九歳の時本郷春木座に出動なし九藏、時藏の一座にて「一ノ谷嫩軍記」を演せし折遠見の熊谷を勤めしが初舞臺なり。十一歳の時小傳次、吉右衛門の小供芝居に加入し後吉右衛門、小傳次と分離後は吉右衛門につき新富淺草兩座に出動し、五所の五郎藏、大藏鳴瀬等を演じ好評を博せり爾來須臾く東都を離れ中仙道筋を興行し上州前橋にて開演中當時同地に在りし中村時藏にその達者なる手腕を認められ更めて師弟の契約をし其後一旦歸京なせしが間もなく大阪へ乗込み福圓、成雀、芝若等と一座し關西地方より北陸路を経て北海道に渡り至る處巡行せざるなく久振りにて歸京後は某有力家の勧めにより先般より新派に加入する事となれり。未だ日淺くして伎倆を示す餘地なれど有繁に充分練へし無類腕達者の事なれば其出世は一つに辛抱にありと申す。

優は明治二十年十月三河國一色町に生る。元小學校教員なりしが二十五歳の十一月當時同國熱田に興業中の今枝恒吉の一派に加入なし「伊勢物語」の狂言に主人公新吉を勤め好評を博し翌年十月大阪堀江座へ旗揚をなし第一回興行として三ヶ月お萬に探偵川口萬藏に扮し大阪中の大評判となりし以來毎月二回の興行に大入また大入、同座に座長たる事正に七ヶ年に及び中村秋孝の名知らぬもの無きに至り後梅田歌舞伎に立籠りしが間もなく解散後は朝日座成美團に合同し九州地方を汎く巡業し歸途神戸三の宮歌舞伎座に於て福井茂兵衛と合同なし三十六年初めて上京し開盛座中野一座に加入し翌月宮戸座に正劇を興行せしが一回限り大阪堀江座に迎へられ三ヶ月間興行の上更に上京なし常盤座眞砂座に出動しまた河合と共に朝日座へ乗込み其後三度北上京し眞砂座伊井一派に加はり以來東京俳優となる。

村 田 高 一



村田高一

本郷座出勤本名 藝名に同じ

趣味 (小説其他) 夏目先生 中野実 芥川龍之介 志 色 花 川 野 矢 草 物 物 聞 誌 フライ コーヒー カツレツ 勿論吸ひません

(愛粧用品) 化粧水、不用 香水、不用

身氣崇愛衣娛 (類) 旅行 和服 又洋服 尺八 オリン 先報 優柔 丈質 拜玩 四尺八寸

む の 部

優は新派劇壇の泰斗村田正雄丈の甥に當り明治二十六年三月の出生なり。四十年五月伯父に伴はれ北海道に遊び札幌大黒座に於て初舞臺として喜劇「子はかすがひ」に子役金太郎を勤め同座二の替り狂言「子煩悩」に大河内信彌に扮し更に同年六月小樽大黒座に乘込み「夫さため」の子役平吉を演じ好評を博し歸京後は伯父村田正雄の嚴格なる監督の許に新富座また本郷座に出勤し舞臺の研究の傍ら神田錦町正則英語學校へ入學し専心英語を學びつゝあり兎に角近來新派劇界に一人にても年少者の増加を見るは嬉ばしき現象なり。未だ見るべきものなけれど追々舞臺数を踏に從ひ茲數年を経たらんには通れ青年俳優となるべく必ずやこれ等青年俳優が二十臺前後の有志を集め、例へば市村座の青年劇の如く、新派青年團の旗上げを見る事遠き未來には非ざるべし。

▲石鹼、アイボレ 住宅 東京日本橋區堀越町二丁目十五番地村田又彦方 電話浪花二千六百六十番

中 島 常 行 君



中島常行

新富座出勤本名 藝名に同じ

晴 洲

「節目の立たぬ處や三十三歳」

趣味 (小説其他) 紅葉派、浪六 薔報、歌舞伎 朝日、國民 洋食蒲燒 日本酒二三合 舶來もの

(愛粧用品) 化粧水、みその 香水、金鶴

身氣崇愛衣娛 (類) 藝談聞く事 諸絲の類 色々 神佛 溫和 五尺三寸

丈質 拜玩 化粧水、レット 齒 磨、バラ

當時老旦に扮して一寸並ぶものなき優は明治八年二月越中六番町に生れ父は越中區長代理迄勤めし人、不幸にも幼少の頃其の父を失ひ、母の手一つに愛育られ、親戚の勸めにより札幌農學校へ入學すべく同地へ向け出發せしは僅か十五歳の時に於て十七歳迄では致し勉強せしかば元來母思の優の事とて此二年間一日の如く母の事を案じ煩ひし結果は幸か不幸か退學して歸京し終りぬ。時恰も川上晋次郎滿都の人氣を集め淺草座に開演中優は心切りに動き、遂に清元おえふ(延壽太夫の妻にて優の伯母に當る)を通じ川上の門下となりしが日清戰爭の爲め一時廢業し二十九年更めて武智元良一座に加はり名古屋に於て興行中川上の目鏡にて森三之助と共に破格に拔擢せられ直ちに川上座甲部に編入され其後淺草常盤座奨勵會に加入し同座焼失後は本郷新富座に出勤し充分に其の特色を見認められたり。

▲石鹼、アイボレ 住宅 東京市淺草區北東仲町一番地

む 又 部

東京俳優組合評議員 本名 村田 又彦

雅 泉

君 雄 正 田 村



村田正雄

趣 味 (小説其他) 漱石、紅葉派、大根、切抜通信、同、椎茸、上等の茶、羅漢草、エジプト

愛 衣 娛 (類樂) 旅行、大号、趣味なもの、書断骨董、不動

化粧用品 (愛粧品) 白粉、みその香水、舶来品

歯 化粧水、レイト、磨、オベラ

身 氣 崇 愛 衣 娛 (類樂) 旅行、大号、趣味なもの、書断骨董、不動

丈 質 拜 玩 類 樂 五尺三寸八分

齒 化粧水、レイト、磨、オベラ

優は明治四年二月四日を以て芝罘正堂に生る。父を村田保三と呼び舊田安家の藩士にして優はその五男なり。夙に實業界に飛躍せんとして横濱商業學校を卒へたりしが二十四歳の時初めて劇界に身を投じ有ゆる辛苦悪戦の結果は群を抜き今は既に斯界有数の大家とせらる。此間逸語奇譚頗る多けれども、今敢てこれを説す、唯才氣に由つて人氣を得る等の野心は乏しけれど極めて優婉閑雅の人、財を得れば宜しく散じ、閑暇あれば一竿を携へ小艇に棹さして品海に漁し或は脚絆草鞋に身を堅め山又山を跋涉なすを以て無上の快樂となすなり。然れどもその藝術の多方面にして恐らく何れの如くも向かざるなく、向いて而して其の伎神に入らざるはなし。蓋し現今俳優社會のオーストリチーと云ふも必ずや証言に非ざるなり。妻女竹子は明治十八年の出生にて三十年中合番せしもの、外にたつ子とて養女あり。

▲石鹸、舶来もの

▲洗面、不用

住宅 (東京市日本橋區錦町二丁目十五番地) 電話浪花(二)千六百六十番

君 朝 重 田 梅



梅田重朝

本名 寺島 重輔

趣 味 (小説其他) 浜六、奴之助、文藝、淺草新聞、油漬もの、日本酒、吸ばす

愛 衣 娛 (類樂) 釣り、地味、小鳥

化粧用品 (愛粧品) 白粉、百美人、香水、色々

歯 化粧水、不用、磨、ダイヤモンド

身 氣 崇 愛 衣 娛 (類樂) 釣り、地味、小鳥

丈 質 拜 玩 類 樂 尺五三寸

齒 化粧水、不用、磨、ダイヤモンド

優は明治十四年二月十日を以て淺草黒船町に生れし生粹の江戸兒なり其の十九歳にして川上一座の柴田善太郎に師事し多年波瀾重疊の間に處して飽く迄で不屈不撓、先年開盛座中野信近一座に加入し今や同座の重鎮たり。其得意とする所は老役なるべく儂輩の徒らに坊當りを巧み表情を誇張するに反し、極めて眞面目の舞臺は嬉しく、日常釣を好み、小鳥を愛すると云へばその性質の一端を知るべく兎に角年配も若く藝も達者なればその前途や多望なりと謂ふべし。妻を松子(明治十九年生)と呼び四十年一月中結婚せり。

▲石鹸、地球

▲洗面、樂屋

住宅 (東京市淺草區藤下町二十七番地)

部

東京座出勤本名 上原 經二

花亭

「花亭と號し小山正太郎の不同社で水彩畫を學んで居る」

上原桂四郎君



上原桂四郎

- 趣味 (小説其他) 小波、物語、文藝、畫報
- (飲食新) 都、おん豆、刺身
- (飲物) 冷水
- (煙草) 救急
- (愛用化粧品) 白粉、香水、金鷄
- (娛樂) バイオリン、飛白
- (愛用) 小供のおもちや
- (崇愛) 不動尊
- (氣身) 皮肉
- (質丈) 五尺三寸
- (化粧水、磨) レート、ライオン

優は明治二十一年二月二十六日府下南千住に生れたので場末ながらパリくの、とは言へぬが兎に角江戸兒たる事正に相違なし藝術的趣味は先天的に備つて居たと見え幼少の頃からお茶番に巧みであつたとか、三十六年即ち優の十六歳の十一月それ迄在學して居た錦城中學を二年で退學し直ちに大阪朝日座に出勤して居た秋月桂太郎の門を叩き、須臾大阪の舞臺を踏で勉強中三十八年の春川上一座へ加入して同一座と共に上京し明治座で「パトリック」、「モンナワナ」に出演し其後一行と關西地方から九州迄で巡業し川上が洋行に付き同一座解散されたので再び師秋月の元へ戻り四十二年五月秋月が東京座へ乗込みと同時に東京の舞臺に現はると事となつた。兎に角滅多になき好男子で柄もあるから勉強次第屹度伊井、秋月等の後嗣者が出來上るであらう。秘し藝としては「清元」の夕立甘いもの。

▲石鹼、地球
▲洗粉、クラフ

住宅 東京府下南千住町五十九番地貸座敷 (原田)海老屋内

部

真砂座出勤本名 岡部 慎志



岡部慎志

- 趣味 (小説其他) 讀ませ、奮報、歌舞伎
- (飲食新) 都、國民
- (飲物) 淡白なもの
- (煙草) 日本酒、大和
- (愛用化粧品) 白粉、香水、赤箱
- (娛樂) 犬と遊ぶ事
- (愛用) 好みなし
- (崇愛) 古器物
- (氣身) 不動尊
- (質丈) 勝氣
- (化粧水、磨) レート、ライオン

優は明治十四年二月十一日を以て埼玉縣松山に生れた。夙に法學研究の爲め上京し二十九年中淺草座にて柴田善太郎一座を見物せしが動機となり遂に柴田に絶つて其門下となり見習ふ中自ら一座の長たらんものをも誇勃の野心制すべくもあらず三十一年師柴田に計りに幸ひその許しを得白龍隊なる一座を組織し東北地方に至る所巡業し三十四年一度師柴田の許へ戻りしが時恰も師柴田是非なき事情より一座を退きたれば優は其後を引受け立志團と名告げ興行中同年十二月徴兵に應じて砲兵第一聯隊に入營し三十七年五月出征の命を受け常磐丸に乘組み宇品港を解纜せり、然るに伏見宮殿下も御乗船にて優は賢くも大將宮殿下の御前にて新派劇の筋書を講演せり三十九年二月十一日芽目度凱旋し戦功により年金を賜り除隊後横濱座に出演中師柴田に向へられ國華座へ出勤なし今は真砂座にて師に従ひ將來を期せり。

▲石鹼、アイボロ
▲洗粉、クラフ

住宅 東京市京橋區日吉町二十番地方の家 (電話新橋四千八百九十九番)

倭 輝 久 雄 君

趣 味

小説其他 何んに限らず
雑記 日本及日本人
新新聞 政治新聞
飲食 何んでも御座れ
煙草 日本酒
下等

(愛粧用品)

▲白粉、色々
▲香水、安物

娯 樂 類

微塵中小説に戯
る
目下餘裕なし
硬直 人格正哉
五尺二寸

▲化粧水、使用せず
▲歯磨、ライオン



東京座出動本名 津村 弘 造

雅 號 松 城

部

優は明治四年九月九日山陰道は鳥取の城下に産聲を上げ、幼にして文才あり曾ッて松城と號し地方新聞記者たりしが二十九年即ち二十六歳の折斷然筆を捨て當時名古屋寶生座に在りし喜多村綠郎一座に加入し大島旅團長に扮せしが、其俳優としての初めなり。其後一座を組織し四方に巡業せしかど不幸にも失敗に終りしかば大阪朝日座の成美團に出動なし後更めて高田に師事することとなり。三十四年川上音次郎第二回の洋行に會し直ちに走せてそが一行に加はり歐米に向ひたり。然るに英國倫敦に至り川上と協議上兩三名と共にその手より離れ無一文にて北は丁抹迄で或は船夫となり或は工夫となり言はれぬ辛酸を嘗め盡し、漸くグラスゴーより歸朝し得たるは實に三十五年十二月の事なり。歸朝後は洋行返りとして關西地方を巡演せしが間もなく師高田の元へ戻り爾來高田に従ひ今日に至れり。

▲石鹼、アイホレ
▲洗粉、樂屋

住宅 東京市本所區向島須崎町二百十二番地

山 田 春 雄 君

趣 味

小説其他 水陸の短編
雑記 早稲田文學
新新聞 時事
飲食 魚類
煙草 少量の日本酒
草物 敷島

(愛粧用品)

▲白粉、みその
▲香水、スミレ

娯 樂 類

散步と釣
木箱
古雑誌
先賢
温篤
五尺

▲化粧水、リート
▲歯磨、ダイヤモンド



雅 號 東 洲

本郷座出動本名 重 富 一 三

部

優は明治十三年四月兩國藥研堀に生れ、一度び北多摩の小學授業生を勤務せしが其十八歳の時決する處あり奥州に遊び座光寺天郷故野崎三郎等に随ひ至る所巡演なし中途轉じて有ゆる困難と戦ひ青森地方より北海道に渡り歸途志村一座に加はり同一座の花形として更に四方を興業し三十四年久し振にて歸京せり爾來數年間市内各座に出動し花形役者として種々大役を勤め大人氣をとりし事三三にして止まらずその名汎く好劇家に知られたり。然るに優は其後大いに感ずる所あり三十九年本郷座へ出動以來は先輩の間に揉れ如何なる端役にも甘じて専ら技藝の研究に怠りなし。女形として顔もよく藝も達者、唯其小柄なるを怨むのみ娘形として申分なけれど年増を勤るには人知ぬ氣苦勞やあるなるべし。近來本郷座にて勤めし重なる役々は左の如し「又意外」の時兒島の缺勤に辰子を代り、「大慶」の琴三升春吉、「想夫憐」の濱子等なり。

▲石鹼、色々
▲洗粉、メリー

住宅 東京市本郷區斐織町九番地

や
久
部

眞砂座出勤本名 山崎長吉

神 號
山

山崎長之輔君



山崎長之輔

趣味

(小説其他) 鏡花、紅葉、
(新誌) 薔報、歌舞伎等
(飲食) 油揚げ、
(飲煙) ビース、サイダ
(草物) 大和

(愛用化粧品) 白粉、みその香水、バイオレット

(樂類) 芝居見物、大島飛白、小島、
(玩類) なし、
(拜類) 熱心、
(質類) 五尺一寸

優は明治十年十二月十八日の出生なり。その二十二歳の時市村座に於て伊井山口合同演劇の「笠森團子」の狂言に織女を勤めしに初り今日迄で幾多の困難と戦ひ常に撓まず屈せず猛進せり此間の消息を詳かにせんか到底一頁の能する處に非ず唯其主なるものを掲ぐれば△開盛座に四年間勤績△伊井と仙臺行△藤澤と越後行川上座に加入△森操と一座を組織して北海道各地巡業△前島光美と根津榮座に長光團の旗を翻す△三十九年十月より柳盛座松隆會主任となる。大略右の如くにして四十年七月より眞砂座へ迎へられ今やその人氣偉大なるものあり。而して其向上の意氣に富み藝術に熱心なる所より、夙に小伊井と稱せらる。これ一面に優の一舉一動、言々句句伊井蓉峰に髣髴たるものあればなり。唯惜らくは何日迄も伊井の糟粕を嘗めるは遺憾なりとするものあれどこれ元來皮相の見解たり、必ずやそれ以外に或るものを認ざるを得ざらん。

▲石鹸、色々 住宅 東京市下谷區二長町五十番地 洗粉、立田 (電話下谷) 一千〇四十六番 島田取次

前島光美君



前島光美

開盛座出勤本名 前島光三郎

趣味

(小説其他) 浪六、
(新誌) 薔報、
(飲食) 都、
(飲煙) 刺身、淡白なの、
(草物) 日本酒、
(草物) 敷しま

(愛用化粧品) 白粉、色々、香水、色々

(樂類) 登山、
(玩類) 地味なもの、
(拜類) 植木、
(質類) 先輩、
(質類) 淡白、
(質類) 五尺四寸二分

よ
部

優は明治八年九月七日を以て本所小泉町に生る。父は田中藤兵衛とて運送業を営み優はその長男なり。二十七年即ち優の二十歳の時新派大將株水野好美の門弟となり主として常磐、宮戸、國華、壽、柳盛、開盛、榮の諸座に出勤し田舎廻りは多くせず後年開盛座中野信近一座に加入し今其の元老株たり。曾つて山崎長之輔と一座を組織し長光團と名乗り根津榮座に立籠りしが不幸にして同座焼失に會せし爲め已む無く元の古巣に歸る。性質隆張として勤しも嫌味なし。その三絃の道に通達する如きは誠に珍とすべきなり。

▲石鹸、アイボレ 住宅 東京市淺草區千束町二丁目百廿三番地 洗粉、樂屋

ま / 部

新富座出勤本名 丸田卯之助

丸山操君



趣味 (小説其他) 紅葉、春葉、歌舞伎、新小説、朝日、カレ、天ぶら、ビフテキ、草物、朝日、草物、朝日

愛用化粧品 (白粉、香水、ムスク)

娯楽 (藝妓、和服、不動産、植木、類、玩、拜、質、丈、五尺)

愛用化粧品 (化粧水、二八水、歯磨、オメラ)

伊井門下の古顔として、腕達者として將又愛嬌ものとして其名汎く好劇家に知られたる優は明治十二年二月五日神田大和町にオギヤアノの産聲を揚げたる生へ抜き江戶兒なり。幼けなき頃より頗る非常に芝居を好み遂に耐へ切す家を飛出し伊井蓉峰の門下生となり横濱羽衣座に於て「松の操美人の生理」の狂言の折初めて舞臺に出で目をくらませしが追々舞臺を踏に従ひ度胸も定り女形を専心勉強したり。然に翌年伊井一座を脱し公園常磐座の水野奨勵會に加入し時來り時去り早も四星霜を経て伊井師が明治座に於て「藤原多助」を演じ滿都を陰らせし當時復座し爾來その技愈々研いて其名いよ／＼知られ、搦て加へて師の庇護あり以て今日の地位に至る。妻女も子(十五年生)とは四十年十二月中結婚し、昨年天長節に芽出度も一女を擧げはつと名づけたり。

▲石鹼、ラグダ
▲洗粉、メリー

住宅 東京市淺草區榮久町二十九番地

ま / 部

松葉菊雄君



趣味 (小説其他) 院本類、鏡花物、文藝、畫報、カキフライ、日本酒五合位は、草物、朝日、草物、朝日

愛用化粧品 (白粉、香水、ミソ、色々)

娯楽 (寄席、お召、格子、類、玩、拜、質、丈、五尺一寸五分)

愛用化粧品 (化粧水、レント、齒磨、象印)

本郷座出勤本名 白井大太郎

松葉菊雄

優は明治二十二年十二月十四日日本橋住吉町に生れ流石粹な育ち丈に藝事は一通り以上の上達、中でもトコトンは十五の時から花柳おするさんにつき其他清元長唄、義太夫なども夫々専門家について學んだので何れも堪能であるとの事。師匠の河合が優のボーソした藝風が頼もしいと吾人に語られた事があつたが兎に角若くて綺麗ときて居るから前途頗る有望と言ざるを得ない。三十七年九月河合武雄の門下となり同年の十二月ハイカラ 忠臣蔵の狂言に六段目の子守に出たのが初舞臺、其後一寸々服部谷川に頼まれ彼處此處の芝居へ出勤したが四十年五月服部喜劇一座で演伎座を開けた時一番目婚撰みの令嬢に扮し作者の益田太郎子から褒られた事もあつた。同年伊井河合々同劇で伊井に引立られ女夫波の楠山夫人を初め二三の主人公役を仰せ付かつた。以來師河合に随ひ懸命に藝の上達を勵んで居る。

▲石鹼、アイボレ
▲洗粉、樂屋

住宅 東京市日本橋區住吉町九番地

まの部

本郷座出動本名 藝名に同じ

雅號 新緑

松本要次郎



松本要次郎

趣味 (小説其他) 好嫌なし

(雜誌) 文藝 都 萬朝 天ぶら サイダ 喫ます

(愛用化粧品) ▲白粉、百美人 ▲香水、色々

(娯樂) 見世物見物

(衣類) 木綿或は鉛仙

(愛用化粧品) ▲化粧水、ローヤル水 ▲歯磨、象印

優は明治十二年二月五日の出生にてチャキの江戸兒たる事を俟ず、明治三十年二月淺草座(今の國華座)に在し川上音次郎一座に加入し一番目「堀川夜討」二番目「臺灣鬼退治」の場にて土人の總出に仕出を勤めしが皮切にて其後市村座の伊井山口合同演劇分離して山口が單獨濱濱羽衣座に興行中同一派に加はり東海道筋より神戸迄で巡業し同地に於て山口と別れ川上洋行告別演劇に招かれ同地相生座に出勤せしは三十二年の春の事なり。それより直ちに歸京なし伊井蓉峰一座にて暫く勤績せしが三十六年河合、馬十、源之助、訥升、成太郎等の新舊合同一座が眞砂座に於て「寒牡丹」を演せし時河合に迎へられ兩三回同座に出勤後河合につき大阪朝日座へ乗込み幾もなく高田河合と共に歸京後は本郷座へ出勤更に四十年伊井河合同劇に新富座へ出勤し以來河合に師事して今日に及びたり。

▲石鹼、玉石鹼 住宅 東京市淺草區千束町二丁目百七十九番

深澤恒造



深澤

東京新派俳優組合評議員 本名 深澤恒造

趣味 (小説其他) 何んぞ限らず

(雜誌) 歌無夜他色々 (新誌) 淡白なるもの (飲食) 好む (煙草) 好む アイナ

(愛用化粧品) ▲白粉、みその ▲香水、ダゲツク

(娯樂) 義太夫、馬、玉突

(衣類) 結城の類 (愛用化粧品) ▲化粧水、不用 ▲歯磨、オペラ

ふの部

現代新派一流俳優の通弊とも謂つべきは藝風の單調に失するの傾きあるにあり。此點に於て優は確かに眞伎倆を有する優と謂ふべし。恨らくはその身體肥滿に過ぎたり然れども其肥滿の身體や、聽て喜劇役者に缺く可からざる用具となりぬ。自己の自然を巧みに利用し、滿を持して放さず飽迄でも眞面に演て行く處、同輩の故意に滑稽を狙ひ、場當りを巧み表情を誇張するなど大矛盾の附纏に反し雲泥の差あり。蓋し喜劇役者として天下一品也とは何人も許す所、追々喜劇の世に歓迎せらるゝ今日優が將來の活躍こそ見物なれ。優は明治七年横濱青木町に生る父は元九州五島の藩士にして目下は土木請負業を営み神奈川切の資産家なり優はその長子にて嘗て横濱商業學校を卒業し劇界に身を投じたりしは二十四五歳の頃也木村周平一座に入初め岡本清と稱せしが後本名に改む。妻女を歌子(十四年生)と呼ぶ。

▲石鹼、玉石鹼 住宅 東京市芝區愛宕町四丁目一番地

ふ
ノ
部

君 吾 金 田 藤



藤田金五郎

本名 太田金五郎

味 趣

- (小説其他) 柳浪、鏡花
- (雑誌) 太陽、毒報、文藝
- (新聞) 時事、都
- (食) 肉類
- (飲) 日本酒
- (煙) 福壽草

娛 衣 愛 崇 氣 身

- (樂) 讀書
- (類) 洋服
- (玩) 繪端書
- (拜) 大神宮
- (質) 溫和
- (丈) 五尺二寸三分

- ▲▲化粧水、四季の花
- ▲齒磨、ライオン

優は明治十一年九月十二日(旧暦八月二十日)に生る。父は元町三丁目三番地、母は新大塚。年三月即ち二十歳の折りに、後藤半蔵(高橋半蔵)に出勤せしが皮切りにて爾來名(高橋半蔵)も上達し其名も漸く人の知る所となれり。高橋半蔵にて伊井峯茶、村田正雄等の一座にて今賣出(高橋半蔵)操と並び稱せられしが同座の「サンフランシスコ」の狂言以後(本郷座の伯爵夫人の時も見えたり)其影を東京の舞臺に失ひ、好劇家を失望せしめたるが今や忽然として夙に九州に其人ありと聞えし後藤良介の組織せる。いろは會の立女旦として國華座に現はれ久振りにてその花の如き容姿を見るを得たり。其後如何なる程度迄で技藝の進歩せしやは未だ知る由もなければ、望らくは東都に長く止まりその長所を發揮されん事を。

- ▲▲石鹼、地球
- ▲洗粉、樂屋

住宅 東京市神田區金澤町十四番地

君 郎 二 淺 澤 藤



淺澤清二郎

東京新派俳優組合頭取 本名 藝名に同じ

雅 紫 水

味 趣

- (小説其他) 何んに限らず
- (雑誌) 同
- (新聞) 大抵見る
- (食) 油漬もの
- (飲) 日本酒少量
- (煙) お稽草

娛 衣 愛 崇 氣 身

- (樂) 讀書
- (類) お召
- (玩) 犬と小供
- (拜) なし
- (質) 穩健
- (丈) 五尺三寸

- ▲▲化粧水、みその
- ▲香水、舶來品
- ▲▲化粧水、レート
- ▲齒磨、オベラ

ふ
ノ
部

現代新派俳優中統領株と云へば曰く高田曰く伊井曰く藤澤と指を屈せざるべからず。而して依然此間に先輩として推重せらるる優は慶應二年四月二十五日を以て京都に生る。七歳の時父を失ひ母の手一つに育てられ夙に漢學を學び十四歳にして上京し吳服問屋の小僧に住込み十九歳にして歸郷し辯護士の書生となり更に轉じて操觚者となり其俳優として立ちは二十三歳の頃川上晋次郎と共に壯士芝居の一團を組織し初めて泉州堺の卯の日座に旗上せしに初まり今日迄で斯道の革新を唱へ勢なからず吾新劇壇の發展に補益せり。優の得意とする所は二枚目ならんも却つて變つた役に成功する事あり、吾人の私に思ふ所によれば優は俳優としてよりも寧ろ事業家として其長所を認めらる。現に組合の獨立を謀り俳優養成所を起すが如き具體的證明なり妻女を二つ子と呼び、珪太郎はその養子なり。

- ▲▲石鹼、舶來もの
- ▲洗粉、不用

住宅 東京市本郷區湯島六丁目十六番地

こ 部

本郷座出動本名 五味國太郎

『子雀の羽ばたきあれどあせれども』
大名廻昇進味句

五味國太郎



五味國太郎

趣 味

- (小説其他) 何に依らず好む
- (雑誌) 探險もの
- (新聞) 都、毎電、報、時
- (飲食) 洋食
- (煙草) 茶少量のビール
- (愛用品) 何と定めず
- (化粧用品) 白粉、みその香水、金鶏
- (娯楽) 釣、藝談を聞く
- (衣服) 和服何んでも
- (愛玩) 樂器
- (崇拝) 金光教
- (氣身) 熱心
- (丈質) 五尺四寸二分
- (化粧用品) 白粉、みその香水、金鶏
- (齒磨) 歯、オベラ

近來素晴く伎倆を上げ何役に扮しても骨て甚き不評を招かずいよ、其手腕の涵養に努めつゝある優は新派劇壇の頭領株高田實の高弟なり。生地は山梨縣甲府にして明治八年一月二日を以て呱呱の産聲を揚たりき。夫れ甲斐の地や山嶽四周の間にあり古來剛直の人士を出すを以て鳴る。然り而して優もまた其一人たるを失はざるなり。明治二十四年梅雨過ぎて暑氣今將來たらんとするの候、即ち十八歳の初夏、静岡縣に遊び武智元良一座に加はり。暫らく界限を巡業せる中一座を脱して大阪朝日座に轉じ更めて高田實の門下となり百難を排して研鑽に研鑽を重ねたりしかばその名俄に高まり後年師高田と上京し本郷座へ乗込み進境又進境を認められ遂に四十年五月「松風村雨」の狂言に北浦乙哉に扮し大看板に昇せられたり。妻女を夏子(九年生)と呼び國枝(三十八年生)と云ふ一女あり。

▲石鹼、アイボレ
▲洗粉、オノール
住宅 東京市淺草區猿蓑町一丁目三十三番地

安部信夫

開盛座出動本名 安部 寛

雅 號
花の舎かほる

寫眞は再版の
砌り挿入すべし

趣 味

- (小説其他) 涙六
- (雑誌) 文藝
- (新聞) 時事
- (飲食) 油漬もの
- (煙草) 日本酒
- (愛用品) 吸島
- (化粧用品) 白粉、唐の土香水、ムスク
- (娯樂) 釣り
- (衣服) お召
- (愛玩) 猫
- (崇拝) なし
- (氣身) 内氣
- (丈質) 五尺二寸
- (化粧用品) 化粧水、ローヤル水
- (齒磨) 齒、ライオン

あ 部

優は明治六年三月二十三日を以て日本橋樂研堀に生る。父を安部俊映と呼び舊幕臣なり。優はその長男にて府立第一中學二年迄で通學せしが思ふ仔細あり退學しその二十二歳の九月當時淺草座に開演中の山口定雄一座に加入しピストル強盜清水定吉の狂言の時初めて舞臺を勤めたり。其後同一座を脱し角藤定憲一座に加はり女形の研究に勉めたり。當時同座にて河合武雄、故人兒島文衛等と同席にありしも、爾來多く地方を巡回し發展の期を失したるは氣の毒なり。三十九年十月開盛座中野一座に出勤し今やその立旦としてその名界限に高く蕪風は樂天的?にして、矢鱈に場當りを好まず誠に淡泊なる舞臺なり。妻女をこみと云ひ明治十一年生なり。

▲石鹼、ホルマリン
▲洗粉、名匠
住宅 東京市淺草區島越町三番地

あし部

東京俳優組合評議員、本名 永田 秀雄

半香

秋月桂太郎



秋月桂太郎

- 趣 (小説其他) 何んぞ限らず
- 味 (飲食新) 大抵見る
- (飲) 同
- (煙) 淡白もの
- (草) 湯茶
- (愛用品) 白粉、みその
- 香水、柏葉もの
- (化粧水、レイト)
- 歯磨、オスラ
- (娛樂) 盆戯、釣
- (衣類) お召
- (愛玩) 支那の器物
- (崇拝) 日蓮
- (氣質) 濃厚篤實
- (身丈) 五尺三寸六分

優は明治四年二月十二日を以て名古屋に生る。父は尾張藩の寶藏院流槍術の師範を勤めし人、二十六年一月始めて横濱馬座に於て福井茂兵衛主任の一座に加入し後東京吾妻座新富座を打ち名古屋、桑名、京都を巡業し二十七年大阪辨天座に乘込みし以來大阪を中心として夙に朝日座に根據をかまへ常に不屈不撓關西新派劇壇の基礎を確立し遂に今日の如く盛大ならしめたるはこの優の努力與つて力ありと謂ふべし。回顧すれば優が東都を去りしは既に十有餘年の昔なるが四十一年五月高田一派に迎へられ東京座へ乘込み「月魄」劇に正木貞雄を扮せし後の消息は世人の多く詳かにする所ならん。性高潔にして色を漁らず、小閑あれば浪穩やかに水清く翠綠滴るが如き大自然の風致を眺めて悠悠自適一竿を垂れて潑刺たる鮮魚の風味を掬するを以て唯一の快樂となすと、妻女を花子(十六年生)と呼ぶ。

▲石鹸、色
▲洗粉、クランプ
住宅 東京市神田區駿河臺東紅梅町二番地
電話本局(三)百一十七番

あし部

東京座出勤本名 功刀 泉二郎

雅葉

秋山十郎



秋山十郎

- 趣 (小説其他) 鏡花
- 味 (飲食新) 演劇、文藝
- (飲) 大飯毎、朝日部
- (煙) 牛、雙
- (草) 日本酒二升
- (愛用品) 白粉、みその
- 香水、金鶴
- (化粧水、レイト)
- 歯磨、オヘリ
- (娛樂) 義大夫
- (衣類) お召
- (愛玩) ハイカラの持物
- (崇拝) 金比羅
- (氣質) 活達
- (身丈) 五尺一寸八分

優は嶺南に育ち、父を榮植と云ひ和歌山藩代々の大島流槍術の師範役を勤めし家柄、優は其次男と生れ、嘗て同地中學三年迄で在學し一度び東都に笈を負ひしが徴兵適齡に歸省し、心氣一轉貿易商を志し神戸の或る商會に勤め幾何もなく獨立營業を開始し兎に角立派な青年實業家となり濟し三年間の努力に相應の蓄財も出來ヤレ安心と思ふ間もなく先天的の演藝趣味は體物として發し金銀名譽を土芥と觀じ遂に三十四年三月を以て斯界の人となり神戸大黒座に出勤し松平家騷動に辯護士を勤めしがその皮切りなり。後大阪天満座の喜多村木村(猛)合同劇に加はり三十七年更めて秋月門下となり翌年四月一座を組織し朝鮮各所に乘込み歸途鎮南浦日光座の舞臺開きを勤め歸朝後は常に秋月と一座し四十一年五月初めて東京の舞臺に現れたり。其特技は敵役にして殊に立廻りは長技中の長技。明治九年六月十日の生れなり。

▲石鹸、地球
▲洗粉、クランプ
住宅 東京市神田區三崎町三丁目一番地吾妻三十二番地

部

新富座 出動本名 藝名に同じ

雅號 晚翠

君策錚東埼



埼東錚策君

趣味 (小説其他)

- 遊柿齋書
- 太陽、中央公論
- 萬朝
- 淡白もの
- 日本酒
- 何んでも宜し

愛用 (化粧品)

- 白粉、みその
- 香水、色々

愛用 (化粧品)

- 白粉、みその
- 香水、色々

愛用 (化粧品)

- 白粉、みその
- 香水、色々

愛用 (化粧品)

- 白粉、みその
- 香水、色々

愛用 (化粧品)

- 白粉、みその
- 香水、色々

愛用 (化粧品)

- 白粉、みその
- 香水、色々

愛用 (化粧品)

- 白粉、みその
- 香水、色々

愛用 (化粧品)

- 白粉、みその
- 香水、色々

愛用 (化粧品)

- 白粉、みその
- 香水、色々

愛用 (化粧品)

- 白粉、みその
- 香水、色々

愛用 (化粧品)

- 白粉、みその
- 香水、色々

愛用 (化粧品)

- 白粉、みその
- 香水、色々

愛用 (化粧品)

- 白粉、みその
- 香水、色々

愛用 (化粧品)

- 白粉、みその
- 香水、色々

優は明治八年四月七日芝伊皿子に生る。十三歳にして築地中學に入り後麻布 筈町に在りし高等普通學校に轉校し兼ねて月山學舎といふに英漢を専習し十六歳の折陸軍士官を志し成城學校に入學せしが十八歳近視眼を患ひ退學の已むを得ざるに至り夫れより貿易商たらんと欲し横濱ストロム商會に見習として住込みしが志しを得ざりしかば中途にして退き爾來快々として日を送る中フト俳優たらんとし親戚故舊の異議を排し二十歳の春福井茂兵衛一座に加入し、廿七年即ち市村座に於て「明治天一坊」に探偵を勤しが其嚆矢なり。後名古屋神戶等を巡業し廿九年大阪成美團に入卅二年七月高田實等と共に北國筋を汎く巡演し三十六年一月京都静間小次郎一派へ加はり四十年十二月村田正雄に伴はれ十三年振りにて歸京なし新富座一月狂言の「寶息子」に月島文字雄に扮せし以來伊井、喜多村、村田一座の甲部に編入せられたり。

▲石鹼、ワグマ
▲洗粉、オノトル
住宅 東京市麹町區下二番町十一番地

君經川佐



佐川經

東京座出動本名 佐川經

趣味 (小説其他)

- 退六
- 歌無後、文藝
- 都、時事
- 海老、フイ
- 和洋酒
- 敷島

愛用 (化粧品)

- 白粉、みその
- 香水、色々

愛用 (化粧品)

- 白粉、みその
- 香水、色々

愛用 (化粧品)

- 白粉、みその
- 香水、色々

愛用 (化粧品)

- 白粉、みその
- 香水、色々

愛用 (化粧品)

- 白粉、みその
- 香水、色々

愛用 (化粧品)

- 白粉、みその
- 香水、色々

愛用 (化粧品)

- 白粉、みその
- 香水、色々

愛用 (化粧品)

- 白粉、みその
- 香水、色々

愛用 (化粧品)

- 白粉、みその
- 香水、色々

愛用 (化粧品)

- 白粉、みその
- 香水、色々

愛用 (化粧品)

- 白粉、みその
- 香水、色々

愛用 (化粧品)

- 白粉、みその
- 香水、色々

愛用 (化粧品)

- 白粉、みその
- 香水、色々

愛用 (化粧品)

- 白粉、みその
- 香水、色々

愛用 (化粧品)

- 白粉、みその
- 香水、色々

優は江東に育ち、明治十七年三月二十一日の出生である。蛇は寸にして人を呑むの氣ありとやら、幼少の時から遊藝が至つて好きでトウ／＼十五歳の春、當時賣出しの助高屋小傳次の弟子となり澤村傳六と名乗つて淺草座へ出動したが、好きこそものは上手なりけり、壁に洩す何んでもかんでも器用にやつて退る處から重く用られる様に成つたが好事魔多し翌年師の小傳次が亡つたので其後は訥子や訥升の一座で一生涯懸命に勉強した。十九歳の時故人の尾上菊松と一座を組み本所壽座へ旗幟を翻した處が大分評判がよく大入又大入で青年松助と迄で衰られた。時恰も徵兵に合格し次いで日露戰爭に出征し多年軍隊生活を送つたので非常に技藝の退歩を來し幾ら車輪でやつても肝腎な修業時を三四年も休で居のだからとても駄目と諦め殊に門閥と云大開門があるので、斷然新派俳優となり名を本佐川經として四十年七月から高田に師事する事になつた。

▲石鹼、ワグマ
▲洗粉、オノトル
住宅 東京市深川區宮川町三十一番地

部

川上貞貞



川上貞貞

本名 川上貞貞

味 趣 (小説其他) 演劇、歌舞伎、文藝、切抜通信、天ぶら、サイダ、禁煙

(愛粧用品) 白粉、みその香水、舶來

身 (氣崇愛衣娛) 犬洋服、不動、勝氣、四尺九寸

樂 (類玩拜質) 音樂、洋服、犬、不動、勝氣、四尺九寸

化粧水、歯磨、ライヤモンド

優は明治四年の出生なり。幼にして葎町の藝妓家濱田家に養はれ、奴と名乗り初めて今晩アリアーとお酌の袖を翻せし頃より才女の譽れ高く二十三年即ち優の二十歳の時一代の快男子川上音次郎と合番の式を挙げたり。三十二年四月良人音次郎に伴はれ歐米各國巡業に際し播州姫路に於て替古芝居として「道成寺」を踊りしがその俳優としての初舞臺なり渡米後初めて川上貞貞の名を用ひ有ゆる困難と戦ひ米、英、佛、白、埃、印、清等を興行し三十四年一月無事歸朝せり。歸朝後は明治座の「オセロ」に出演し更に同年佛、英、白、獨、瑞、伊、埃、露の諸國を汎く巡業し三十五年四月歸朝。爾來東京は勿論四方に巡演し四十年六月又々歐米を漫遊し昨年五月歸朝後は豫ての理想通り女優養成所を芝櫻田本郷町に設け一方新女優を集めて川上革新第二團にその座長となり各地を巡業せしは近頃の事なり。兎に角夫川上と共に其の名聲赫々たるは今更ら嗚々を要せざるなり。

住宅 東京市京橋區木挽町一丁目八番地

酒井信一



酒井信一

開盛座出動本名 酒井與一

味 趣 (小説其他) 演劇、歌舞伎、文藝、切抜通信、天ぶら、サイダ、禁煙

(愛粧用品) 白粉、みその香水、舶來

身 (氣崇愛衣娛) 犬洋服、不動、勝氣、四尺九寸

樂 (類玩拜質) 音樂、洋服、犬、不動、勝氣、四尺九寸

化粧水、歯磨、ライヤモンド

部

開盛座の花形役者として今や界限の人氣を一身に集めつゝある優は明治十六年二月二十八日の誕生で甲府市若松町の出生である。幼時大阪に遊び三十一年一月即ち十六歳の正月北の新地福井座の嵐佳笑の門弟となり暫く同座で女形の修業をして居たが、數年前四方に巡演の末上京して、當時山口定雄が市村座で「後藤」を演ずるに付き泉三郎女房高の谷に扮する役者がなかつたので優が附合ふ事になり兼ねて新派の役も一役引受けた處が無類の上出来であつた爲め、これがキツカケになつて新派俳優として舞臺に現れる事になつたのである。後眞砂座へ出動して永らく賣込み漸くその名を知られる様になつたが昨年九月以來更めて中野信近に師事することとなり同時に開盛座へ加入したのである。至極愛嬌のある綺麗な顔立で娘形年増、何れでも宜ろしい。妻女はお久と呼び十五年生である。

住宅 東京市日本橋區寶町二丁目十一番地

君 郎 太 東 井 櫻



櫻井東太郎

本郷座出勤本名 分田東太郎

味 趣 (小説其他) 歴史もの
 (雑誌) 色々
 (新開) 都、時事
 (飲食) 好なし
 (飲物) お茶
 (煙草) 敷島

娛 衣 愛 崇 氣 身
 (樂類) 陽氣に遊ぶ事
 (玩類) 何んでも
 (拜類) 佛像
 (質類) 庚申
 (丈類) 放駒
 五尺二寸

▲化粧用品 ▲白粉、百美人 ▲香水、ユースク ▲歯磨、ダイヤモンド

▲石絵、花玉 ▲洗粉、クラブ 住宅 東京市浅草區泉涌町二番地泉涌館

優は明治四年六月十三日を以て富山市總曲輪町分田家として有名なる料理店の一子と生れ二十四歳の時上京して明治法律學校へ入學し致々として勉學に餘念なかりしがその二十七歳の時當時市村座に於て伊佐水合同演劇に出演中の伊井蓉峯の門弟となり櫻井東太郎と改め「未來の臺灣」の狂言に日本兵士を勤のしが初舞臺なり。爾來約一年間伊井師の許に働き出て横濱兩國座に自から座長となり旗幟を上げしが不幸にして二回にて止み其後は同市馬座又淺草常磐座獎勵會に加入し更らに四ツ谷橋座原澤新一座に加はり幾もなく其主任となりしが三十八年伊井師が宮戸座に「江戸城開渡し」を演じ北海道へ巡業の際再び加入し以來伊井一派に出演せり。優の得意とする所は探偵にて特に立廻りに秀でたり。元來順に行けば今や大立物たるべき人ながら殘念なるは其國言葉何日迄も脱せず大いに進境を妨げたり。

君 郎 綠 村 多 喜



村多喜

東京新派俳優組合副頭取 本名 喜多村六郎
 新富座、本郷座出勤 雅 樹 又 俳 名 喜多村六郎
 『穢れた浮世の苦勞をすて』 二つ増させん星の敷
 (優の斯道に堪能なる事は人既に知る) (右は近作の情狀である)

味 趣 (小説其他) 鏡花
 (雑誌) 新潮、早文
 (新開) 國民
 (飲食) 能て茶漬
 (飲物) サイダー
 (煙草) マニラ細葉巻

娛 衣 愛 崇 氣 身
 (樂類) 遊ばずなんでも
 (玩類) 好みなし
 (拜類) 犬
 (質類) 大日如來
 (丈類) 擬性
 五尺三寸

▲化粧用品 ▲白粉、御園 ▲香水、柏來 ▲歯磨、オスラ

▲石絵、玉石、ホーサン ▲洗粉、不用 住宅 東京市下谷區中根岸町九十番地

吾國新派劇壇の立女形としては河合武雄と優と恐く天下双壁なるべし。而して河合を櫻花とせば優は正に梅花たり。實に櫻花は爛熳として其美しさ限りなし。梅花は櫻花の如く華かならざれば誠と言れぬ詩味のあるなり。これ兩優の眞價の分るる所以。優は明治四年七月日本橋區桶町に呱呱の産聲を揚げし正直正銘の江戸兒なり夙に文學思想あり、號を綠樹又みどりや小松と稱し俳諧に巧なり。天性演劇を愛好ししばしば素人芝居にも出勤せしが、二十五年十一月青柳拾三郎主任の一座に加り伊井蓉峯等と北海道へ乗込みしがその俳優としての初舞臺なり。其後山口、伊佐水、青木、福井等の諸座に加入し重寶がられしが後年大阪に足を止め朝日座(一時天満座)に立籠り事ありにて秋月と相俟て關西新派劇壇に貢献せしもの妙からず三十九年久振りにて歸京す。妻女を浪子(十四年生)と呼び、去る三十四年結婚せしものなり。

部

部

君 郎 三 録 下 木



木下三郎

眞砂座出動本名 大槻 辰生
雅 號
綠 蔭

- 味 趣
- (小説其他) 混六
 - (雜誌) 不定
 - (新食) 魚、餅菓子
 - (飲食) ビール
 - (煙草) 一日六十本飲む
 - (愛用品) 白粉、パッチリ
 - (化粧品) 香水、色々
 - (娛樂) 芝居見物
 - (衣類) 大島
 - (愛玩) 植木
 - (崇拜) なし
 - (氣丈) 温厚
 - (身丈) 五尺
 - (娛樂) 好なし
 - (衣類) なし
 - (愛玩) なし
 - (崇拜) 著實
 - (氣丈) 五尺二寸
 - (身丈) 不用
 - (化粧水) ライオン
 - (齒磨) ライオン

き
ノ
部

君 操 村 木



木村操

本郷座出動本名 林 庄之亮

- 味 趣
- (小説其他) 幽芳其他色々
 - (雜誌) 時、都、萬
 - (新食) 肉類
 - (飲食) サイダ
 - (煙草) 飲まず
 - (愛用品) 白粉、みその
 - (化粧品) 香水、ムスク
 - (娛樂) 芝居見物
 - (衣類) 大島
 - (愛玩) 植木
 - (崇拜) なし
 - (氣丈) 温厚
 - (身丈) 五尺
 - (娛樂) 好なし
 - (衣類) なし
 - (愛玩) なし
 - (崇拜) 著實
 - (氣丈) 五尺二寸
 - (身丈) 不用
 - (化粧水) ライオン
 - (齒磨) ライオン

き
ノ
部

優は明治十三年一月二日浪花に生れ、三十二年の頃初めて劇界の人となり、十数年前上京し伊井一派に足を止め一意専心藝術の研鑽に努力の結果は上達又上達、今や恐らく東都の好劇家にして優の名を知らざるなく、知つて而してその素晴しき進境を認ざるものなけん。性柔順、容姿花の如く玉の如く雪の如し、勿論且にして、年増、令嬢何れにても難はなれど多く無垢な娘形に成功する様なり。兎に角未だ三十路にも餘らぬ花形、而かも藝風頗る巧緻なるものあり。唯達つて悪口を叩けばや、國ナマリがあるやうなれど、是れとても所謂白壁の微瑕たる事勿論々々、是れに由つて之を觀るも優の前途や多々益々好望とせざるべからず。妻女を雪子(十八年生)と呼び四十年中結婚せしものなり。

▲石鹸、ゲーバ
▲洗粉、オノール
住宅 東京市京橋區木挽町一丁目十一番地

優は明治十三年五月十二日を以て生れ、三十三年即ちその二十一歳の十月四ツ谷座に出動して青木千八郎一座の「魁梅次」と云ふ狂言に乾兒小佛音五郎を勤めたのが初舞臺である。其後淺草公園常磐座の氷野好美の奨励會に加入せし以來酒は遠ざけ色を漁らず唯々藝の研鑽に何者をも犠牲に供し勤勉したので長足の進境を示し遂に先輩の認むる處となつて三十六年即ち二十四歳の三月早くも奨励甲部に昇進せられた、其時の紀念の句はこれである。

「初午や餓鬼大將と昨日まで」
奨励會解散後は一時彼處此處へ出かけたが最後に眞砂座の座付俳優となりて今日に及むたのである。その得意とする所は敵役であらうが三枚目師としても確かに輕妙の趣がある。而して優は誠に眞摯な熱誠なる人で、妻女は秀子(十六年生)と呼び某薪炭商の娘で間に新二(三十九年生)と云ふ一男がある。

▲石鹸、アイボレ
▲洗粉、樂屋
住宅 東京市日本橋區濱町三丁目二番地

木下吉之助君



本名 藝名に同じ

本名 藝名に同じ

き 部

趣味

- 小説其他 何と限らず
- 演劇 歌舞伎、
- 文藝 柳、毎夕、時事
- 新聞 生卵入りイスカ
- 雑誌 日本酒少量
- 飲物 敷島
- 食物 敷島
- 煙草

愛用化粧品
 ▲白粉、みその
 ▲香水、スミレ

愛用衣類
 網打 掛もの
 掛もの 辨天、観音
 掛もの お人よし
 掛もの 五尺一寸四分

愛用身丈
 ▲化粧水、四季の花
 ▲歯磨、オペラ

木下君あたりが劇壇に活躍されて居る限りは未々而かく女優などの必要は認めない。と云ふのも畢竟第一容姿が麗しく一舉一動女性になり切つて居て些細な點迄も巧みに女の特性を寫し出すからである。抑々優は明治八年六月二十五日京橋南横町に生れたので父は道太郎と呼んで有名な人形の彫刻家である。二十歳の時角藤一座へ加入して大阪へ行き後成美園へ出勤してこゝで充分腕を研ぎ上げたので木下の名追々人の知る處となつた。其後上京して大俳優に列し不知歸の浪子、女夫波の静子などを演じエラク評判となつて今日に至つたので此間種々様々な珍話妙談があるが到底一頁にもものする事は不可能な話し、性質は内氣過る位、然して一度び舞臺へ立つて微笑する時や丈夫をして心恍たらしめ、その泣や如何なる木強漢と雖も涕泣せしむる事易々たり。

住宅 東京市浅草區橋本町二十八番地
 電話下谷一千五百七番(新丸取次)

岸一夫君



山岸一夫

東京座出勤本名 片上幸七 雅 號 幸

東京座出勤本名 片上幸七

趣味

- 小説其他 涙香、涙六
- 演劇 文藝
- 新聞 時事、都
- 雑誌 天ぶらうどん
- 飲物 日本酒、ビール
- 食物 敷島
- 煙草

愛用衣類
 奇術、風琴
 派手 花
 観世音
 氣早 五尺一寸

愛用身丈
 ▲化粧水、ローヤル水
 ▲歯磨、象印

き 部

優は明治十二年十一月二十八日を以て大阪市西區江戶堀上通り十丁目百五十一番屋敷に生れ父は回漕業を營み優はその四男なり。二十九年八月京都新 京極福井座にて川崎黒鷲の一座に加はり「狂美人」の狂言に大工の松三に扮せしが初舞臺なり。爾後幾もなく同一座解散せられしより一旦廢業なし實業に従事する事二年間なりしが再び三十二年大阪松島八千代座にて離間小次郎の門に入り數回興行の上或る一座に加はり紀州新宮方面を巡業なし三十二年歸阪し同年三月天満壽座にて楠本隆一等と共にいろは團なる旗幟を翻し二年間打續け一時好人氣を博せしが三十五年四月 上京なし四ッ谷末廣座の原澤一座に乘込み六月興行「しがらみ草紙」に刑事笹岡を勤めしが東京にての皮切りなりそれより改良座青木千八郎一座へも出勤し更に三十八年更めて藤澤淺二郎の門弟となり同年十月興行より藤澤に附隨し今日に至れり。

住宅 東京市浅草區橋本町六番地岸上藏之助

み 部

東京座出勤本名 横田 佐吉

紅 花

水田紅美



水田紅美

趣 味 (小説其他) 幽芳外色、
 雜 誌 藝術、文藝、新小
 新 聞 國民、都
 食 料 ビフテキ、燒芋
 飲 料 ビール少量
 煙 草 嫌ひ

愛用化粧品 ▲白粉、みその
 ▲香水、スミレ

愛用化粧品 ▲化粧水、レイト
 ▲歯磨、菊世界

娛樂衣類 旅行(山へ)
 樂 器 橫絃
 玩 具 舶來おもちゃ
 拜 禮 不動、稻荷
 質 價 沈黙
 丈 五尺一寸

身 氣 崇 愛 衣 娛

女形として一點の缺如なくその前途多大の望を屬されつゝある優は明治二十一年六月十一日神田東松町に生れ父は八十吉といつて紅間屋である。優は其次男と生れ錦城中學二年迄で通つたが、父は堅い家へ奉公させようとする或る呉服商へやる可く學校を退學させた。然るに優は自己の好む處に因つて身を立てんとして、俳優たらんことを一日父母に相談した處が、父母は以ての外の事とし、いつかな承諾を與へなかつた併し作ら優の決心は半平とじて動かすべからず、終に意を決して水野好美の門弟となり藝名を水田紅美とつけて、始めて俳優となつたが此時は非常に嬉しかつたこの事である。三十七年三月狂言が一番目日露戦争二番目が喜劇此時初舞臺を勤めたのである。其後水野村田合同劇以來水野と別れ藤澤淺二郎の世話になり以て今日に至つたのである。

▲石粉、アイボレ 住宅 東京市神田區東松下町四十二番地横田
 ▲洗粉、歌舞伎

水野好美



水野好美

趣 味 (小説其他) 藝術に關係ある
 雜 誌 色々、蟹、シヤ
 新 聞 コの瓶
 食 料 酒、蟹、シヤ
 飲 料 酒、蟹、シヤ
 煙 草 扇草

愛用化粧品 ▲白粉、みその
 ▲香水、金助

愛用化粧品 ▲化粧水、レイト
 ▲歯磨、オハラ

娛樂衣類 思ふ儘の芝居を
 樂 器 珍柄好み
 玩 具 古大名道具特
 拜 禮 加藤清正
 質 價 大名道具
 丈 五尺三寸五分

身 氣 崇 愛 衣 娛

本名 藝名に同じ
雅 號 孤 芳

優は播州明石の出生、文久三年九月二十日は其誕生日なり。父を好生と云ひ明石藩歴々の士、天性繪畫を好み幼少の頃東都に笈を負ひ孤芳と號し油繪師として夙に「花籠」などを云ふ雜誌も出し兎に角吾が美術界に其名を知られたり。然るに明治二十四年演劇は一の畫とならざるべからずと持論より遂に劇界に身を委ぬるに至りぬ。有繁は後年東都劇壇を風靡せし丈あり萬事器用に演るよりその聲望日一日と盛んになり、淺草常磐座に獎勵會を組織し實に七十七回を打續け又毎日新聞全國俳優人氣競争に月桂冠を得しが如き、如何に多く吾新演劇の興隆に裨益し人氣の旺盛りしかは此の事實にて證明せられたり。性穩健なれど時に或は剛直の所もあり大名或は殿様とは是等の性情に因り得たる仇名なるべし然れども俳優間の徳望優の如きは稀とすべく部下を愛する吾子の如し嘗て部下一同より銅像を送られしも宜なる哉。

▲石粉、レイト 住宅 東京市淺草區花川戸一番地
 ▲洗粉、オハラ

み 部

新本郷座出動本名 藝名に同じ

水野正重君

趣味

- (小説其他) 紅葉、春葉
- (雑誌) 文藝、毎電
- (飲食) 鹽焼物、ビール
- (煙草) 救島



水野正重君

- (娯楽) 自轉車、飛白類
- (衣服) 古道具
- (愛玩) 大神宮
- (氣質) 不撓
- (身丈) 五尺二寸五分

化粧水、不用
齒磨、象

僕は明治十四年二月十六日の生れで、生地は磐城國
東白川郡竹芝村、十五六歳の時法律を勉強する積り
で上京した處が間もなく學費に差支へたので終ひに
は喰ふに困つてしまつて已むを得ず役者になつた譯さ
丁度十八の時だよ淺草座の伊井一座で本多小一郎の弟
子になつて狂言はなんでも馬頭の又五郎とか云ふん
だつたよ。それで僕は仕立の百姓をしたのが初舞臺さ。
然し最初から金は貰へないから致方がない君全くの話
晝間人車引になつて夜役者をするよ云ふ悲しい境遇さ
併し不届やつた處が師匠の本多のお庇護でさうさ其
厄介になつたのだ。以上は優の直話であるが一點秘立
のない處が水野君の眞價のある所以である。其藝風剛
健で大い敵役に扮して絶好な所がある。其後有ゆる地
方を巡業し柳盛開盛座等へも出動した。三十八年十一
月五日師本多不歸の客となつて以來喜多村綠郎に師事
して居るのである。

石鹼、アイボレ
洗粉、クラン

住宅 東京市本郷區湯島新花町四十九番地

柴田善太郎君

趣味

- (小説其他) 悉侍讀む
- (雑誌) 同、報知
- (飲食) 肉類、野菜
- (煙草) 日本酒、茶
- (草物) なんでも宜し



柴田善太郎君

- (娯楽) 弄花、藝談
- (衣服) 飛白類
- (愛玩) 名所繪葉書
- (氣質) 眞直、法華經
- (身丈) 短氣、五尺

化粧水、四季の花
齒磨、ライオン

眞砂座出動本名 藝名に同じ
雅 澁 升

優は明治八年三月十日の出生でその十七歳の時初め
て川上音次郎の門を叩き幾もなく嶄然一頭地を抜き一
時川上座の四天王の隨一と迄で呼ばれた人、二十歳の時
川上一座で北海道札幌興行の時甲部へ逼入されてから
今日迄での経路を仔細に探究すると確かに凡優の及ば
ざる特色を見認ざるを得ない。それはと云ふに今日迄
ズート座頭で押通して来た事である。元來技藝の巧拙
は姑く置き人の長となる側の人と、又使役される側の
人と二通りあるが優は確的所謂座長としての資格のあ
る人即ち前者の質の人である。今は眞砂座で専心後進
の引立を唯一の目的として居られる。優がその部下を
愛する事は又非常で正に特筆大書すべき價値がある。
それから柴田さん秘藝はあるかねと問へば「あると
もあるとも酒を呑むで亂暴することだ」には聊さか恐
縮せざるを得なかつた。兎に角新派一方の親玉として
耻ざる人、妻女を九子と呼ぶ。

石鹼、ウズラ
洗粉、スマイル

住宅 東京市本所區番町十三番地

榎口角兵衛君



榎口角兵衛

本名 榎下田角三郎

- 趣味 (小説其他) 滑稽、文藝、演習
- 嗜好 (飲食) 野菜、日本酒、一升位
- 愛用品 (化粧品) 白鉛、香水、色々
- 娯樂 (衣服) 女を口説、釣り
- 類玩 (玩具) 洋服、松坂木綿
- 拜玩 (質) 金比羅、短氣
- 崇愛 (身) 五尺二寸三分
- 化粧水、二八水
- 齒磨、オペラ

ひ 部

柴野久彌君



柴野久彌

開盛座出勤本名 川崎久次郎

し 部

- 趣味 (小説其他) 紅葉、文藝、洋食
- 嗜好 (飲食) 洋食、日本酒
- 愛用品 (化粧品) 白粉、香水、色々
- 娯樂 (衣服) 女服、洋服
- 類玩 (玩具) 三味線、佛
- 拜玩 (質) 勝氣
- 崇愛 (身) 五尺二寸三分
- 化粧水、レート
- 齒磨、オペラ

▲石粉、花王

▲洗粉、樂風 住宅 東京市京橋區長澤町二十九番地

優は明治十六年八月一日を以て淺草田町に生れ父を
川崎長二郎と呼ぶ。十五歳の時川上座で柴田善太郎の
門に入り『日本娘』の時仕出を勤めたのが初舞臺である
其後横濱座又開盛座等へ出勤したが徴兵検査に合格し
次いで日露戦争に参加し三十八年芽目度凱旋し勳八等
に叙せられ年金迄で貰つたが、昨年六月以來開盛座へ
出勤して居るのである。優は老役が得意だそうだが最
も立廻に秀でゝゐるやうだ。

伊井一派にて乙部の腕達として聞へたる優は明治十
二年八月五日群馬縣桐生町羽二重商佐羽勝次郎の長男
と生れ二十九年九月即ち十八歳の時女形として知ら
れたる故恩田五郎の門に入り榎口角兵衛と名乗り、同
一座が故野崎三郎と合同して地方を巡業せし際随行し
三十一一年轉じて東京市村座伊井山合同劇の十一月興
行に出勤し仕出を勤めしが東京にての初舞臺にて追追
引立てられ三十三年五月赤坂演伎座にて伊井一座の一
番目「膽取」二番目「海賊房次郎」を演せし時代より相
當の役もつきとが翌月深澤恒造と口論の末同一座を脱
して静岡若竹座へ乗込み立物として出演中師恩田五郎
當時沼津千鳥座に在り病氣危篤の報に接せしかば直ち
に走せて見舞しが遂に同月十二日を以て黄泉の客とな
りし後は柴田善太郎に師事し上京して宮戸、常磐、國
華、新富、開盛の諸座へ出勤し後再び伊井一座に戻り
新富本郷座へ出勤す。

▲石粉、住王 住宅 東京市日本橋區濱町三丁目三番地

も

部

本名 百木吉松
雅 號
樂山又日影

桃木吉之助



桃木吉之助

趣 味 (小説其他) 柳瀝、水陸、文藝、齒報、都、毎電、油漬もの、サイダ、敷島

(愛用品) 白鉛、色々、香水、バイオレット

草物 (牙) 齒、磨、オメラ

藝 (樂) 投扇、就、俳句、横絃物、なし、弘法大師、細心、五尺

衣 (類) 質、拜、玩、類、樂、大、師

氣 (身) 丈、質、拜、玩、類、樂、大、師

關根達發君



關根達發

本郷座出勤本名 關根橘太郎
雅 號
號齋又達發子

趣 味 (小説其他) 露伴、太陽、萬朝、まぐろ、趣味、喰、草、物、物、草、物、草、物

(愛用品) 化粧用品、白粉、香水、色々

藝 (樂) 散少、久留米、飛白、松の木、勝海舟、活途、五尺六寸

衣 (類) 質、拜、玩、類、樂、大、師

氣 (身) 丈、質、拜、玩、類、樂、大、師

部

嘗て畜生腹等を演じ満都の好劇家を唸らしめ老女役(特に悪)として通れ天下一品と稱せられし優は明治五年二月二十六日を以て静岡に生る。數年前川上の板垣退助遭難實記を見物せしが動機となり一家親族の抗議を排し遂にその二十二歳の時武智元良一座に加入し遠州見附の磐田座に於て「今紫」の狂言に喜助に扮せしが初舞臺にて福井茂兵衛一座に加はり専ら技藝を研ぎ後松本正雄、伊藤文夫等と一座を組織し中國筋を巡業し三十一年一月大同團に迎へられ上京し「鼠小僧」の萬引婆を演じ其名を知られ更に「殘雪」の花江を勤めその名俄に高く全都に轟きたり爾來本郷、新富、宮戸、眞砂、國華座等に出勤したりしも後年は多く地方巡業をなすより好劇家の失望しつつある所、併しながら地方に於ける優の人氣や偉大なるものあり。性温順風雅を愛し俳句に堪能なり。

▲石鹼、花玉、洗粉、不用
▲住宅 東京市淺草區猿蓑町一丁目卅五番地

優は明治十六年一月十四日を以て下谷金杉に生る。三十四年七月伊井蓉峰の内弟子となり一ヶ月程同家に食客たりしが故有て同家を出で正業に就きしも翌三十五年十月二十八日勉勵會一座に加入し宇都宮壽座へ乗込み「文七元結」に仕出しの魚屋を勤めしが皮切りにて三十六年二月中旬迄で前橋川越等を巡演し更に同年八月尾尾に乘込みしが不幸三日より病を得て遂に赤十字病院に入院するの已むなきに至り其苦痛の爲め一度俳優たる事を断念し某官省に出勤せしがまた感ずる所あり三十七年六月大阪朝日座に加入し翌年一月名古屋へ乗込み間もなく歸阪後は更めて高田實と師弟の約を結びしまゝ同年四月朝鮮へ渡り約十ヶ月各地を巡業し同年末大阪へ戻り朝日座に二ヶ月中座に三ヶ月興行の上即ち三十九年六月當時東京本郷座にて盛名漸く高かりし師高田實の許に返り「宿り木」の狂言以來高田に附隨せり。

▲石鹼、花玉、洗粉、不用
▲住宅 東京市小石川區小日向水道端町二丁目六十四番地

新式歐速算法

時は金也!!

現今世事の頻繁に伴ひ諸官衙會社商店の計算複雑なるに際し
 茲に多大の手数を省くべき新案あり其は他に非らず過般某俳
 優が歐米漫遊の途次傳習せられし奇術にて從來の十呂盤を用
 ひ誰にても一目瞭然解し易く違算の憂なく普通算術より早き
 こと殆ど三倍なり

▲傳習料壹圓(郵券代用一割増)送付あれ直に通信教授す

▲了解し難き點あれば習得せらるる迄で質問に應ず

▲此速算法が萬一實用に適せざる時は直ちに傳習料を返戻す

東京市本郷區湯島町四丁目五番地

演藝俱樂部

歌舞伎俳優之部

(其二) ▲順不同

俳優	名	本名	生年月日	現住所
片岡市右衛門	鈴木島吉	嘉永二年八月生	淺草區高原町七	
坂東市三郎	野田久次郎	明治五年十一月生	神田區	
市川いてふ	佐藤正	同十六年十二月生		
澤村い之助	田中良太郎	同二十四年十		
片岡市勝	後藤賢次	同十六年十		
尾上榮次郎	伊藤長三郎	同四年九日		
市川六助	龜山一太郎	明治六年		
市川八左衛門	小林長次郎	明		

俳 優 明 鑑

尾上柏五郎	尾上柏藏	尾上柏三郎	尾上柏三郎	坂東八作	市川花菱	中村春駒	中村播十郎	中村播磨藏	阪田半五郎
渡邊泰次	可知兼三郎	松村忠次郎	階堂龜藏	三枝延之助	峰村久太郎	岩城牧太郎	飯塚利太郎	椎名鹿松	柴田仙太郎
明治二十九年九月	同十	慶應二年	明治六年九月	五十歲以上	明治二十二年十月	同二十三年十一月生	同十一年七月生	同十七年四月生	同四年四月生
本所區	本所區	本所區	本所區	本所區	本所區	本所區	本所區	本所區	本所區
淺草區千束町三ノ一四	下谷區萬年町二ノ三	深川區松村町一	淺草區榮久町一ノ二	京橋區出雲町二三	淺草區馬道六ノ一五	同	同	同	同

歌 舞 伎 俳 優

澤村春五郎	市川にしき	市川兵六	澤村寅太	澤村寅太	中村時六	市川富丸	市川都喜枝	中村富之助	中村蝶兵衛	中村蝶藏
紀の國屋方へ照會	水野紫郎	宇田川富一郎	森下省三	鈴木寅太郎	世良三郎	杉山正吉	橋本平三	阪東調十郎に同じ	小野仲太郎	野村作次郎
明治十九年主	明治二十七年十月	明治二十年九月生	同十七年四月生	同十九年十二月生	同三十二年三月生	同二十年十一月生	安政五年生	慶應三年三月生	同	同
麻布區北新門前町三	京橋區南鞘町猿十郎方	淺草區猿若町一ノ二〇	下谷區龍泉寺町二二〇	淺草區千束町一ノ三二	日本橋區萬町六浦五郎方	本郷區湯島天神町一ノ七	本所區番場町二三	淺草區阿部川町八一	同	同